

になって勢力をましたので、一般の民衆は生活がますます苦しくなり、流浪人や盗賊がおこつても、これまでの軍団の兵力では取締ることができなくなつた。そのため豪族や役人たちは、自分の財産を護るために武備をかためるようになり、源氏や平氏がだんだん兵力を集めるようになってきた。

天慶四年（九四一）藤原純友が太宰府を襲撃して、北九州に兵乱が起つたところ、九州にも武士が成長してきた。天慶九年、太宰大貳小野好古は「九州では暴狂勇敢な連中が徒党をなして、兵器をねり、人馬をあつめ、狩獵や借金を取立てを口実にして、郡司をおびやかすし、庶民から牛馬を略奪している」と奏上している。地方武士は、武力をもたない政府によって、国衙の役人や、治安維持に当たる追捕使・押領使などに任用され、しだいに勢力を強めていった。

関白藤原道隆の子である隆家が太宰権帥の時、寛仁三年（一〇一九）に北朝鮮・シベリヤ方面の刀伊の賊が五〇隻ばかりの船で、博多・松浦地方に攻めてきた。隆家は九州各地の豪族を集め、これをうち破つた。その後、隆家の子孫が九州各地に住みつき、肥前の国にも散らばつて高木氏・竜造寺をはじめ、於保・八戸・河上・国分氏などと名のつて豪族になった。一方松浦方面には延久元年（一〇六九）源久が肥前国松浦郡検非違使として西下し、はじめて松浦姓を名のつて松浦党をおこした。

第三章 中世

第一節 概説

中世とは、源頼朝が鎌倉に幕府を開設した建久三年（一二九二）から、織田信長が十五代將軍足利義昭を追放をした天正元年（一五七三）までの約三百七十年間で、時代区分としては、鎌倉・南北朝・室町（戦国期を含む）の三時代に分けられる。

鎌倉時代 律令体制の衰微から発生した武士は、次第に勢力を得て、ついには律令体制そのものを根底からくつがえして、いわゆる前期封建社会の確立をみる。

鎌倉幕府は、こうした封建社会（武家社会）の頂点にあつて、地方武士をもつてその基盤とした。つまり中世社会の武士は地方土着を本質とし、平素は農耕に従事しているが、一旦緩急の場合は戦闘員として馳せ参ずるという、いわゆる主従関係を結んでいた。その中軸となつたのは守護・地頭・御家人である。守護・地頭は初め源義経追討の名目で、幕府が朝廷に請願して設置したものである。

地頭は、文治元年（一一八五）守護とともに、全国に公領、荘園の別なく設置されたが、公家寺社の反対により、翌年の七月平氏が

五 神と仏の信仰

日本の国は先祖を尊ぶ風習が強く、奈良時代から平安時代にかけてたくさん神社ができた。平安時代にあつた神社は、荒穂神社（基山町）・四阿屋神社（麓町）・日吉神社（神埼町）・金立神社（佐賀市）・甘南備神社（大和町）・与止日女神社（大和町）・天山神社（小城町）・稲佐神社（白石町）・堤雄神社（江北町）・丹生明神（塩田町）・田島神社（呼子町）・鏡神社（唐津市）などである。

また奈良時代、国分寺を全国に建て、仏教を奨励したので、この時代もたくさん寺院が建てられた。その主なものは靈仙寺（東脊振村）・法勝寺（嘉瀬町）・宝琳院（佐賀市）・常福寺（牛津町）などである。このように仏教が盛んになるにつれて、いつしか日本古来の神霊と一緒に信仰がはやつた。これは本地垂迹といわれ、神の根本は菩薩であり、仏が仮に神の姿になって、日本を助けにこられたというところからおこつたものである。

一本村には当時の文献に出てくるような古社はないが、隣村にある脊振神社は『三代実録』に、貞観十二年（八七〇）從五位下を授けられたことがみえる。脊振山頂には水神である弁財天が祀られ、ここから城原川の水系が発達している。この水系の農耕民が水利への願望をこめて、脊振神社の社殿をつくつたものとみられ、本村の農民も、何らかの形でこれに参加したものとみられる。

らの没収地や頼朝の私領に限定した。しかし、次第に幕府の権力をうしろだてとして、寺社・公領を侵略した。ことに承久の乱以後は、朝廷・貴族の所領にも新補地頭が置かれて、この制度は全国に及び、その職務は公領、荘園内の治安警察と年貢徴収であつた。

肥前の地頭には、文治元年（一一八五）藤原季家が佐嘉郡龍造寺村の地頭になつたのをはじめ、高木宗家の国分寺の地頭、源圃の西松浦郡山代村の地頭などがあつた。また、他国から肥前に入った武士も多かった。

三瀬山内には、平安時代の末から鎌倉時代にかけて、藤原氏・羅野氏・野田（三瀬）氏らが相次いで来着し、各峡谷盆地を領有支配するようになった。

守護は、国内御家人の統制と、謀叛人の追捕・殺害人の検断・内裏大番勤仕の指揮、いわゆる重犯三か条をその主な任務とした。九州における守護はおおかた鎮西奉行の兼務とした。鎮西奉行は幕府開設のころは部將の天野遠景（のち武藤氏）が世襲した。武藤氏は一方筑前・豊前・肥前・壱岐・対馬の守護を兼ね、他方太宰府役人の首長としてこれを支配し、太宰少貳に任じられたので、のち少貳氏と呼称するようになった。

永仁元年（一二九三）ごろから、代々北条氏一族が就任する慣習となつた。これが鎮西探題である。

鎌倉幕府の基盤であつた主従関係も、元寇襲来による財政困難と、恩賞問題のもつれが起り、ついに天皇制を望む武士らと結んだ朝廷

側に政権が移るようになった。

南北朝時代 元弘三年（一三三三）足利尊氏をはじめ新田義貞らの有力な御家人が、幕府をはなれ天皇の軍に加わったため、ついに鎌倉幕府は滅亡し、後醍醐天皇による政治いわゆる建武中興（建武新政）となった。しかし、この新政も足利尊氏の謀反によって、わずか二年で終り、後醍醐天皇を中心とする南朝と、光明天皇を擁立する北朝との二派に分かれて、その後六十余年間相対立する南北朝の乱世となった。

室町時代 南北朝の対立も次第に南朝側の劣勢となり、元中九年（一三九二）ついに北朝に合一した。

この時代の郷土肥前は、ほとんど九州探題によって支配されていたが、室町幕府の無力と相まって探題の勢力も弱く、争乱のちまたと化した。ことに南朝側の残党菊池氏、北朝側の幕臣・探題方・及び鎮西奉行の子孫少弐氏が三つともえになって、長期間闘争を展開した。

応仁の乱（一四六七―七七）以後は、幕府の急激な衰退によって、九州探題は廃滅同然となり、群雄割拠して戦国争乱の時代となる。しかし、こうした争乱によって自己の基盤を固めたのが戦国大名で、九州では東の大友氏、西の竜造寺氏、南の島津氏などであるが、それらが次の後期封建社会に、大きく登場する。

また他国から肥前に入った武士には、杵島郡柄崎荘に後藤氏、三根郡綾部荘に京都から下ってきた綾部氏、嘉祿年間に小城郡晴気荘に千葉氏、摂津国から多久荘に多久宗直、文永弘安の役後伊豫国から杵島郡長島荘に橘薩摩（後の渋江氏）などがあつた。これらは武士による荘園の侵略ともみられるのである。

神埼荘の北端三瀬山内もこの例にもれず他国から来住した武士が掌領することとなった。この時代の三瀬山内には山の仕事や狩猟だけでなく、農耕を営みながら居住する住民も多くなり、三川を流域とする各扇状盆地毎にそれぞれ村落を形成し、各村落には名主または惣領がいて荘官をつとめ、年貢の徴収や村の開発、住民の社会生活あるいは村落自衛の指揮統率に当たっていたと考えられるが、当時の状況を知る史料に乏しく、限られた古記・伝説や、外郭地域の情勢などを頼りに、推察するより外はない。なお、この地が神埼荘の北端であつたことは、唐河神社の鰐口に「奉掛唐河大明神御宝殿、建保元癸酉九月吉日、肥陽国神幸莊薙野山氏子中」と刻銘されていることから推察することができる。なお、当時、肥前の国を「肥陽国」、神埼荘を「神幸莊」と呼んでいたのであろう。

本地域をいなく脊振山は、古くから北九州の霊地とされ、神社・仏閣・坊舎などが建てられていたといわれ、脊振千坊の名が残っている。脊振神社には既に平安時代清和天皇の貞観十二年（八七〇）に授位のこと記されているので、この時代には脊振神社を中心として山内の開発も進んでいたと考えられ、神仏合祀の頃は脊振山に入

第二節 鎌倉時代の肥前と

三瀬山内

一 三瀬山内の武士団

源頼朝が鎌倉に幕府を開いてから北条高時の幕政が滅亡するまでの約百四十年間を鎌倉時代と呼んでいる。

この間九州では多くの武士が起り、中でも筑前筑後の小弐氏・豊後の大友氏・薩摩の島津氏・肥後の菊池氏・日向の伊東氏などが、最も強力であつた。

肥前武士では高木氏・龍造寺氏・国分氏・松浦党の草野氏その他の武士が台頭していた。これら肥前武士のほとんどは、平安時代から源平争覇の頃まで平氏に属していたが、源頼朝が平氏を討伐するころは松浦党以外はみな源氏に味方した。

頼朝が幕府を開くと、義経らの追捕を名目として全国に守護地頭をおいたが、建久七年（一一九六）鎮西探題・武藤（小弐）資頼が肥前・筑前・豊前・豊岐・対馬の守護を兼務してからは、鎮西探題が代々守護を兼務するようになった。地頭には前述のように文治元年（一一八五）藤原季家が佐嘉郡龍造寺村の地頭になったのをはじめ、松浦党の源国が西松浦郡山代の地頭、高木宗家が国分寺の地頭になった。

修験山伏や僧侶たちの往来も繁く、脊振山末寺の当村長谷山観音寺や清流寺との交流もあつたに違いない。このように外来の人々の出入が多くなれば、山内にある三瀬の地域社会も外郭の筑前・肥前の政情と無縁ではあり得なかつたであらう。

平氏敗滅のとき落人が九州に入つて後、鎌倉幕府による封建政治体制が進められるに及んで、前項で述べたように新たに補任された地頭や本州や四国方面から肥前に移住した豪族・武士も多かったが、三瀬山内の支配者はすべてこのような外来の武士であつた。

一 藤原山領主来着

平安時代末期から鎌倉時代にかけて三瀬山内に入り、まず藤原村を領有支配したのは、藤原鎌足の末孫といわれる藤原内匠である。土師の『八龍神社社伝』には、建久二年（一一九二）に藤原内匠が上京する際、海難にあつて八龍宮に神明の加護を祈ったところ、無事に岸に着くことができたので、帰郷後翌三年四月に社殿を造営寄進し、領地の守護神として祭り、家来の山本左京大輔藤原貞房を宮司に任じたことが記されている。

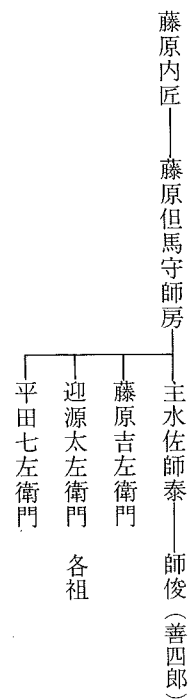
内匠が何時この地に來着したかは明らかでないが、平安後期には中央政界から脱して地方に領地を求めて勢力を得ようとする貴族や氏族が多かつたことから、藤原氏もその一人であつたか、または西国鎮撫の命に従つて下向する将士に随行して来て、そのまま山内に入ったか判明しないが、建久二年に上京したことをみると、それ以

前からこの地に居住していたことが確かであろう。久寿元年（一一五四）に同系の藤原兼基が柳野山に到着しているが、藤原姓を名乗らず、地名と姓を藤野と改めたのは、藤原村の名がすでに山内にあったからと考えられ、藤原内匠は藤野氏（兼基）の来着以前に山内に居住していたと思われる。

藤原氏は後に神代氏に臣従し、神代七人衆の一人として活躍した。

藤原氏系譜

大職冠藤原鎌足末孫



北山大宮司系譜

山本左京太輔藤原貞房——山本長門守——山本下総守——

山本上総守——山本右京——山本久奈居——

2 藤野山領主来着

藤野山はもと柳野山と呼ばれていた。藤原内匠と前後して山内に入り、柳野（藤野）山城主となったのは藤原式部少輔兼基である。

人皇七十六代近衛天皇の久寿元年^甲（一一五四）源為朝が自ら鎮西八郎為朝と称して九州に猛威を振り、良民を苦しめ朝廷に叛いたので、朝廷では為朝に協力するものの禁圧を太宰府に命令すると

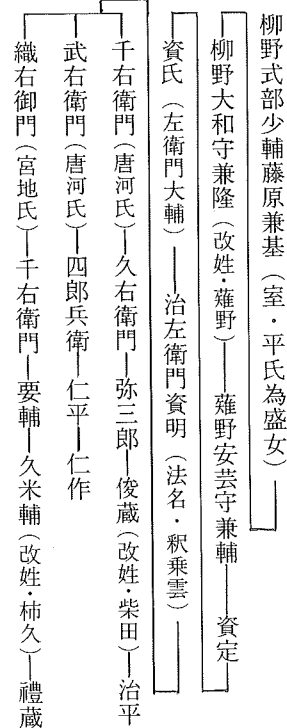
もに、鳥羽院禁裡北面の武士を監使（目付役）として派遣した。こ

の監使五人のうちの一人、藤原李清（龍造寺氏祖）に随行して来た藤原式部少輔兼基は、為朝の叛乱が鎮まった後、当山内に来着して、居城を柳野山に築き、七郎神の氏子を領民として一帯を掌領し、姓を地名の柳野と改めた。

その嫡子柳野大和守兼隆が相続して柳野山城主となり、人皇八十四代順徳天皇の建保元年^癸（一二二三）に、南都奈良の都から、藤原氏の祖神・天津児屋根命を祭る春日大明神の神霊を勧請して、氏祖と領地の守護神として祭祀し、唐河大明神を建立した。このとき当郷の地名柳野山を藤野山とし姓を藤野氏と改めたのである。

藤野氏系譜

大職冠藤原鎌足拾壹世



3 音成遠江守来住

文治元年（一一八五）平氏一門が長門の壇ノ浦に滅亡したとき、

生き残った将士は安住の地を求めて深山や人煙稀な山里に敗走離散したが、平氏に従軍していた音成遠江守は一族と共に逃れてこの北山里に潜入し、落屋敷（現在伯父屋敷）に住居を定めた。おそらく平氏にゆかりのある藤原内匠の庇護をうけたのであろう。音成氏はのちに奥山の氏長者と称され、神崎口山内の長者広瀧氏、佐賀口山内の長者佐保氏らとならんで三長者の一人に数えられた。遠祖は天穗日命から十四世目にあたる野見宿禰だという。我が国では古い時代

には、死者がでると殉葬する風習があった、野見宿禰は垂仁天皇の御代に皇后崩御に際して、殉埋の悪政であることを奏上し、土師三百人を率いて自領の土をとり埴輪を作って差上げたので、天皇は深く感得せられて、埴輪を用いて殉人に代えられた。この功によって土師の姓を賜わった。

音成遠江守は先祖のこの故実にならんで、居住地の名を土師と名づけ、氏祖神天満宮の祠を建てて祭った。その後、一族は梅谷氏らの諸流に分かれて長く栄えた。藩政時代に奥山内の大庄屋に補任された音成六兵衛は遠江守の子孫である。

4 三瀬山領主来着

平安末期から鎌倉時代にかけて、およそ百余年の間、三瀬山内には前記藤原・藤野の両氏が、それぞれ藤原山村・藤野山村の二帯を領有支配してきたが、龜山天皇の文永元年（一二六四）に、東国の士・野田周防守大江清秀が一族を率いて北山内に入り、三瀬山の杉屋敷

に設営した。しかし杉屋敷は清浄の霊地として住民の畏敬する処であつたので、他の適地を選索して、現在の山田地蔵屋敷の所に館を構え、三瀬山一帯を掌領した。住民はこれを金山城といったが、現在館の辻という地名が近くに残っている。

住民を愛撫し、行政を整えたので住民は親しみ、三瀬山をはじめとして一万余瀬・奈於・輻・弘瀧山など数箇所を掌領するようになったと伝えられている。

清秀は当郷掌領と同時に、先ず玉林寺の末寺である長谷山観音禪寺（在山中）が、法燈を減して衰えていたので、自ら開基となって禪寺を再興し、宗廟と定めて敬尊具祠した。

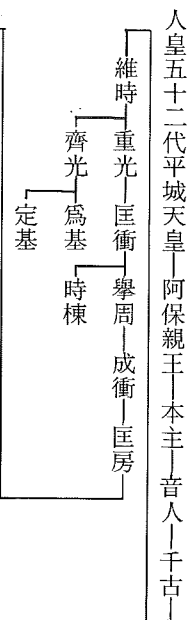
同年九月には清浄の地杉屋敷に神社を造営し、小城山大宮司嘉村左京進宗章に命じて、筑前国香椎宮から分霊を奉招して祀り、仲哀天皇・神功皇后を合祀して、杉大明神と号した。そして杉一万本を寄進し、境内に植えて神木と定めた。これは、往古神功皇后三韓征伐の折、豊前国池田邑の杉山に登られ、天地神祇に武運を祈らせられて、手ずから杉の枝を折って鎧にさし給うたという因縁に由つたのである。

その後、花園天皇の御代（一二三〇—一二三二）に、清秀の孫房儀は山中の地を避けて、河内山（宿城山）に館を構え、ここに移り住んだ。後世これを三瀬城という。

房儀の子家房を経て孫の長門守房家は入道して浄安と号し、應永十六年^乙（一四〇九）に姓を三瀬と改め、三瀬長門守房家入道浄安

と号した。後代、神代勝利を迎え、神代三人衆の一人として活躍した。

三瀬氏系譜



隆兼
維順—維光—匡範—廣元—季光—廣光
有元

野田周防守大江清秀（法号清嚴源秀大禪定門）

房儀（法号義山玄忠禪定門）
山中の館より河内山に城を築いて移る 家房（法号雲山宗溪禪定門）

改姓三瀬氏

三瀬長門守大江房家（後に入道淨安）
（法名心賢淨安大禪定門）

三瀬土佐守貞家入道宗利（法号玄山宗利大禪定門）
享祿年中神代新次郎勝利を迎えて、山内統將と定め
北肥二十七ヶ山の城主となす

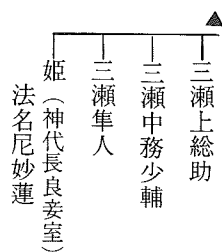
三瀬内蔵之助武家 六助武成（大蔵と号し天正十二年三月廿三日
島原戦死）
十助

三瀬長門守安家（法号大勇是道禪定門）
天正十年八月戸原入道紹真攻略鍋島直茂
に従い出陣

全年十月十四日深手を負い帰陣後死亡

三瀬長右衛門

三瀬又兵衛



二 武士と農民の生活

一 武士の生活

武士の発生は、力のある豪族や役人が自分の財産を護るために武備をかためるようになってからであるが、元来は名主層の農民が、自分の所有する土地を支配管理して、その秩序を維持するために武装したことに始まる。

神埼地方には、大きな勢力をもつ武士団が少なかったのは、この地が皇室御領であったためと、早くから開かれた地方であったからとみられている。院政のはじまった応徳三年（一〇八六）をはるかにさかのぼる仁和四年（八八八）には、すでに宇多天皇御領、神埼莊三千町とみえているから、院政以前にも武士の発生を抑える特殊な事情があったらしい。

三瀬山内の武士たちがどんな生活をしたか、くわしい資料がないのではっきりしないが、館を山近くにつくり、戦争のときは山城に籠

ったことが考えられる。館近くの谷底平野に田畑を持ち、これを保持するには「一所懸命」であった。したがって有力な支配者から保障されるだけで、御恩にきる価値があった。しかし所領を護るため、複雑な利害関係もあって、時によっては寝返ることもしばしばであった。これらは背信行為というより、当時の武家の乱世に生き残る「処世術」でもあり、一族郎党を含めた運命共同体における大將たるものの責任でもあった。地方では中央の情勢については疎かつたので、結局は自分の身の回りにおいて、その都度適当な判断を下すほかなく、各自の向背去就もまた意のままであった。もちろん後世にいう「武士道」的な思想は一部の者を除いてはまだ確立もなく、たとえ朝敵方に付いたとしてもむしろ当然のことであり、要は自領（土地）の保全確保が何よりも急務であった。

武士には、さまざまな軍役公役があり、建久六年（一一九五）、肥前国押領使の藤原宗家が発給し、肥前国御家人に鎮西守護所大番役や京都や鎌倉の警備役などを命じた記録もあり、武士は財政的に困窮の度を加え、遂には乱暴を働く者もでた。

一 神埼莊の争乱

東肥前では高木宗家を中心とする在地領主の武士団が、後白河院領の神埼莊に入り込んで乱暴狼藉を行つなどの事件が相次いで起つた。頼朝は混乱を鎮め秩序を回復させるため、中原久経、藤原国平の二人の特使を九州に派遣した。この二人は太宰府と鎮西各国の国

庁の役人に宛てた後白河院庁の下文を持参したが、それに「戦乱にまぎれて、各地の武士たちは公領や莊園を押領していたが、早く以前のように公領は国司に返し、莊園は領家に返すように取り計らうべし」という意味の指示であった。

被害をうけた神埼莊の莊官は、数回にわたって、その状況を後白河院庁に、次のような解状（上申書）として差し出した。

一、高木大夫宗家と窪田太郎高直らは、莊官や神人を殺害し、莊の年貢物を奪い取り、莊内の種々のものを略奪あるいは破壊した。
一、藤原幸直は莊官でありながら、定められた莊の鎮守社の神事に従わない。

一、竹野七郎兼俊は、莊の役所をはじめ文書類を焼き払い、種々の乱暴をした。

一、窪田太郎と南二郎季家は、神埼莊の住人海宿称重実の所領を奪い取った。

一、宗家は僧春海が持っている河上社の座主職を、武力をもって押領した。

一、莊官や寄人らの中には、近頃種々の口実を設けて莊役を勤めない者がある。

高木宗家は肥前の国衙の所在地に近接する佐嘉郡深溝北郷甘南備を本拠とし、郡内に多くの所領を持ち、肥前国押領使を称し、また太宰府大監の地位にもあった肥前有数の豪族であった。南二郎季家は後の竜造寺氏の祖でもある。

藤原幸直、窪田高直、竹野兼俊らは明らかでないが、佐嘉、神埼もしくはその周辺地域の住人とみられる。

いずれにしても、早くから武士団の形成が進んでいた。これらの在地領主層は、共同して皇室領の荘園の神埼荘を襲って、困乱が続いた。

このように強い者勝の世の中になってきて、武力をもつ者が次第にはびこり、皇室領「神埼御荘三千町」の荘園制度はくずれた。

2 農民の生活

この時代の稲作技術は急速に進歩がみられ、これまでは直播きが殆どであったが、苗代による栽培がはじまった。また、早生稲や晩生稲のほかに中生稲が普及し、田植への労力配分なども工夫された。二毛作に麦がゆきわたったのもこの頃からである。古くは貴族や寺社、豪族が独占有していた農具や牛馬も、大規模な農民層は所有するようになり、人力耕耘から牛馬耕耘に次第に変わった。しかし、牛馬を持たない一般農民層も多く、重労働に身を粉にしなければならなかった。肥料なども青草の刈敷きや牛馬の堆肥、人糞尿の利用などが行われた。

昔は天災も多く、農民は公役などにかり出され、河川工事などに当たったが、被害を出すことが多く、加護を神仏にすぎするため、神事芸能とされる神埼仁比山神社の御田舞や、風除け占いの中原町綾部神社の風祭りなども、この時代ころからはじまったものとみられて

州武士の奮戦によって、これを撃退することができた。

北条氏鎌倉幕政の中頃以後は、九州探題や地頭の勢力が衰えるにつれて、群雄割拠の兆が各地にあらわれ、ことに九州では寛仁年中の刀伊の入寇、寛治年間の蒙古来、文永二年の元兵の入寇等、外敵の来襲が度々あったので、武士たちの敵愾心は大いにあがり、関東御家人その他大小の武士豪族はしだいに実力を強化し、その権勢は隆々たるものがあつた。これらの武士がいよいよその本領を発揮する時機が到来したのである。それはいうまでもなく、元・高麗の大軍が九州北岸に襲来した元寇のときであった。

元の世祖忽必烈は、高麗人趙葵の献策を容れ、成吉思汗の遺志を成さんものと、龜山天皇の文永三年八月、兵部侍郎黒的を国信使、礼部侍郎殷弘を副使とし、高麗王（元宗）に書を贈り、我が国への嚮導（道案内）の労を執らせた。高麗はその極密院宋君斐、礼部侍郎金贊の二人に蒙古の使節を案内させたが、翌四年正月黒的等の一行は巨済島まで来て、風波の激しいのをおそれて引返してしまった。忽必烈は大いに怒って同年八月、再び黒的・殷弘らを高麗に遣わし、その不信を責め、我が国にとどけるよう厳命した。高麗国王は同年九月、起居舎人潘阜を国信使として、蒙古及び高麗の国書を我が国にもたらさせた。五代帝王物語には右使節が太宰府に着いたのは、文永五年正月一日となっている。太宰少式資能は急使をたててこれを幕府にとどけた。

蒙古の国書は至元三年（文永三年）八月付のもので、その全文は次

いる。

また、この時代の特色として茶の伝来がある。

茶はわが国に千年以上もまえからあったのだが、今日のお茶が日本にはいつてきたのは建久二年（一一九一）臨済宗をわが国につたえた栄西という人が、宋より茶種をもち帰り、神埼郡脊振山の靈仙寺西の谷に植えたのが、はじまりだといわれている。その後、京都の桐尾へ明恵上人が、その実をもらって植え、これが全国にだんだんひろまったものである。今でも脊振山では野生の茶がたくさん生えている。



農民の牛耕図

三 元寇の出陣と三瀬山内

蒙古の来襲は前代の寛治年中にもあり、このときは、菊池経隆が繪旨を奉じて追討の功を奏し、鎌倉時代に入って文永二年（一二六五）にも来襲をうけたが、筑前の原田次郎・秋月九郎を主とした九

のようであった。

『上天眷命大蒙古皇帝書を日本国王に奉ず。朕惟るに古より小国の君、境土相接する者は信を講じ睦を修むるを務む。況んや我が祖宗天の明命を受け、奄に区夏を有ち、避方異域威に畏れ徳に懷く者悉く数うべからず。朕即位の初、高麗無事の民久しく鋒鏑に瘁むを憫み、即ち令して兵を罷めしめ、其の疆域を還し、其の旄倪を反えす。高麗の君臣感激して来朝す。義は君臣と雖も而も歛は父子の若し。計るに王の君臣亦已に之を知らん。高麗は朕の東藩なり。日本高麗に密邇し、開国以来亦時に中国に通ず。朕の躬に至りて曾て一乗の使の以て和好を通ずる無し。尚恐らくは王の国を知るの未だ審かならざることを。故に特使を遣り書を持し朕の志を布告す。冀くは自今以往、問を通し好みを結び以て相親睦せん。且つ聖人四海を以て家となす。相通好せざる豈一家の理ならんや。兵を用うるに至りては其れ孰れか好む所ならんや。王其れ之を図れ。不宣』と。

これに対して我が国は遣唐使廃止以来、中国との国交を絶って既に三百余年を経ているので、朝廷でも幕府でも公式の国交を再開することに難色を示し、また牒状が無礼であることを憤り、元の国書を無視して返書を出さぬことに決まった。潘阜は太宰府に五箇月間留まっていたが、遂に返書を得ずして帰った。

文永八年九月、元使趙良弼は高麗の通事別將徐櫛・校尉金貯と共に怡土郡の今津に來着した。津人が良弼をつれてきて板屋に入れ、兵を付けて守っていたので、太宰府少式筑後守藤原経資はその来由

を尋ねて国書を求めたが、良弼は「往きて日本国王に献ぜん。もしゆるさざれば直ちに將軍に伝えん。然らざれば敢て手を釋かず」と言つて渡そうとしなかった。しかし経資はその上京を許さなかったので、良弼はしかたなしに国書の副本を差し出した。其の書は十一月を期して我が返書を迫り、期をすぐれば兵船を準備するというおどし文句を並べてあった。太宰府は急いでこれを鎌倉に報じたが、時の執権北条時宗はこれを朝廷に奏し、返書を与えずに使者を追いかけた。

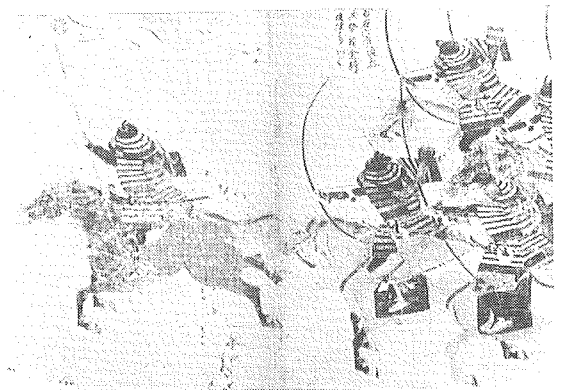
同年三月、元はまた趙良弼を我が国に遣わした。良弼は太宰府までは来たが、この時も国都に入ることを許されず、空しく高麗に帰つていった。

我が国はこれを未曾有の国難と感じ、諸社諸寺に敵国降伏の祈願を捧げ、国を挙げての防備態勢をとつたが、幕府の重臣らは何故かほとんど戦場に出動せず、事実上の防衛は太宰府を中心とした西国九州の御家人に委任された形であった。

〔文永の役〕 文永十一年三月、忽必烈は、忽敦を都元帥に任じ、洪茶丘（高麗軍民惣管）を右副元帥、劉復亨を左副元帥として、兵一万五千人（或いは二万五千―三万人という）を以て我が国攻略に向わしめ、高麗に兵五千を出動させるよう命じた。高麗王楨は金方慶・金仇・金文庇等の率いる兵八千を出動させた。十月戦艦九百余艘を以て慶尚道の合浦を出発し、同月五日対馬の佐須浦に襲来した。対馬の守護代右馬允宗助国はその子馬次郎・養子彌次郎らとともに敗

れて戦死した。

勢に乗じた賊は、十四日壱岐を侵した。壱岐の守護代左衛門尉平経高は防戦につとめたが遂に戦死し、翌日全島占領されてしまった。このとき賊軍は惨虐のかぎりを尽くし、男は殺し或いは擄にし、女子はその手のひらを穿つて船端にしぼりつけたという。



白石六郎通泰奮戦の図（蒙古襲来絵図）

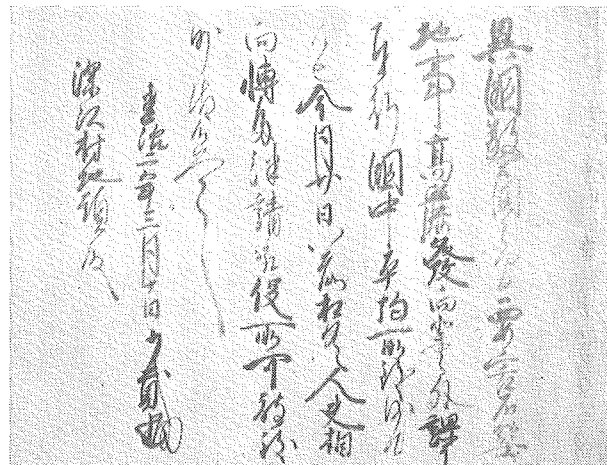
十九日、敵軍は筑前海岸に到着し、先ず今津を占領し、二十三日郎浦（三郎は早良）に上陸し百道・龜原・赤坂等の各地を侵略した。これより先き、宗助国の家士小太郎・兵次郎、および経高の僕宗三郎は、難を免かれて国難を博多に通報した。太宰府は急を京師につげるとともに九州の将士を召集した。この時兵を率いて集まった諸将は、少式入道覚恵（太宰少式経資の父）・その子景資・鎮西奉行大友頼泰・戸次重秀・菊池隆泰・その子武房・康成・赤星有高・西郷隆政・城隆経・葉室高善・託摩頼秀・難波在助・千葉頼胤らをはじめ、肥後の竹崎季長・江田秀家・三井資長・資安等、肥前の山田重基・白石通泰等、筑後の光友又次郎、松浦党の山代階・石志兼等、

その他龍造寺・大村・有馬・高木・深堀・原田・山鹿・青屋・紀井・日田・児玉の諸氏などがあり、無慮十万二千余人の兵であった。敵兵は意外に攻城野戦に長じ、その上我が兵が未だ知らなかった鉄砲を使ったので、一時上陸をゆるしてしまつたが、我が兵は一騎打の戦法にて突進したので、敵兵は肝をつぶし、深く侵入することとはできなかった。当二十日夜、天佑にもものすごい暴風雨が襲来したので、敵艦は岩礁に激突して数多く沈没し、溺死する敵兵が数えきれないほどであった。翌二十一日、我が軍は艦船を発して敵を追ひ、志賀島に留まっている一艘の敵船をみつけてこれを捕獲した。

敵將は海に投じて死んだが、徒卒百二十人は生獲りにし、これを水城で斬った。他の敵艦は悉く合浦（馬山浦付近）をさして

敗退したが、この役で敵兵の帰還しなかつた者一万三千余人におよんだという。

元の忽必烈は、



少式経資石築地役催促状（深江家文書より）

この敗北にもかかわらず、日本制圧の野望をあきらめず、威嚇の効果は十分にあらがったとおもひ、またまた杜世忠以下を国使として我が国に親交を迫つた。龜山天皇の建治元年（一二七五）五月、幕府は杜世忠以下四人の使節を鎌倉に召して龍ノ口で斬り、同二年三月から筑前の沿岸（博多冷泉の津から北方三・四里の間）に石塁を築いて、元軍の再来に備えることになり、鎮西に所領をもつ五十余名の諸將にその着工を命じ、少式経資にその工事を監督させる一方、大陸遠征も計画した。

少式経資はこの旨を部内の地頭御家人等に伝え、同月二十日を期して人夫を率いて博多の津に集まらせ、各自担任の部所に就かせた。領地の数額によつて、一段毎に一寸を負担させ、外征の将士にはこれを免じたが、遠征が中止になったので、もっぱら石塁築造に全軍が当ることになった。薩摩の島津・豊後の大友・日向の伊東・肥後の菊池等みな築塁に従事したが、肥前の武士でこれに就役した者は大略次のような諸氏であった。

高木家宗・龍造寺季益・国部季高・三浦時仲・大村家直・越中長員・富安頼清・有馬朝澄・後藤氏明・後藤定明・橘公員・白石八郎・多久宗国・於保種宗・馬渡八郎・今村三郎・田尻能家・綾部幸重・波多太郎・鴨打二郎・鶴田馴・丹後定。

三瀬山内には当時、藤原氏・薙野氏・野田氏（後の三瀬氏）らがあつたが、何れに所属したか明らかでない。当時山内は筑前との交渉が多かつたので、おそらく少式氏か大友氏配下に入つて就役したで

あろう。

このように防備を嚴重にするとともに、弘安二年六月には元使周福・樂忠の二人を再び博多で斬った。

〔弘安の役〕 我が国が元使杜世忠以下を誅殺したことを聞いた忽必烈は激怒し、日本再征を企てた。龜山天皇の弘安四年正月、忻都・洪茶丘に命じ、道を高麗にとつて陸行させ、兵甲は舟で運んで壹岐を襲撃させることにし、これを東路軍と称した。又、范文虎に命じて、南宋の蠻軍十万を率いさせて江南（寧波）を発し、壹岐で東路軍と合流させることにし、これを江南軍と呼んだ。両軍合わせたのち全軍を以て一挙に太宰府を衝く計画であった。

忻都・洪茶丘等は、高麗の将金方慶・朴球金周鼎等とともに、五月、蒙古・高麗・漠の連合軍四万、戦艦九百艘を率いて合浦（馬山浦付近）を出発した。同月廿一日、敵船は対馬と壹岐に襲撃した。敵は惨虐の限りを尽くし島民三百人を虐殺したという。松浦党をはじめ鎮西の諸兵は防戦したが、勢に乗った敵は抜け駆けの功名をねらって、江南軍の来着を待たず、六月六日に博多湾に殺到した。敵の一部隊は六月八日志賀島に上陸したので、我が兵は力戦して九日まで戦ったが皆敗れてしまった。時に伊豫の住人河野六郎通有はその子八郎通忠・伯父伯耆守通時とともに、軽舟に乗って進み戦い、帆檣をたおして梯にし、敵船に躍り入って賊数人を斬り、玉冠をかぶった賊将を捕えて還った。このような我が兵の奇襲に敵は怯え、その上疫病に悩まされ、病死する者が多く（三万余人という）、軍氣

も阻喪してしまったので、一時壹岐に撤退し、六月二十七日には更に退いて肥前の鷹島に移った。程なく江南軍の先発隊が壹岐に向ったので東路軍も移動した。

このころ武藤経資の子資時は、薩摩の守護島津久経の弟長久らの兵船とともに壹岐へ攻めかけたので、龍造寺季益の弟季時・家益も壹岐へ向い、高木・千葉・彼杵・松浦党の諸勇士とともに、数万の兵を以て壹岐の大瀬戸・小瀬戸・三年浦・幾島・松島などで、元軍と激戦を展開した。敵は船上の高楼から火箭・鉄砲を放ったので、我が軍は多数の死傷者を出した。この戦いで資時は戦死し、松浦党の山代栄以下多数が負傷した。

龍造寺文書には、龍造寺季友はこのときの戦功を肥前守護北条時定に注進したので、時定は翌五年九月九日に幕府へ伝達したことが記されている。

范文虎の率いる江南軍は、船艦三千五百艘、蠻軍十万の大軍を擁して、既に鷹島に到着したので、東路・江南の両軍を合わせて、肥筑の海上は敵船で蔽われるような有様であった。敵は大挙して太宰府を襲撃しようと図ったが、閏七月朔日、にわかの大暴風雨が起ったため、敵の艦船は覆没難破するもの数知れず、我が軍はその虚に乗じて敵船を殲滅した。この時降伏するものが千余人あったが、これをみな那珂川に斬り、その屍を高麗寺に埋めた。元兵十万のうち生きて還った者は僅かに三人であったという。

この戦いに我が軍が勝利を取めたとはいえず、これはいわゆる神風

という台風に助けられた勝利であったので、幕府は九州の諸將に令して、一カ月交代で石塁の防壁築造を続けさせ、さらに防備を固めようと図った。これはおよそ元が滅びるまで続けられたのである。

三瀬山内には当時、藤原氏・薙野氏・野田氏らがあつたが、彼等が出陣したかどうかは明らかでない。ただ『脊振村一黒（二谷）番処原古戦場記』には「弘安四年蒙古来寇し、対州・壹州及び松浦の沿海悉く破れ、我が軍は博多に拒ぐ。賊兵は我がすきをうかがい、東松浦より上陸して、山内を越え博多に出んとす。この時山内の豪族水田兵庫守は病に羅り家に在ったが、その手下および山内諸豪の留守兵を率いて、番処ヶ原にて戦い、賊兵三百余人を殺す。敵兵を追って一谷に至り、病のために馬より落ち、敵に討たれて死す。土人その地に祠を建て、一谷神社と称す。番処ヶ原に古塚多し。この戦の戦死者を葬する所と云う。」と記されている。

元寇の役に於ける恩賞

- 一、山代 栄 神埼莊竹村郷田地十町その他。
- 一、河野通有 同尾崎・嘉納の一部。
- 一、白石通泰 藤津郡嬉野、神埼莊竹村視田ヶ里・犬童里・河依里・有松・東寄人などの田地。
- 一、塚崎宗明及び其の子中野頼明 神埼莊西郷乙南里の田地三町その他。
- 一、江上種宗 神埼莊尾崎・嘉納の一部、筑前国山門・山本二郡の内田地若干。

一、大村家信 神埼莊西郷仁元田里の一部。

一、大村家直 神埼莊西郷崎村の一部。

一、龍造寺家益

佐賀郡龍造寺村、筑前比伊郷、筑後荒木邑地頭職。

一、筑前住人櫛定禪西順

神埼莊西郷加岐郷・東郷・横田・牧原の一部。

一、長崎住人大島家宗

神埼莊仁元田の一部。

一、深堀仲時 神埼莊中郷の一部。

四 鎮西探題攻め

元寇は挙国一致によって幸い撃退することができたが、未曾有の国難であったため、鎌倉幕府にとつてもこれが致命傷となった。その上、執権北条氏の信望を失わせたのは、執権高時が田楽・闘犬などの遊樂にふけたために、実権は部下に移って内管領（執権北条氏の家司）長崎氏の跋扈となり、その上幕府が皇位継承にまで干渉したことである。これに対して後醍醐天皇は二回にわたって討幕の運動を起されたが、事は失敗に終り、隠岐の島遷幸となった。このちようやく勤皇諸將の蜂起をみるようになった。

御醍醐天皇の皇子護良親王は令旨を下して諸国の兵を募り、河内

第三節 南北朝時代

一 肥前の動向

の豪族楠木正成は赤坂城・千早城に拠って幕府軍に対峙したので、反北条氏の武士がしだいにそれに応じて起ちあがった。やがて御醍醐天皇は隠岐を脱出して伯耆（鳥取県）の名和長年に頼られた。幕府は足利高氏らを將として遣わしたが、高氏は途中から引き返して逆に京都の幕軍に迫り、六波羅探題を滅ぼした。一方関東では、上野の新田義貞が護良親王の令旨を受けて兵をあげ、鎌倉に攻めこんで北条氏を滅ぼした。（元弘三年一三三三）同年天皇は京都に帰られ皇位を回復された。

九州においても肥後の菊池武時は、小式・大友の両將と謀り、鎮西探題北条英時を討とうとした。しかし、少式・大友両氏がこれに応じなかったため、菊池氏はひとり北条氏を攻めたが、目的を果たさずに戦没してしまった。

その後で、少式・大友両氏は反探題方に味方し廻状を諸国にまわして軍勢を催促した。その廻状は龍造寺氏へも来たので、家益は子家親・家清の子家泰とともに、鎗尼行心坊増秀・於保入道宗喜・高木家朝以下の御家人を率いて、姪浜の探題館を襲ってこれを滅ぼした。

こうして鎮西探題も亡び鎌倉幕政も終幕したのである。

三瀬山内武士の動向は、元寇の役と同様、知るべき史料がないのでわからないが、少式・大友らの配下で動いたものと考えられる。

建武元年（一三三四）中興政府ができたが、翌年足利尊氏が謀叛をおこし、後醍醐天皇は吉野に隠れ、京都では尊氏が北朝の光厳・光明の二天皇をおしたて、各地に南北両党が分裂して争いがはじまった。九州では太宰府にいた少式頼尚が尊氏と手を組み、豊後の大友貞載、薩摩の島津貞久なども尊氏側についた。肥前の豪族は龍造寺氏・高木氏・千葉氏など、ほとんどが少式氏との関係で尊氏の北朝側についた。しかし九州でも宮方の南朝側についたのは、肥後の菊池武重・阿蘇惟時・松浦党などで、北朝側に対抗した。尊氏が楠木正成の計略で大敗し、九州落ちしたとき、少式・大友氏はこれを迎え、一方菊池・阿蘇氏・松浦党はこれを迎え撃って、有名な筑前多良浜の合戦となった。しかし南朝側は敗れ、阿蘇氏は肥前に帰るべき肥前路をとったところ、小城の千葉氏が天山でこれを襲い、阿蘇惟直は戦死した。いま天山山頂にある惟直の墓は遺言によるものといわれている。

尊氏は一カ月余りで、九州の大軍を率い上洛したが、その際尊氏は家来の一色範氏を九州奉行（後探題となる）として博多に残し、

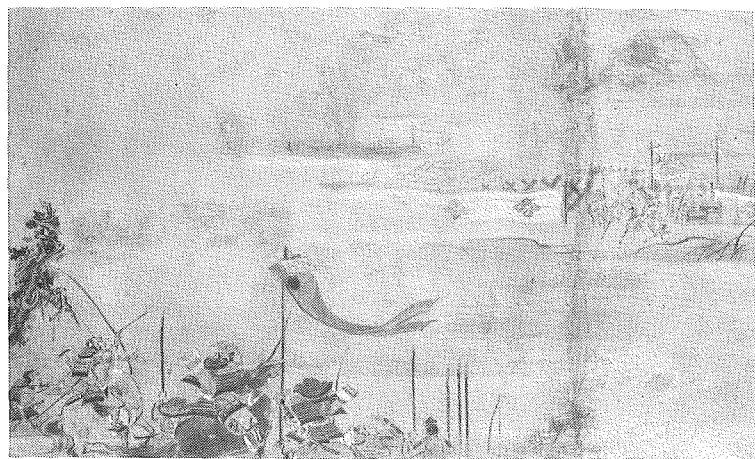
朝側に心を寄せ、一色氏に対抗したので、一色氏は遂に九州にいたたまれなくなり京都に去った。それで九州は一応南朝側に統一され、征西將軍は佐賀郡国府に一時滞在した。

しかし南朝側についた少式氏は、一色氏の勢力がなくなると、大友氏と手を組んで宮方に叛くようになった。肥前の龍造寺氏はじめ多くの武士も少式氏についた。しかし南朝側の菊池氏は有名な筑後川の戦い（頼山陽の筑後川の詩に有名になる）で大勝した。

この戦は正平十四年（一三五九）八月六日夜から七日にかけて行われ大保原の合戦（太刀洗の戦）といい、宮方と少式方とが大兵力を投入して行った大決戦であった。

『鎮西要略』にはこの時の両軍の兵力を、宮方五万余騎、少式方六万余騎、少式方の援軍大友氏時の兵二万余騎といい、肥前の武士で宮方に属するもの波多・稲佐・後藤等をあげ、少式方に属するもの朝日・松浦・佐志・山代・伊万里・神田・草野・千葉・高木・国分・龍造寺・於保・賀瀬・藤津・今村・豊島・江上等をあげている。激戦の末、両軍の死傷者は、宮方の戦死者三千五百三十余人、負傷者は数えきれず。少式方の戦死者二万六千五百余人、負傷者一万八千人以上。大友方の戦死者六千余人と伝えている。誇張したものであろうが、実に惨憺たる戦であったようである。少式方は敗れて北に逃がれ、宮方も痛手をうけてこれを追撃することができず、軍をまとめて肥後へ引きあげた。

頼尚は肥前の諸氏と連携して再挙を図ろうとしたが、武光はその

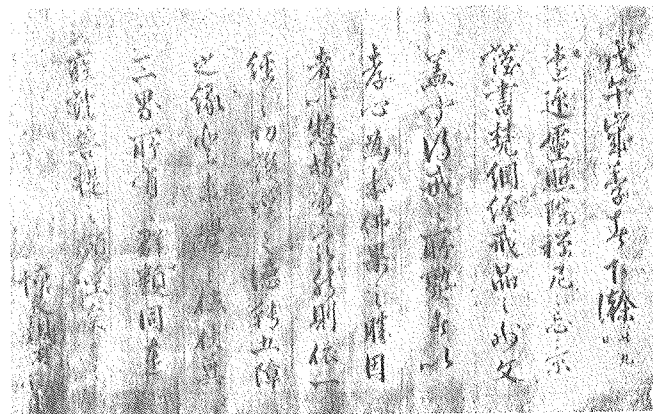


筑後川の戦いの図（久留米市立図書館蔵）

肥前の兵士もその協力者として残した。肥前には綾部城（中原町）・千栗城（北茂安町）が築かれ、肥後の菊池氏の見張り役をするところがあった。少式氏は鎌倉時代から鎮西奉行であったので、一色氏を九州奉行にしたのが気に入らず、たえず

対抗したので、尊氏は支配国を分け、一色氏が肥前国を治めることにした。正平四年（一三四九）尊氏と弟の直義は不和になり、直義の養子直冬が九州に下った。少式氏は直冬を授け、肥前の武士も直冬に味方した。したがって九州は一色探題と少式氏、征西將軍懷良親王をたてる菊池氏と三つの勢力に分れたのである。正平七年一色氏は少式氏を攻め、直冬は中国に去った。それより少式氏は急に南

まに肥前を押えておくために武安（武光の甥）を肥前に向わせた。武安は神埼郡仁比山城（別名、日吉城）を根拠として、本告・姉川らの協力を得て佐嘉郡に入り、高木・龍造寺の諸氏と戦って甘南備城を陥し、さらに兵を進めて小城郡の千葉氏、松浦郡の諸氏を破った。正平十六年（一三六二）七月、宮方は再び北上して各地に少貳方を討ち、翌月、太宰府を攻めて、小貳氏を撃破した。懷良親王は大宰府に入って、ここを九州経営の根拠とされた。『神埼郡郷土誌』には「十六年新征西將軍良成親王御歳十六にして八代に下向、武光



懷良親王筆 梵網經（東妙寺藏）

復戦備して先ず日薩隅を討平し甥武安を其の守備となし、自から新將軍を奉して太宰府を攻め少貳頼尚を豊後に逐い、別働軍菊池武勝は府内（今の大分市）に勝ちて太宰府に來会せり、是に於いて征西將軍は太宰府に居座し玉つとある。この太宰府の攻防戦に、龍造寺氏や上松浦の諸氏は少貳方に従軍したようである。

そのころ三瀬山内には、藤原・薙野・三瀬の三氏のほか、音成氏などが来住していたが、この戦いに加わったとすれば少貳氏配下であったと推察される。しかし、確かな史料がないので判明し難い。ただ、豆田氏が豊後国日田郷の豆田城にあって宮方の配下にあったが、のちに大友氏に襲われて落城し、山内の三瀬氏を頼って被官したことが伝えられている。

一色氏が九州を脱したあと、幕府は斯波氏経を九州探題に任じた。氏経は正平十六年十月、大友氏をたよって海路豊後に着き府中に入ったが、宮方の兵威に圧せられて何ら為すところもなく、同十八年九州を去った。同二十年、幕府はさらに渋川義行を九州に向わせ宮方を討たせようとしたが、義行は九州に入ることができず、数年間、中国に在って機をうかがっていた。しかし、ついに九州に渡り得ないまま京都に帰った。当時、諸方の南朝方勢力が衰えて振わな

い中に、九州の菊池武光を中心とする宮方だけは武家方を圧して強盛であったのである。このあと建徳元年（応安二一三七〇）今川了俊が九州探題に任ぜられた。彼は建徳二年十二月豊前門司に上陸したが、豊前、豊後・肥前の三方面から太宰府を挟撃する作戦をとるため、これより前に、先ず子義範を豊後に上陸させ、弟仲秋を肥前に向わせていた。

仲秋は建徳二年十一月、松浦党の船に迎えられ、松浦郡北端の呼子から上陸して宮方の居城太宰府に迫るといふ戦法をとった。少貳氏もまたこれに応じ、肥前各地の宮方以外の諸氏も馳せ集ったの

で、戦いは有利に進み、道々抵抗するものを攻略しながら、翌建徳三年四月には肥前の東端に達し、南下する了俊の軍と太宰府を挟撃する態勢をとった。そして八月、宮方は十年余にわたる根拠地太宰府を捨てて筑後の高良山に退いたので、太宰府は了俊の手中に落ちた。

今川探題は本拠を杵島郡塚崎に置き九州諸国に転戦して、三十四年の間に幕府の勢力を大いに拡げた。

宮方でも勢力挽回にやっきとなったが、文中二年（一三七三）十一月に、宮方の柱石として長い間活躍してきた菊池武光が死去し、翌三年五月にはその子武政も死し、同年九月、高良山を引きあげて肥後の本拠菊池に帰った。そのあと天授元年（一三七五）夏には、菊池武政の子賀々丸は幼少にもかかわらず親王を奉じて肥前国へ進攻したが、間もなく退いた。この頃懷良親王は征西將軍の任を良成親王に譲られた。一方、今川了俊は高良山を撤退した宮方を追って肥後に入り、天授元年七月、水島に陣してまさに菊池に攻め入る態勢にあったが、薩摩の島津氏久が離反したので、肥前に退き十月には本拠の塚崎に帰った。

肥前の龍造寺家は其のころ龍造寺村の知行を取りあげられていたであろうか、六月十八日にこれを返付され、元中八年（明徳二年）九月、今川了俊の子貞臣から若狭守の受領名を得ている。従って、このころ龍造寺氏は九州探題の配下にあつて活動していたのである。

良成親王は明徳四年二月、九州南朝方の再興を阿蘇惟政に命じているが、南北兩朝の合一は、その前年の閏十一月に行われているので、中央の情勢が九州南部で確認されるには相当の日月を要したことがうかがわれる。

明徳三年閏十一月、南朝の後龜山天皇と北朝の後小松天皇との間に神器の授受が行われ、六十有余年にわたって諸国がそれぞれ二派に分かれ、戦乱に明け暮れた南北朝の相剋は、一応の終止符を打ったのである。

南北朝時代の三瀬山内情勢については、鎌倉時代と同様、史料に乏しく、肥筑の情勢によってこれを推察するより外はない。

ただ、山内小領主たちもこのころになると、しだいに外部勢力と無関係ではあり得なくなり、來着する武士が増えるとともに山内勢力相互の間にも利害の対立が深まっていたのであろうことは想像に難くない。

二 大内・少貳両氏の争い

九州探題の渋川満頼は実力に乏しく、わずかに幕府の威権によって号令するのみで、依然として大内氏の合力がなければ行動できないありさまであった。そのため大内氏の勢力は漸く豊前筑前にのびはじめ、少貳氏も肥前に追われる状態となり、この結果、北九州の

地は一応大内・少貳・大友三氏の勢力が鼎立する有様になった。

肥前に追われた少貳貞頼は、小城の千葉胤基に頼って探題渋川満頼に抗したので満頼は三根郡の白虎城でこれらとしばしば戦った。

しかし、応仁の乱で大内義弘が幕府軍と和泉の国界で戦って討死したため、一時大内氏の勢力が弱くなり、やがて菊池一族の赤星氏が肥前に侵入して探題方を破った。少貳貞頼もこれに同調したが、貞頼は陣中に没した。

大内氏の援助が得られなくなった渋川満頼は筑前に戻ったが、失意のあまり応永十九年（一四三二）京都へ引きあげた。同二十五年、代わって子の渋川義俊が西下し、肥前勝野尾城に拠ったが、少貳満貞の一族に攻められて筑後に落ち、急を幕府に告げて大内盛見の援を請うた。

盛見は義俊を助け、肥後に満貞を破って肥前に走らせ、追撃して佐嘉郡で戦い、筑前を鎮めた。

義俊はここで自分が探題としての力がないことを覚り辞職を申し出たので、盛見は渋川満直を探題に推挙した。しかし満直も探題の力に欠けていたので、盛見自身で政務を執り、九州の諸將に臨んだ。

この大内盛見の功績に対して、六代將軍義教は上洛を命じ、筑前の直轄領の管理を依頼した。盛見は直轄領の年貢の取り立てをきびしくすると同時に、直轄領を完全に領有しようとしたため、大友持直をはじめ諸將が反発して一揆をおこした。

少貳満貞もこれに呼応したが、大内持世に敗れその子資嗣とともに

陣中に没した。満貞の弟横岳頼房・資嗣の弟法師丸（嘉頼）・松法師丸（教頼）らは対馬に逃れ、島主宗貞盛にかくまわれて扶持を受けた。しかし頼房だけはその後ひそかに東肥前に入り、少貳氏と旧好の諸士に語らって勢力を得たので、龍造寺季家・高木胤秋・千葉胤勝らと探題満直を討とうとしたが、満直が陣中に没したので、この計画を中止した。

嘉吉元年（一四四二）赤松満祐が將軍義教を殺害したいわゆる嘉吉の乱を起したので、幕府は追討の諭旨を受け諸將に令した。九州の諸將もこれに応じて赤松討伐のために播磨へ向った。龍造寺氏も探題渋川教直らとともに、八月中旬播磨に打ち入り、満祐の拠る木山城を攻め落した。

これより先、対馬にいた少貳嘉頼（法師丸）が三月に死んだので、弟松法師丸（教頼）は対馬領主宗貞盛の斡旋で將軍から赦免され、義教の一字をもらって教頼と改め、太宰少貳に任ぜられたが、赤松氏討伐に出陣の途中、海難のため出陣がおくれた。それを、かねてから快く思っていなかった大内氏が讒言したので、幕府は十一月、大内義弘に命じて少貳教頼を討たせた。教頼は敗れて再び対馬に逃れた。

その後、文安三年（一四四六）宗貞国の計らいで、管領細川勝元を通じて將軍義政に愁訴してもらったので、教頼はようやく赦され、再び家を興して太宰府館に入ることができた。しかし、またも大内

氏に追われて肥前に逃れたので、龍造寺季家がこれを庇護し、教頼を与賀荘の要害においた。

応仁の乱がおこると、東軍に応じた教頼は、応伝元年（一四六七）

対馬の兵を率いて筑前に入り、西軍方の大内氏の兵と戦ったが、翌二年十二月、志摩郡（糸島郡）で陣没した。

教頼の子頼忠（のち政資）は、対馬の宗貞国のもとに蟄居していたが、宗氏のとりなしで將軍義政から政の一字をもらい政尚（政資）と改名した。しかし、文明十四年（一四八二）頃、ようやく専恣の振舞が多くなり、將軍の勘気をうけて肥前に追われた。龍造寺季家の子康家はこれを庇護し、かつて教頼が住んでいた与賀荘に城を築いてその居城として与え、与賀神社を鎮守神と定め社殿を修造させた。

明応三年（一四九四）三月、少貳政資が松浦へ出陣すると、龍造寺康家も従軍し、上松浦まで来たとき、さらに波多・鶴田の諸氏も参加して来たので大いに力を得、筑前に入って怡土郡高祖城の原田興種を攻めた。

また高来郡の有馬貴純も同郡の諸將とともに政資に投じて来たので、下松浦佐佐城に平戸の松浦弘定を攻めてこれを降服させた。

政資はまた、そのころ渋川教直の子万寿丸が肥前綾部城にいたので、これを攻めて筑前に追い、自らも太宰府に移り住み、勢もなかなか盛んであった。

そうした少貳氏の形勢を心よからず思っていた大内義興は、「政

資は勘気の身でありながら、私事に弓矢を弄している」と將軍義尹に訴えて少貳追討の教書を乞い、明府六年（一四九七）正月、自ら筑前に渡り太宰府に迫った。

政資は軍を二手に分け、自らは那珂郡岩戸城に拠り、子高経を肥前養父郡勝野尾城に拠らせて戦ったが、政資はついに支えきれず、ひそかに城を抜け出て、弟千葉胤資の籠る小城郡晴気城に入った。しかしここも落城したので多久の専称寺に入り自害した。この時、辞世に「花ぞ散る思えば風の科ならず 時至りぬる春の夕暮」と詠み、口にした梅の実をかみ割って投げ捨てた。それが後に芽を出して花を咲かせ、その実の核がみずから割れたので核割梅と呼ばれ、今に伝えられているという。

高経の拠る勝野尾城も落ちたので、高経は逃れて一度は神埼郡仁比山の勢福寺城にはいったが、三月下旬にはまた大内勢に追われ、父の拠る晴気城に入った。しかし、ここも攻略され、弟頼高とともに城を出た。高経は筑前に逃れようとして天山の北麓市の川まできたが敵に追撃され、遂に力尽きて、「風吹かば落椎拾う松の下 あらぬ方にて身をば捨てけり」という辞世を詠み、鎧を脱いで切腹した。時に享年三十六歳「法名大懂本高」、位牌は市川西福寺にある。墓には天然記念物の大杉が聳え、西福寺裏の若宮山に石祠があつて高経の霊をまつてあるという。弟頼高は四月十九日小城郡松尾山で千葉興常に討たれた。

これから百年も後のことであるが、文禄年間に鷹取山（脊振村広

滝山)に高経の靈魂が現われ、種々の不思議なことが起ったので、これを鎮めるため大明神として境原に祀ったという。今の原明神である。また弟頼高の霊も小城郡松尾明神として祀られている。

三 肥前の諸豪族

中世の戦国争乱の時代、肥前北山(脊振山地)周辺に勃興した強力な諸將のうち、北山内武士と関係の深い諸氏については、一応こでその略系を述べておきたい。

1 太宰少貳武藤氏略系

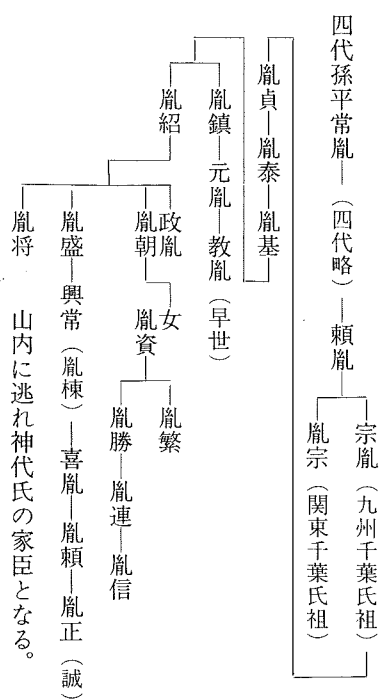
少貳氏は関白藤原道長を遠祖とし、道長の孫長頼は武州戸塚郷(今の早稲田地方)を知行して、その地に居住したので武州の藤原という意から武藤を氏と定めた。その子頼氏は源義家に従って軍功があり、寄懸の紋(寄懸)を賜わった。頼氏三代の孫頼兼の娘は平知盛に嫁し、頼兼の子頼方は知盛に仕えて武蔵代官となった。頼方の子資頼は一の谷の合戦で再び源氏に降り、建久二年(一一九一)に鎮西の監代として大宰府に入り、嘉禄元年(一二二五)宇佐八幡の遷宮に際し大宰少貳に昇任した。それ以後「武藤少貳」の家は肥筑の間にひろがり、馬場・旭・窪・出雲・吉田等の諸氏を派生した。

の子を迎えて千葉胤資と名乗らせ、小城の西一本松峠の晴氣城へ移した。

一方、兄胤朝を弟に討たれた三男の胤盛は、大内氏の力を頼って分家を興こし、本家と対抗した。胤盛の子胤棟は興常と改名し、牛頭城に拠ったが、少貳氏の子胤資が本家を継いだので、千葉家を少貳氏に奪われたとし、遂に弓箭を似て相見えるようになり、本家の西千葉、分家の東千葉の両家に分かれて争った。とくに大内氏と少貳氏の抗争がからんだので、千葉家の内訌に油を注ぐ結果となった。

興常はのちに同郡三日月郷の赤目城に移り住んだ。

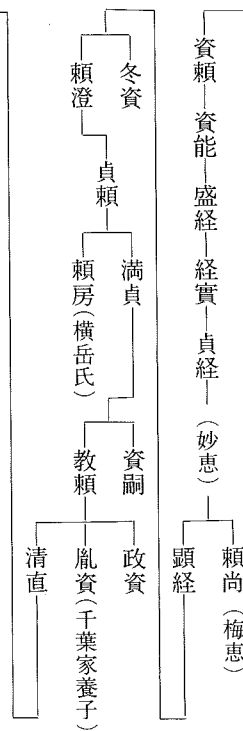
桓武天皇四世孫・高望王六代孫・千葉介常長



千葉氏の祖について『神代家伝記』は次のように伝えている。

千葉氏の祖は、下総国で父も母もわからず、小篠の上に幼い童がただ一人忽然と顕れ、傍に妙見菩薩の像と太刀があった。このこと

藤原道長—長家—長頼—頼氏—頼家—頼兼—頼平



2 千葉氏略系

小城の千葉氏は下総平氏で、千葉常胤が小城郡晴氣荘を与えられてから世襲した。六代頼胤は元寇の役で戦死し、その次男の宗胤が晴氣荘の地頭となった。これが小城千葉氏の祖である。その子胤貞は郡内三日月郷(今の三日月村大字長神田高田)に居住した。小城的の古社須賀神社(俗称祇園社)の「山挽由来記」に、胤貞自ら太鼓を打って笛を鳴らし、兵来兵来飛兵々々と吹いたとある。

胤貞の子胤泰は嘉暦三年(一二三二)北条氏の命を受けて肥前を管轄し、孫胤鎮は牛頭山(祇園岳)に城を築いてそこに拠り、肥前国主と自称した。弟胤紹はこれを好まず、叛を企てて胤鎮を誅した。その後、胤鎮の子元胤が跡目をついで一時全盛を誇ったが、その子教胤が早世して継嗣がなかったため、胤紹の次男胤朝を入れた。胤紹の四男胤将はこれをきらって兄胤朝を討ち、胤朝の娘に少貳教頼

が天聴に達し、その童子を朝廷で養育された。これが千葉氏の祖であるという。このような父母のない童を禁廷に引きとられたところをみれば、何か外聞をはばかりな深い事情があつて、暗黙の了解のもとにとられた処置であつたのではないかと考えられる。

その童子は成長ののち下総国の守護職に任ぜられた。父母も不明であつたので月と星を父母とし、屋外に生れたので「月に星」を家紋と定め、また小篠の葉の上に生れたというので姓を千葉と名乗った。

千葉氏は下総国に妙見堂を建立して菩薩の像と太刀を安置して祭つたが、のちに雷神がこの太刀をのぞんで落雷し、空中に奪い去ろうとした。この時妙見菩薩が姿を変じて現われ、この太刀を奪いかえた。この太刀には雷の爪型が残っているという。その後この太刀を鳴神の太刀と言ひ伝えられた。

それから数代を経て、千葉胤貞が白井・原・岡崎・飯篠(結篠)・福嶋・矢作・仁戸田・岩部・篠原・山口・園城寺・般岡・中村・山崎・鎗尼・平田・相原・平山・樋口らの徒臣を従えて、初めて肥前国に下向し、千葉屋型を構えて居住した。

程を経て肥前藤津の鹿島表に出張したが、帰館するとき篠島沖で海難に逢い、鳴神の太刀を海中に投じて八龍大神に加護安全を祈願したところ、不思議にも鮑が多数集つてきて舟の破れ目をふさいでくれたので、沈没を免れて無事に安堵の地に着くことができた。それ以来千葉一門は八龍神を守護神と崇め、鮑を副え神とするように

家泰（神代勝利に討たれる）
 家門——鑑業 家晴（諫早氏祖）
 女（胤榮室）

龍造寺氏の先祖は藤原秀郷の裔で、五代後の藤原公清の子季清が近衛天皇の久寿元年に鎮西の監使となって肥前に來住した。また季清はそのとき子の季慶（喜）を同伴して、佐嘉郡小津郷龍造寺邑に居住した。季慶には子がなかったため、佐嘉郡の南備峰城主高木季經の二男南次郎季家を養子に迎えた。季家は同郡南部の龍造寺の地頭職になったので姓氏を龍造寺と改めた。

さて、源為朝は世に鎮西八郎と称された驍勇で、力量人を凌ぐといわれ、父為義も為朝の乱行をもてあまし、ついに九州へ追放した。しかし彼は自ら九州総追捕使と名乗って、肥後の阿蘇平四郎時国の後援を得て、九州全土に猛威を振ったので、朝廷は為朝を追討するために前記季清父子を含む鎮西追捕使五奉行を送ったのである。

季清は西行法師の伯父にあたり、子の季慶（喜）は後鳥羽上皇崩御の後、出家して宿阿と号し、上皇のために鹿路山（脊振村大字鹿路）の地に庵をむすんで念仏三昧に日を送り、その地を鳥羽院山と称したが、後世訛って「トバエ」というようになった。脊振村鹿路山に宿阿の墓があったが、明治四年に旧佐賀藩主鍋島直大侯の菩提寺高傳寺へ移された。季慶の養子季家は頼朝拳兵のとき家人岩松七郎を山伏に仕立てて、天台宗の僧覺園とともに坂東に遣わし、範頼の平氏追討軍に加わらせた。両名は豊後に向い軍忠に抽んでたので、文

治二年（一一八五）九月二十七日付で、季家は鎌倉幕府の御家人とする旨の下文を受けた。

『龍造寺文書』（第一軸）

一、龍造寺氏重書案太宰府庁下文案

下肥前国小津東郷内龍造寺田畠

可任鎌倉殿御下文旨以藤原季家為地頭事、右去八月九日御下文今日到來稱件所者、依相傳之由緒給府宣令沙汰之處、為神崎庄住人海六大夫重實者、為平家方人益企謀反已重科也。就中不入鎌倉殿見參之條、是則心中猶思平家逆徒事故歟。結構之旨甚以奇怪也。然者永停止重実之妨、以季家可令為地頭職、但於有限年貢所當者、用本所之下知任先例、無懈怠可致其勤之狀如件者任御下文之旨可為地頭之狀如件

文治二年九月廿七日 權大丞中原在判

大監惟宗朝臣在判

藤原 在判

以上が龍造寺家の略系であるが、龍造寺氏はこのあと述べる鍋島氏とともに、山内武士にとっては極めて因縁の深い間柄にあるのである。その勢力拡張の状況をひろく概観してみよう。

現在県内には城・出城・館・砦の趾と呼ばれるものが二百以上も残っている。これらは十六世紀頃までの戦いに明け暮れた戦国の世に、將兵達がここを拠点として必死の攻防をくりかえしたところで、

弱肉強食、下剋上の風潮をかもした場所でもある。

その頃の肥前武將としては、鳥栖・三養基・神埼地方に、少弐・神代・江上・執行・犬塚・姉川・小田・本告・馬場・朝日・横岳らの諸氏、佐賀小城多久地方には、龍造寺・鍋島・千葉・高木・於保・八戸・石井・徳島らの諸氏、西松浦・伊万里地方には伊万里・黒川・山代・有田・大川野らの諸氏、唐津・東松浦地方には波多・鶴田・相知・石志・神田・佐志・有浦・値賀・呼子・名護屋・班島・草野・中村らの諸氏、武雄・杵島・藤津地方には後藤・中野・洪江・平井・嬉野・大村・有馬らの諸氏があつたが、中でも特に有力であつたのは佐嘉の龍造寺・鍋島・山内の神代・少弐、小城の千葉、武雄の後藤、松浦の波多氏らと、南肥前から中原をねらう大村の諸氏であつた。とりわけ享祿三年（一五三〇）中国地方の大内義隆の肥前侵入を田手暇手で破った龍造寺家兼・鍋島清久らは、このときに肥前戦国武將としての第一歩を固めた。天文十五年（一五四六）家兼の曾孫隆信がたつに及んで、その活躍にはめざましいものがあつた。家兼の死後は胤信（隆信）が龍造寺氏を相続し、のちに大内義隆の名を一字もらい隆信と改めた。ところが隆信の頼りにしていた大内義隆が一族の陶隆房に攻められて自殺したので、かねて謀叛を企んでいた隆信の家来土橋栄益は、このときとばかり隆信を攻めた。

一方、大内義隆が破れて自殺したことを知った豊後の大友氏は、一気に九万を乗取ろうと考えて陶氏と結んで肥前に手をのばしてきた。龍造寺の家中には土橋栄益のほかにもこれに加わるものがあり、



龍造寺隆信画像（高伝寺蔵）

そのうえ少弐氏の再興を意図する馬場・横岳・高木・姉川・八戸・小田氏らの各將が呼応して起ち、龍造寺を佐嘉城に攻めた。内外四面に敵を受けた隆信は遂

に支え切れず柳川の蒲池領に敗走した。

隆信は蒲池領の配所に雌伏三年ののち、天文二十二年（一五五三）蒲池の軍を率いて肥前に帰り、佐嘉城の奪回に成功した。

その後、蓮池の小田氏、神埼の江上氏、山内の神代氏、小城の千葉氏などを次々に攻め、東肥前を手中に収めた。

永祿十二年（一五六九）豊後の大友宗麟は、肥前征服の野望を抱き、六万の大軍を率いて、本陣を筑後の高良山におき、隆信に降伏を迫った。隆信はこれを拒絶したので、大友氏は三方から大軍をもつて佐嘉城を攻撃した。危機寸前の佐嘉城であつたが、幸いにもこの時中国の毛利元就が大友の留守を見計らって攻めたので、大友軍は急いで引きあげ、隆信は敗戦を免がれることができた。

しかし、大友宗麟は翌元龜元年再び前回と同様に高良山に本陣を

おき、佐嘉城を攻略すべく甥の大友八郎親貞を大将として、小城郡今山（現在の太和町）に陣を敷き、大軍を集結して決戦の機をねらった。いよいよ戦機熟して佐嘉城の総攻撃を決行しようとする日の未明に、鍋島信生（後の直茂）の夜襲にあい、大友軍は大敗して、大將八郎親貞は戦死した。これが世にいう今山の大合戦である。

このとき山内の統将神代長良（勝利の子）は大友軍に味方して、筑前から三瀬の峠を越えて進軍する大友の軍兵の道案内をして、共に今山に着陣していたが、戦いは大友軍の敗戦に終わったので、長良は山内に引き揚げた。引き揚げるとき大友の陣鐘を持ち帰り、山内七山の宗廟野波大明神に寄進した。この鐘は戦時（第二次大戦）中に供出したので現在はない。

この一戦によって龍造寺氏は一躍九州に名をなし、その勢力を拡張した。先ず松浦党の波多・鶴田・草野氏らを降し、平戸の松浦氏を和睦させ、つづいて須古の平井氏をも降伏させた。松浦攻めの時には三瀬の神代長良は龍造寺軍に加わっている。天正三年（一五七五）には東肥前の本告・姉川・横岳・犬塚・山崎などを従え、筑後の三池城を攻め、更に肥後に入り小代城を攻略した。天正四・五年には西肥前と南肥前の諫早・大村・深堀・嬉野・吉田・有馬氏など多くの諸将を降伏させ、肥前国を完全に手中におさめた。その後も次々に勢力を伸ばし、他国の筑前・筑後・豊前・肥後にまで進出し、隆信は五州二島（老岐・対馬）の太守とよばれるようになった。

ところがその後、肥後の隈部氏・赤星氏などが薩州の島津氏と連

結して反抗し、肥前では有馬氏が抵抗した。隆信は自ら有馬攻めにしかけたが、有馬氏を援けた島津軍のために敗れ、天正十二年（一五八四）三月二十四日未刻（午後二時頃）薩州島津の臣川上左京亮に討たれた。行年五十六歳。この戦を島原表の大合戦という。

この合戦に神代氏の家人の戦死左の通り。

神代家陣代神代弾正忠・同神代中務少輔三瀬大蔵充・福地嘉兵衛、梅野大膳亮・国部左馬之助 その他討死多し。

一方佐嘉の龍泰寺の大圭和尚は隆信戦死の報に接すると、早速島原の戦場に向き、死骸を湯江村和銅寺で茶毘に付し、遺骨を持ち帰って龍泰寺に葬った。

法名を龍泰寺殿泰山宗龍大居士と称し、のちに法雲院殿といった。

肥前の太守と呼ばれる豪将隆信が、生前一番の強敵として、目の上の瘤のように警戒し、好敵手として争ったのは、在りし日の山内の豪将神代大和守勝利であった。



隆信陣没地（長崎県島原市大字二本木）

4 鍋島氏略系

隆信の死後は龍造寺氏も急に衰えをみせ、龍造寺家の重臣として軍功のあった鍋島直茂が主家の所領を受けつぐことになった。

戦国争乱の世を配下に統一した豊臣秀吉は、天正十五年（一五八七）に一旦は隆信の子政家に対して肥前国の内三十五万七千石の所領を与えたが、天正十八年には政家の所領の支配権を鍋島直茂に与えたのである。事情は省略するが、天正九年に秀吉と直茂との間に交わされた密書などが残っているといわれ、実質的な領主の交代はこのときにあったとみるべきであろう。

鍋島氏の祖については、近江源氏佐々木定綱（高綱の兄）という説と、太宰小式武藤氏から出たという説とがあり、『史徴黒宝考証』には鍋島氏の祖は詳かならずとあるが、太宰少式武藤教頼の血統を受けているようである。

佐々木氏説によれば、近江源氏佐々木定綱七世の孫経秀がその祖で、初めは山城国乙訓郡長岡に住し、長岡伊勢守経秀入道崇元と言っていたが、応永年中（あるいは南北朝時代の末長慶天皇の弘和三年・北朝永徳三年）子経直と野田周防守（三瀬にきた周防守とは時代が異なる）以下を伴って肥前に下り、千葉氏を頼ってしばらく佐賀郡鍋島に居住していた。その地を旧地に因んで長岡荘と呼び、山城の長岡天神ならびに観世音菩薩を勧請し、館内に祀った。この館趾を御館の森といい、のちに鍋島直茂が天満宮を館の西南の地に建てて祀り、ま

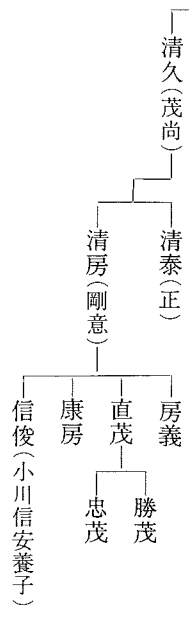
た観音像は、その西に観音寺を造営して祀った。

経秀の子経直の代には佐賀郡本庄村に住居を移した。経直の長女は太宰少式武藤教頼に嫁して清直を生んだが、経直は清直をわが子として養った。鍋島氏の祖先が少式氏から出たというのはこのことからであろう。清直の子清久（俗称平右衛門）は野田大隅守の娘を娶って五女子と清泰（正）・清房を生んだ。弟の清房は才略すぐれ、鍋島駿河守といい、入道して剛意と号した。『神埼郡郷土誌』によれば、「清房の前妻は龍造寺家純の娘花溪正春（華溪）で、後室は龍造寺家の孫女慶間尼（周家の真婦）である。慶間尼ははじめ周家に嫁して隆信を生み、鍋島清房に再嫁したので、隆信と直茂は異父母の兄弟である」という。

藤原秀郷（九代略）—資頼（小式筑前守）—資能（二代略）

頼尚—頼澄—貞頼—満貞—教頼—清直（経房）

佐々木定綱（中略）—経秀—経直—汝



前に記したように経直は応永年間に、佐賀郡の南部与賀本荘に移ったが、法名を道寿と号し、神仏尊信の念厚く本荘江の対岸嘉瀬荘有重に徳善院を開き彦山権現を勧請した。

この経直には男子がなかったので、女婿少弐教頼が応仁の乱に出陣するとき子経房（清直）をあずけて行ったのを、教頼が戦死したため、遺言によって養子とし鍋島氏を継がせた。清直の子清久（茂尚、法名利叟）もまた祖父の意志をついで彦山権現を尊信したが、かねてから信仰していた塚原大明神（本庄大明神）の夢の告げで「高楊庵の地に禪寺を建て、子清房（剛意）を以て本願として菩提寺とせよ」とあったので、館の西南高楊庵の地に天文二十一年（一説に永正五年）に寺を建立して清房を開基とし、佐々木盛綱の子孫藤戸盛俊の女が開創していた神埼郡箱川村の曹洞宗妙雲寺の住持玲岩玄坡を開山として、恵日山高傳寺を開基し、鍋島家の菩提寺とした。

『龍造寺記』では「鍋島清久を本莊の浪人」とし、『葉隠』巻ノ四では「鍋島初代藩主勝茂公御礼日退出の時、林道春ふと差寄り、鍋島の御先祖はたれにて候や、と申され候。篤と御氣付なされず御座候へども、御当座の御了簡にて少弐にて御座候」と仰せられ候へば、さてさて御歴々にて御座候。今程御系図改め御座候。追附、太田備中守殿仰入れらるべくと申され候。御帰りなされ御詮議候て、平原善左衛門が少弐の系図を所持仕り罷り在り候を召上げられ、御系図書立て公儀へ差出され候由」と記している。

清房の子直茂は龍造寺隆信に仕えて軍功をあげたが、隆信の没後は子政家に遺領を治める力量がなかったのでこれを補佐したが、秀吉は実質的な支配力は直茂にあると考え、政家の所領の支配権を直茂に与えた。

れた。法諡溪嵐覺譽居士（追腹十二人の内）。

左近丞の墓は脊振村一番ヶ瀬赤佐古観音の東にある。

四 三瀬山内に来着した諸武士

前代までに来着した武士には、藤原・薙野・三瀬・音成らの諸氏があったが、戦国時代になってから豆田氏・杠氏・神代氏が入山した。このうち豆田氏は、その祖が大江氏といわれ、同じ大江氏の末裔である三瀬氏を頼って来山したが、杠氏は阿波国の住人で、淡路国の弓絃葉権現を奉供して入山し、山内野波の里の領主となった。神代氏については別項で特記したい。

一 豆田氏、三瀬氏を頼って来住

豆田氏が当山内に来住したのは、野田（三瀬）周防守大江清秀が来着した時から約百二十年経った後で、南北両朝が対立抗争を続け、九州の諸豪がこれにまきこまれて争った時代のころである。

豆田氏の祖先は、学問・兵法の一家として名高い大江氏である。大江広元から数代の後裔にあたる大江康房郷が征西將軍宮懷良親王の軍師を仰せつけられて九州へ下り、親王の陣営にあって策戦を巡らし、肥後の菊池一族その他の忠臣と相呼応して各地に転戦し、太刀洗の戦に勝利を取めた後、各地の諸豪を鎮圧し、自らは豊後国日

これは大友・島津両氏に対抗できるのは直茂以外にはなく、三家勢力の均衡によって九州を保持していった秀吉の大名政策の現われであると考えられる。系図の上では直茂が龍造寺を継承したことになっている。これは隆信の母の慶闇尼が、直茂の父である清房の後妻であったことや、龍造寺の血筋をひく久保田・諫早・多久・須古などが、後々まで鍋島氏の親類として特別な待遇を受けていることなど、新興大名としては特殊な事情によっておこった形態であろう。こうして近世鍋島藩の基礎はここに確立されたのである。

直茂は慶長十五年（一六一〇）七十三歳で隠去し、夫人陽泰院（石井兵部少輔常延女）とともに多布施館に移り、国政一切を初代佐賀藩主である嫡子信濃守勝茂に譲った。元和三年夏頃から病床につき、翌元和四年（一六一八）六月三日、八十一歳で死去した。

小城藩主初の『元茂公年譜』によると、「万一戦乱が起り佐賀城が襲われるときは、敵は必ず北山筋からこの多布施口に攻め寄せようが、わしがここに埋っておれば、家中の者共は我が屍の上を踏ませずに城を守るであろう。俺の目は必ず河上口の方に向けて埋めるように」と言い遺こされたので、そのとおりに埋められたという。これによると直茂は死に臨むまで、数ある肥前武将の中でも、山内神代党の存在が最も油断のならないものとして、如何に気を配っていたかがうかがわれるのである。

直茂死去のとき山内の一番ヶ瀬城主（脊振村）一番ヶ瀬左近丞は、かねて覚悟の割腹殉死を遂げ、尽忠の勇士として、その死が惜しま

田郷豆田に行政の館を構え、豆田城と称して豆田氏を名乗り、この地方一帯の鎮撫にあたった。

弘和三年（一三八三）懷良親王死去後は勢力思いにまかせず、同国の大友氏に襲われ、豆田城が陥落したので、豆田氏は一族と共にこの地を逃れて、同じ大江氏の末裔である肥前北山内の三瀬氏を頼って入山した。

豆田氏はのちに神代氏に臣従し、一族門葉広く繁盛し、鍋島藩政時代には宿の御番所役を勤めるようになった。このことについては鍋島家古記録『請役処由緒書』に次のような記録がある。

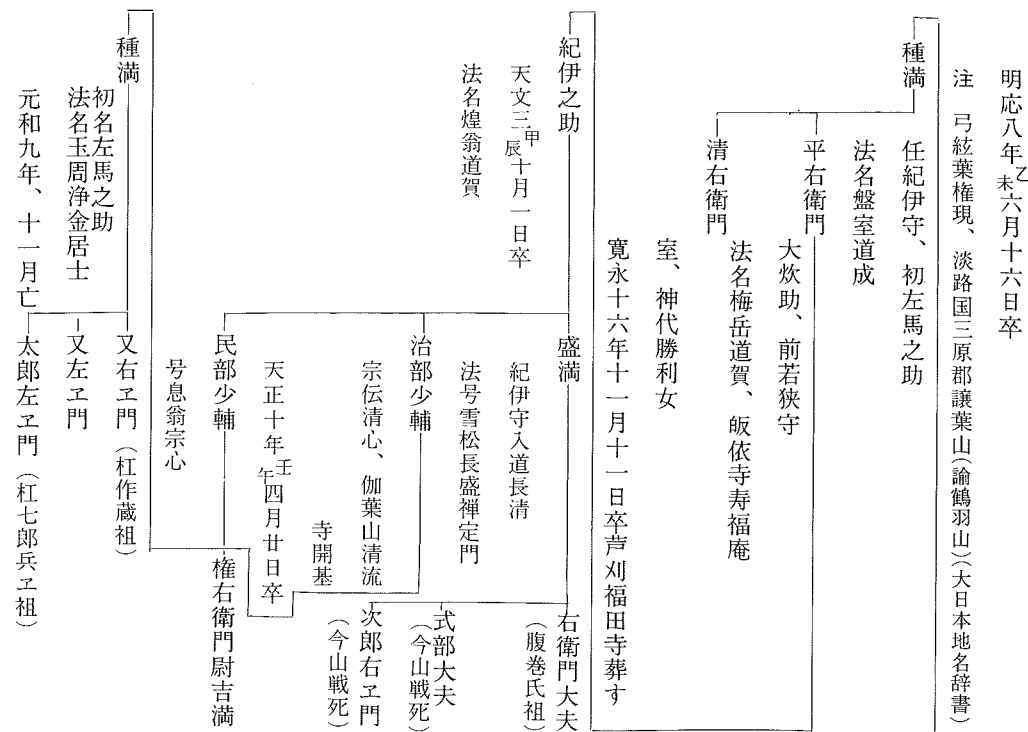
筑前国主黒田氏が、長崎警備のため当地を通行の際、宿番役人豆田茂右エ門宅に宿泊し『豆田家由緒』について尋ねたので、次のように答えたという報告書である。

（原文は候文）

「私こと三瀬宿御屋型在勤に当りますこと御調べにつき申し上げます。御屋型当勤務は、私より四代前の市郎左衛門と伝えております。子・孫右エ門、その子・興左エ門、私まで勤めております。先祖の市郎左衛門は、三間に五間屋、外に二間に三間の座敷を持って居りました。筑前守さま長崎にお遊びの節、右、市郎左衛門の家始めのことや、先祖家々のことを御尋ねになられたので、当所のことをお話いたしました。

辰十一月九日

豆田茂右エ門」。



番所役人 豆田市郎左衛門以降系譜

豆田市郎左衛門 没年不詳十二月廿九日

法名 無月淨心禪定門

孫 右衛門

(一七二六)
享保十一丙午二月廿七日

与左衛門基由

(一七四三)
寛保三癸亥 六月十六日

茂右エ門

(一七六九)
明和六己丑 八月廿二日

与左衛門由始

(一七九四)
寛政六甲寅 十月八日

順 兵 衛

(一八四四)
弘化元辰十一月廿二日

三兵衛丘由

(一八八四)
明治十七年十月廿八日

為 太 郎

大正十一年六月廿七日

祖翁單傳居士

寂翁自然居士

2 杠山領主杠日向守来着

前記の豆田氏来住後、約六十年経った嘉吉二年(一四四二)に、阿波国の武士杠日向守が、淡路国の弓絃葉権現(讓葉権現)を奉供して、山内野波の里に来着し、野波神社の氏子を領民として一帯を



杠氏館付近を望む
(館は左方段上)

支配するようになった。日向守は来着と同時に乙宮権現を建立して氏神として祀るとともに、当時七山の宗廟として崇敬された野波神社を宗社と定め、神領として土地五町歩を寄進して祭事を営み、天下泰平国家安隱を祈願し、併て子孫領民の繁栄を祈り、野波大宮寺嘉村安芸守に修拔させ

杠氏系譜

杠平石衛門尉阿波守 姓藤原、林大系図には大相国平清盛の末、

平氏にして姓氏、杠(ユツリハ)と有る。

『神代家伝記』には淡路国住人と伝う。

杠 日向守

嘉吉貳年壬戌淡路国依り下向当山住、上杠村に陣を取り、為氏神、淡路国杠権現奉供、陣所の東高所に堂一字造立、依て乙宮権現。

このあと神代武辺朝臣勝利が来遊し、山内の総師として迎えられ、郷村制の発達、庶民の抬頭と、社会の情勢が刻々と変化していくなかで、北肥山内は僻遠の地に孤立し、諸豪の欲望を誘うような農地や資源にも乏しかったので、外部勢力の力による侵略もなく、社会的な影響を受けることも少なかった。

五 小領主割拠の北肥山内

鎌倉時代以降、中央や地方では、守護大名の成立、荘園制の崩壊、郷村制の発達、庶民の抬頭と、社会の情勢が刻々と変化していくなかで、北肥山内は僻遠の地に孤立し、諸豪の欲望を誘うような農地や資源にも乏しかったので、外部勢力の力による侵略もなく、社会的な影響を受けることも少なかった。

しかし、古くから存在した自然村落も、人口の増加とともに、文化・経済面での外界との交渉もしだいに増え、また、生業のために来住するもの、あるいは、逃避・逃散して来住するものの参加などがあり、村落は自治自衛的に組織化されていった。しかし、はっきりした自治体制をもつ村落社会が確立されたのは、山内に来住した武士が、各村落を支配し、領主としてこれを指導組織化してからのことと考えられる。もともと、それ以前にも惣代や世話役など、有力者はいたであろう。

この時代に他国から山内に入って、各山間谷間に割拠して小地域を掌領支配するようになった武士たちに共通することは、いずれも神を奉供し、神社を造営し、あるいは、先住民の信仰したであろう

神々より以上に權威ある神を勧請合祀したことである。また、野波神社のように既に權威ある神のあるところでは、社領を寄進して祭祀を盛にした。

このように、外来の豪士たちは、館や城を築いて威力を示すと同時に、山内各溪谷、扇状盆地に構成された先住民の自律自衛的共同生活集団に対して、權威ある神祇信仰を与えることによって、自己の權威を神と結びつけたものとして強化し、支配者として住民に肯定支持されたと考えられる。

こうして、北肥山内各溪谷盆地ごとに、小領主を中心にした封建的な村落社会が、つぎつぎにできあがった。ただ、注目されることは、これら諸豪（小領主）が、小地域の名主的存在にあまじきことである。先住支配権力と後來支配権力との間にも、大きな紛争は起っていない。おそらく僻遠の山内であるため、外部勢力の圧力も少なく、山間各地の自然や生活の環境がきびしいため、規模の大きい勢力を成立させるににくい条件下にあった。争えば相互に傷つき再び立てないように疲弊（ひひ）することが明らかであったからであろう。

当時の北肥山内には、神埼七山衆といわれる三瀬・藤原・杠・薙野・腹巻・鹿路・広滝の諸氏の外、小城・佐嘉の衆に合瀬・藤瀬・栗並・梅野・菖蒲・広瀬・畑瀬・小副川・松瀬・名尾の諸氏、筑前側に曲瀬・原田などの諸氏があった。

嘉吉二年（一四四二）に大内氏が太宰府宝満岳で少貳氏を撃破して敗走させたときには、三瀬・藤原・薙野・腹巻・鹿路・広滝の神

埼七山衆は大内氏に味方したが、対馬まで敗退した少貳氏が、のちに再び勢力を盛り返えして筑肥の野に進出したときには、山内勢は一致して少貳氏と結んでいる。その後、山内勢は一貫して少貳氏につき、少貳氏から家督をついだ千葉氏のためにも尽力した。『杠文書』は、この間の事情を物語る貴重な史料のひとつである。同文書は、杠日向守の代から近世初期に至るまでの杠氏にあてた文書で、年代が記されていないものもあるが、大半は少貳氏や千葉氏からの中世文書である。ここにその一部を紹介しておきたい。

（太宰少貳政尚より杠日向守へ）

肥前国神埼庄之内杠山兵エ少輔跡之事

任先例之旨知行不可有相違之状如件

文明三

九月廿四日

政尚（花押）

杠日向守殿

去十七日亀尾城切捕候敵城柱森戸修理亮為始十余人討捕候宗幡摩守為人跡馳越高名候肥前守筑紫下野守以下惣勢あやへのことく十八日未明差寄候彼敵城内申談族候間當日可落着候至早良横山大窪伊与守以下為先勢申付候此時馳走憑入候猶委細經康可申談候恐々謹言

七月廿一日 政資（花押）

杠日向守殿

（太宰少貳冬尚より杠主馬丞へ）

小城郡之内

きつ河分

一所 七町

天文十四年

三月十二日

（花押）

杠主馬承殿

肥前国小城山之内布類井八町之事預候少も相違儀於有 者別人 可申付也

天文十四年

二月十日

冬尚（花押）

杠主馬承殿

昨廿四原田手衆濟々捕出候之處以其方少衆引懸松龜討崩数人被討捕候忠儀之次第感悦候必以面可賀候恐々謹言

八月廿五日 冬尚（花押）

杠主馬允殿

昨八日於山續殘黨現形之由候之條大窪総七郎差遣候此刻之事別而被

副心忠儀粉骨頼入候謹言

七月九日 冬尚（花押）

杠主馬允殿

其表之儀精到来得其心候殊筑前目之儀是又成分別候替事候者不閣注進肝要候仍爰元動之儀急度申付候神代刑部少輔申合馳走專一候恐々謹言

六月廿三日 各尚（花押）

杠主馬允殿

態染筆候仍其身之事数年之勞劫殊去年已来別而粉骨之段可属無事併口惜次第候存順儀於抽忠貞者望之地十町之事可加扶助候猶筑右可申候恐々謹言

正月五日 冬尚（花押）

杠主馬允殿

（少貳政資より杠平右衛門尉へ）

今度於早良曲洲合戦粉骨之條神妙之至候弥動之儀憑入候此口事到中途取出候近々可着陣候猶分捕高名之段忠節無比類候恐々謹言

八月三日 政資（花押）

杠平右衛門尉殿

(千葉胤連より枉主馬允へ)

肥前国小城郡栗並山之内兩門之事任先例之旨知行不可有相違之状如件

天文十八年

六月廿一日 胤連(花押)

枉主馬允殿

これらの文書によって、今後、未解の史実が究明されることを期待したい。

六 北肥山内の諸郷士の系譜

鳥羽院山城主系譜

人皇五拾六代清和天皇—貞純親王—經基(源氏)

満仲 頼信 頼光 頼義 義家(号八幡太郎)—義国

義重 義俊 義成 從五位下 俊国 從四位下 里見伊豆守 西川彈正

俊国 文治五年八月日後鳥羽院為勲功賞山城国久世郡西川莊從是姓氏西川氏

家房 從五位下 左衛門大輔

嘉禎三年冬潜嶋岐国海部郡刈田郷上皇後鳥羽院供奉下向肥前国

「義信(修理大輔)—西川伊豫守 号新三郎正房 実 義信弟

西川伊豫守永祿五^{壬戌}九月九日於三瀬城中神代勝利討

鳥羽院山城賦襲逢西川家感輸伝来青氈西川家系譜

瓶入松尾山埋柰柁下。

家尚 教信寺開基、山号鳥羽院山 (源右衛門尉号真教師)

莫水事趾栖教信寺而後剃髮為此時開基、往昔草創密宗而中古

為禪寺名教心寺皈依浄土真宗教教心之心号教信寺也

注 脊振山東門寺山僧水上坊仁秀之袖下にて出家す(「神代伝記」)

行俊(坂田光福寺・鹿島善徳寺開基)

了真 秀山 龍水 秀山 (小城山内大串光勝寺 惟空之弟)

(「鳥羽院山教信寺由来記」)

2 名尾山城主略系

名尾式部少輔—名尾左馬之助—名尾平右エ門

川浪駿河守—川浪一右衛門

3 腹巻山城主

腹巻伯耆守—不明

神埼郡絹巻里修補数心寺而皇居盡忠以奉仕上皇御不豫更而延元

々年二月二十一日崩御。御壽六拾歳同奉葬於後山々上且依遺勅奉崇御神從此時絹巻里名称鳥羽院。家房籠居於山中而終身。

注『大日本史』延応元年二月苅田郷崩御全山中於火葬北面土藤原能

世御骨収京師遷大原西林院納骨。(水戸中納言光圀編)

正俊

建武元年^{甲戌}月千葉大隅守平胤貞下向肥前国小城郡。正俊父子

相属而屢々有功依是為山内之奉行職於山中処々賜采地且加封佐

嘉郡神野村百式拾町

正勝 兼重(筑前守)—重俊(中務大輔)—俊氏—俊綱(左衛門大輔)

綱正(駿河守山内奉行)

綱正之者永正七年三月二十一日卒号大圓寺殿行年六拾七歳

正氏(美濃守中務大輔)

天文年間造宮後鳥羽院宮再興教信寺。

家正(修理大輔)—正信

家綱(民部大輔)

貞氏(兵部大輔)

西川壹岐守

(属龍造寺氏住神野村

(慶長十三年十一月十三日入寂法名松鎮

西川刑部左衛門 西川清左衛門(属小城鍋島紀伊守元茂公)

4 一番ヶ瀬山城主

一万ヶ瀬兵衛尉—一万ヶ瀬左近丞

元和四年 六月三日藩祖鍋島直茂に追腹殉死

法名溪風覺誓居士、幼名伝藏中頃清次郎

5 畑瀬山城主

畑瀬兵部少輔盛政—畑瀬越前守—畑瀬十郎左衛門

6 栗並山城主

栗並伊賀守—栗並治部少輔—全九郎右衛門

全吉兵衛—全一郎左衛門(村山氏祖)

7 菖蒲山城主

菖蒲遠江守—菖蒲入道飯雲

8 無津呂山城主

賀村讃岐守—賀村和泉守—賀村丹後守

藤原鎌足八世孫・藤原秀郷八世從五位下左近衛尉行高、文治三

年近江国神埼郡常富莊。賀(嘉)村氏四世孫嘉村俊行弘安二年

(一二七九)千葉胤貞肥前国小城郡下向の時、從つて下向、その

休息処として摩那古村大野坂に築城して住し、俊行十七世の孫

嘉村新左衛門に及び一族門葉広し。



神代大和守勝利画像
(佐賀市久保泉、勝宿神社蔵)

三瀬を含む北山一帯は、戦国時代、この地の統主となった神代勝利を中心とする歴史が、その主流となる。したがって三瀬の歴史は神代氏の歴史といっても過言でないくらいの関係にある。その中できわだった豪傑で経世家であった勝利は、三瀬恒久の英雄として、親しまれてきた。

それだけにエピソードや伝説、由来、遺跡、遺物など多い。

一 神代勝利と三瀬城

第四節 神代勝利の一生

歴史を述べる項で、勝利の一生のみを述べることは望ましいことではないが、勝利を中心とする動きは、また三瀬を中心とする動きにもなる。

それで歴史的な記述とは、多少異なるが、『神代家伝記』『鎮西要略』『北肥戦誌』などの資料を中心に、かつてこの地で自由にはばたき、肥前の大半を制覇したこともある神代勝利の動きを、物語り風に生き生きと再現し、往時を忍ぶことにしたい。

なお、史実として、実証的に乏しい箇所もあるが、古くから伝承されていることであり、現在、何らかの形で残しておかないと、永久に忘れ去られる恐れもあるので、あえてこのような文体をとった。

まず神代勝利が居城した、三瀬城を眺めてみると、ここは三瀬村宿の東北、城山（五六〇丁）に当たる山城。この城は先城主三瀬土佐守宗利によって築城された。城跡からは国境の三瀬峠を経て、筑前の連山が望まれ、下を見おろせば、断崖絶壁の岩場が底深い谷に通じている。また南は遠く佐賀平野や筑後の山々が見渡され、文字通り難攻不落の砦（とりで）であった。この城は戦いのときだけ使用する実戦の城で、平時は山ろくの館で政務がとられていた。

この城を中心に活躍した神代勝利の活躍は後述するが、現在、この場所は雑木林になっている。山頂の中央には、明治七年四月、神代党の旧臣によって建てられた石祠があり、「勝玉大明神」と称し、神代勝利を祀っている。この場所までは、三瀬宿のバス停から徒歩で一時間ばかりかかる。毎年四月七日、旧臣によって祭が施行され、

9 合瀬山城主

合瀬因幡守（法諡前因州太守光屋道清禪定門）

合瀬掃部介（法諡前因州太守天叟久公禪定門）

合瀬参河守（法諡前参州太守可陰道光禪定門）

大野金兵衛 各祖

10 梅野山城主

梅野源太左衛門（姓菅原）—梅野兵部太夫—梅野帯刀

梅野八藏 梅野十藏 垣松宗善 中地五郎左衛門各祖

11 松瀬山城主

松瀬土佐守菅原宗栄

松瀬又三郎宗茂
松瀬能登守利宗

（永禄四年九月川上合戦宮原口で戦死）

松瀬孫助（石井越後守忠本の四男（養子）文禄二年^{癸卯}己七月二十六日高麗で戦死、法諡法善）

松瀬作右衛門・陣内八兵衛・早瀬十郎兵衛・栗並太郎兵衛

執行九右エ門・執行善左衛門 各祖

松瀬氏は東国の士で文永年中野田周防守とともに下向、当山に住すという。

12 小副川山城主

小副川左衛門尉菅原教貞

小副川隠岐守・小副川出雲守・小副川興七兵衛・

小副川成兵衛・全新右エ門・同弥右エ門・同金兵衛 各祖

東国の士で、松瀬氏・野田氏とともに下向住すという。

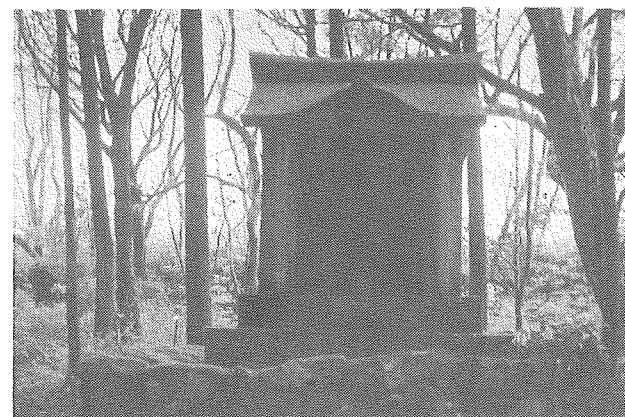
13 廣瀧山城主

廣瀧新三郎

廣瀧一藏・同長右衛門・同源之充 各祖



三瀬城の遠眺



城跡にある勝玉明神石祠

二 勝利北山内全域の 統主となる

北肥山内には溪谷小盆地が数多く点在し、各小盆地は山や峯に隔てられていて、それぞれの環境が類似しているためか、各盆地を掌領支配する武士たちは、相互間に興亡をかけるような紛争はあえて起こさず、そのかわり全体が一致して行動を起こすことも少なかった。

しかし全国が戦国争乱の世となつてからは、外部勢力の侵攻がいつあるかわからない不安な情勢となつてきたため、心ある武士は山内団結の要を考えようになった。三瀬山の城主三瀬土佐入道宗利もその一人であつた。

宗利の祖は文永元年（一二六四）東国から西下して北肥山内に入り、三瀬山の領主となつた野田周防守大江清秀であるが、父は第四代野田長門守房家人道浄安と号し、この代に姓を三瀬と改めた。それ以後、野田氏は三瀬氏と称するようになった。

享祿年中、宗利は知謀すぐれた老巧な領主として三瀬山一帯に善政を施し、一族門葉広く栄えていた。或る一日、一門親類が集まつて酒宴を開いているとき、神代新次郎という武者が、この近くで剣術

勝利の偉業をいまも称えている。遺跡としては山頂の城跡にわずかな石べい跡が雑草の中にみられる程度である。また館跡は城跡より東に下った河内谷のところに残っている。

この城は近世の初頭・鍋島直茂が神代党の結束を恐れ、鍋島家の御親類として、小城郡芦刈に転封を命じたため、七十年あまり続いた三瀬城も廃城のやむなきになった。しかし、この城は廃絶期がはつきりしており、近世における城の改変の跡がないため、戦国時代の山城跡として、城郭史上きわめて貴重な存在となっている。

の指南をしていて、尋常ならぬ豪勇らしいという世間話がでた。

これを聞いた入道宗利は、その者がまことの達人であればわれら一門の師範として迎えようと思ひ、甥の三瀬九郎左衛門（宗利の第三瀬和泉守入道宗円の子）を招いて、その真否を見とどけてくるように指示した。九郎左衛門は早速、神代新次郎の宿所、鬼ヶ鼻の南面下方・井手野村吉野山麓の寺谷にある梅溪庵（中鶴梅谷山円光寺の旧寺）へ行き、直接に面会を求めた。新次郎に会つてその容姿をみると、威勢自然にそなわり、猛からず、眼中するどく、威風骨相非凡の人物であるとしてとつたので、急いで三瀬山に帰り、宗利や一門の人々にこのことを報告した。宗利は乱世の今、稀なる人物だと喜び、重ねて九郎左衛門を使者として遣わし、三瀬山に師範として来ていただくよう懇請した。新次郎が承諾したので、早速三瀬山城に迎え入れて式儀礼や種々の饗応をすまし、一門家僕にいたるまで師弟の約を結んだ。

それ以後しばらくの間、館に留まってもらい、面接したり聲かけたりしているうちに、新次郎が、才知すぐれて仁愛厚く、剣術早業に妙を得て武勇備わる武士であることが益々はつきりしたので、一門ごとく師と仰ぎ尊敬するようになった。

日数が重なるままに、土佐守宗利がつくづく考えたことは「山内は谷峯多く道隔たり、諸所の領主は各自心が別々で、しばらくも一致せず、彼に従いこれを討ち、ややもすれば他国から掠め取られること必定である。これはひとえに山内を統一する器量すぐれた大將

がなためである。この神代新次郎殿を取り立てて総大將となし、山内諸勢力が一致して味方するならば、おそらくは近里は勿論、隣国までも手に入れることができよう。この旨を山内の各領主に謀報し、早速加盟してもらつて、この考えを実現させよう。」ということであつた。

そこで先ず、辨舌の才ある使者を選んで松瀬城へ遣わし、城主能渡守又三郎宗茂へこの趣旨を談じたところ、もつともな事であるとして同意したので、早速各山の城主にもこの趣旨を伝え、三瀬山の館に召集した。

召集した諸山の領主は、松瀬山城主能渡守松瀬又三郎宗茂・扛山城主扛紀伊守種満、藤原山城主藤原但馬守、畑瀬山城主畑瀬兵部少輔盛政・菅浦山城主菅浦遠江守・栗並山城主栗並伊賀守・梅野山城主梅野源太左衛門・広滝山城主広滝新三郎・合瀬山城主合瀬因幡守・名尾山城主名尾左馬允・以下の面々であつた。

評議は即日一決し、連判を押して主従の契約を堅めた。なお三瀬氏の居城はきわめて要害の地にあるので、ここを総師神代氏の居城として勧め、三瀬土佐守宗利を奉行兼後見役と定めた。

神代新次郎は、名を神代刑部少輔勝利と改め、北山内の総師として三瀬城に入り、ここに宗利の願つた山内統一が実現したのである。勝利はその後、小副川の谷田に要害の地を見立てて第二の城を築き、かねてここに在城することにした。

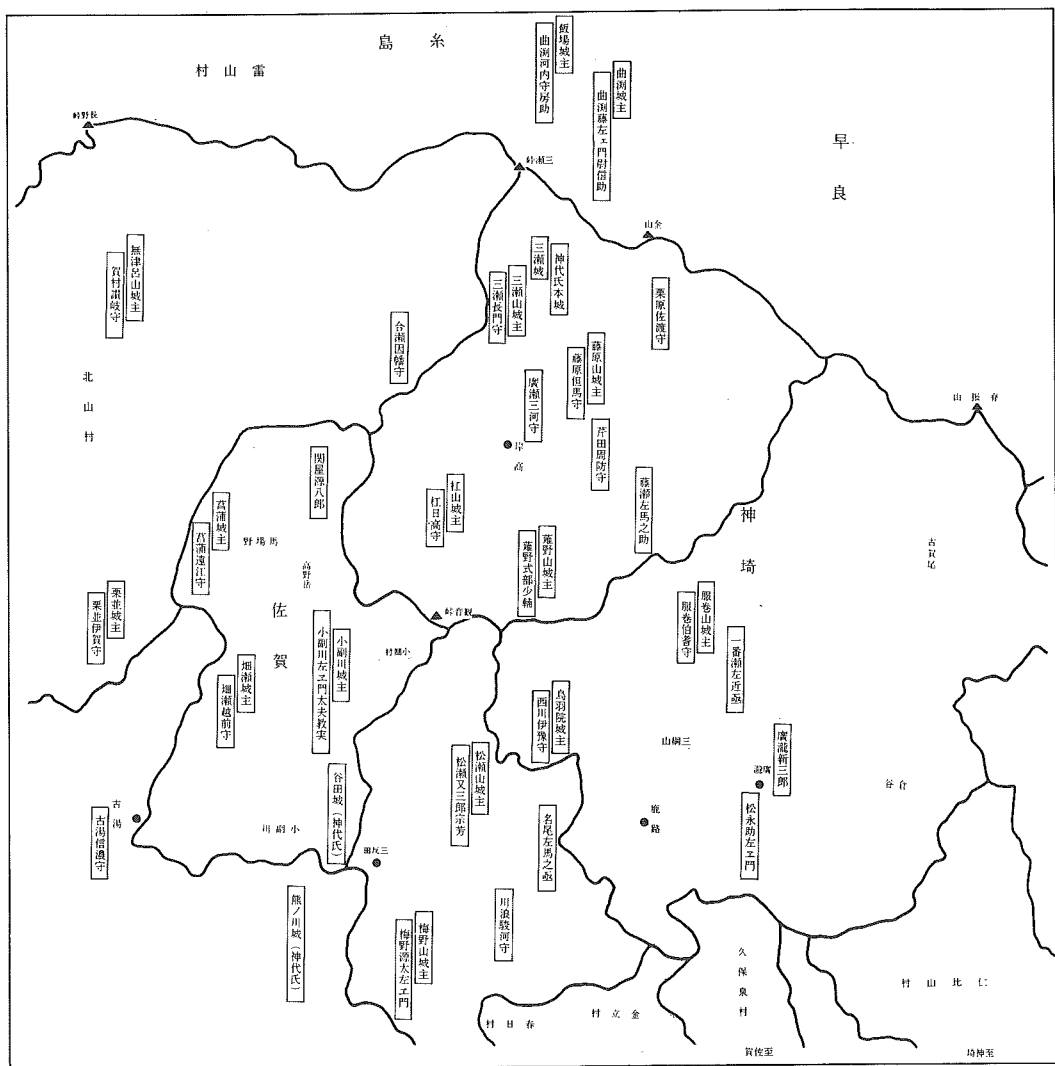
山内各山の領主は総帥と定めた神代勝利によく仕えて君臣の礼節

を怠らず、その徳をならつて住民を愛撫し、従うものは恵み、叛くものは懲らしめ、賞罰ともに適正にしたので、はじめは服従しないものもあつたが、しだいに帰服し、あたかも諸代の恩顧を受けたもののように、

山内の党ごとく臣従し、勝利の徳を慕うようになった。後に勝利は山内の住民から神代大和守武辺朝臣勝利公と仰がれ、山内はいうに及ばす、肥前、筑前の所々を領しその武威を近国に振った。

天文六年^{丁酉}、嫡子長良誕生、父勝利二十七歳の子息で生母は副島氏の娘である。神代備後守蕃元（対馬守宗元の弟神代基五左衛門の二男）を少年後見と定めて厳格に養育され、成人の後、太郎次郎勝良と号し、その後神代刑部大輔長良と改めた。父勝利に相續いて三瀬城に在って、三瀬城を改築補強し奇変進退自ら道に合、後には父に劣らぬ文武相達の健

肥 前 北 山 内 郷 士 割 拠 図



將と名をあげ、天文年中まで武略をめぐらし、近国に威を振るつた。

神代氏領の山内各山というのは、川上川の上流、山岳重疊たる山峽の谷間で、近世には北山きたやまと呼ばれ、二十六カ山から成っていた。

三瀬・藤原・久保・腹巻・鹿路・広瀧・杠（以上神崎山内）、関屋・名尾・松瀬・小副川・畑瀬・菖浦・梅野（以上佐嘉山内）、合瀬・藤瀬・古場・無津呂・大野・摩那古・古湯・大串・栗並・波多瀬（川上川西岸の小城山内）、杉山・市ノ川（以上小城山内）の各山である。

東西七里（二十八キロメートル）南北五里（二十キロメートル）といわれ、後には十四カ所の要塞を構えていた。

また、三瀬氏・杠氏・松瀬氏を神代家三人衆、菖浦氏・畑瀬氏を加えて神代家五人衆、藤原氏・栗並氏を加えて神代家七人衆と呼び、何れも股肱の重臣として神代氏を補佐した。

神代勝利を棟梁として大同団結を達成した山内勢は、勝利の胆勇才略と相俟つて、強力な存在となり、それ以後は、外部勢力との摩擦が却つて大きくなつて、自領の防衛のみならず、外郭への侵攻擴張をめざすようにもなり、遂には佐嘉の勢力、龍造寺氏との争亂を五十年間にわたつて繰りかえすことになった。

当時の戦鬪は騎馬個人の戦いから歩兵の密集戦鬪に変わり、軽装駿走をもつ足軽が戦力として重視されたので、土民の強健なものは足軽として狩り出された。

山内武士は被官しても扶持が少なかったので、平常は農民と同じく、狩獵・農耕・その他を生業として営み、一朝事あるときは、か

ねて用意の具足に身を固め、使いならした武器を持ち、軽卒は徒歩上士は飼ひ馴らした愛馬にまたがって、主君の旗下へ馳せ参じた。

農業では、灌漑の工夫整備によって新田の開発も進み、農具の改良、畜力の利用等によって生産も増加し、手工業では、皮革なめし土器作り、麻糸ねり、織りものなどの技術が進んだ。

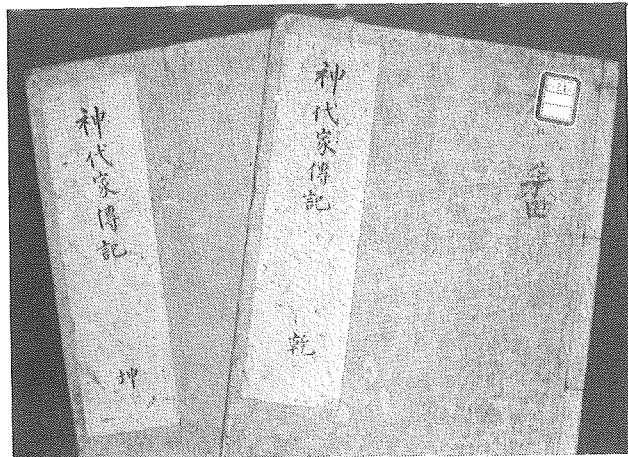
当時の農民は一般に領主から年貢・公事・夫役を課せられ、年貢として収穫の三割から五割ぐらいの米を納め、公事として土地の特産物や畑・山林の産物・手工業品などを納め、夫役としては、領主の直営田の耕作・年貢運搬の労役・警衛のための兵士役などに出なければならなかった。

また、『神代家伝記』に、「出家・商夫による諸説が流布され不審のこと多く」とあるのをみれば、当時は商人や僧侶の出入も多く、商業もある程度盛んになって、商品の流通がすすみ、民衆仏教も普及していたのであろう。

三
神代氏系譜

神代氏由緒と系譜

『神代家伝記』によつて神代家の祖先を遠く尋ねると、神武天皇から八代の孝元天皇の第三皇子を彦太忍信命と言ひ、その御子屋主忍男武雄心命は武内宿称を生まれたが、神代家の祖はこの武内宿称



神代家傳記

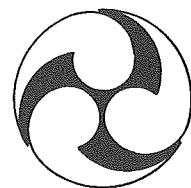
であるという。

武内宿称は、景行・成務・仲哀・神功・慶神・仁徳の六代の帝の重臣で、摂政として仁政を天下に施し、徳を四海にひろめ、在官二百四十四年、仁徳天皇五十五年丁卯、春秋二百九十五歳で薨去した。これらの年数は諸

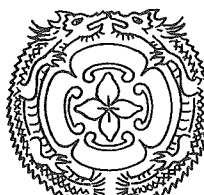
説多く、そのままだに信じ難く何れも後代に推計して録したものであろうが、当時は春秋二回歳をとったといわれているので、一年を二歳として記録したものと考えられる。

筑後国御井郡高良山に垂迹された玉垂の宮高良菩薩というのは、この武内大神である。我が国の軍神として世に知られた神であるから、弓箭に携わるもの（武士）は皆尊崇しないものはなかった。

そのむかし神功皇后六十二年に三韓退治のとき、武内大臣は皇后の副將軍として遠征し、逆徒を悉く討ち従え、その武略や智謀は、臨機応変自在にして恰も神のようであった。帝は歎感のあまり「神



巴左頭三



瓜木龍立

のときの功によって、筑後国を給い今の神代村に住むようになった。昔は熊代と書いたがこの時神代の文字にかえ、物部の文字を武迎と改めた。高良山では今でも物部の文字を用いているが、神代家はこれ以後武迎を用いている。

物部というのは、神武天皇の御代、宇摩志麻治命の武功が勝れていたもので、軍兵を召具して内裏の守衛を命ぜられたが、命の率いるこの軍兵を物部といった。武士を「もののふ」というのはこの事から始まったという。

武内大臣の苗裔は相統いて高良山に住して近境を領してきたが、文治元年^乙、神代良光の時に、館を山から今の神代村に遷した。人皇八十二代龜山天皇の文永十一年（一二七四）蒙古の軍船が我が国を襲い、十月十六日対馬を攻略、同十九日筑前国今津の沖を通り、同二十六日博多に迫り上陸しようとした。鎌倉幕府の執権北条

將軍家政所

於博多津去文永十一年蒙古襲来之刻 肥後薩摩日州隅郡之諸軍馳参之砌 筑後河神代の浮橋九郡第一之難所之處 神代良忠以調略諸軍輒打渡 蒙古退治之事偏 玉垂宮冥慮扶桑永代爲安利之良所 仰如件

建治元年十月廿九日

別当相模守 平 朝臣

補佐

高良大明神社司

神代民部大輔丹波良忠

貞博越前守

右以勅宣之旨令補之處也 貞被承知之状 如件

正和元年十二月日

左大弁 藤原清房

正慶二年（一二三三）神代良基は少貳氏に与し、探題英時と戦つて勝利を得、このとき英時は城に逃入つて自害した。

延元元年（一二三六）足利尊氏が九州に在つて肥後国の菊池武俊を攻めたとき、良基は高木氏・松浦氏らと同じく一色太郎・仁木義長の軍に加わつて奮戦し、軍功をたてた。菊池武俊はこのとき負傷して敗走したが、程なく死去した。

時宗が全国に教書を下したので、諸国の軍勢は博多へ馳せ集つた。

九州の肥後・薩摩・日向・大隅の軍勢も馳せ参じようとしたが、筑後川の増水で進むことができなかった。この時、神代民部少輔良忠は夥しい舟を調略して、筑後の大河に舟いかだの浮橋を掛けたので、諸軍は容易にこれを通して出陣することができた。良忠はその外、度々の軍功によって、建治元年（一二七五）十月廿九日、鎌倉將軍從二位惟恭親王の時、執権北条相模守平時宗から感状が下り、また、花園天皇の正和元年^壬（一二三二）十二月、左大辨藤原清房から綸旨を下賜された。

（『川久保指出文書』より）

寄進

筑後国高良社

同国三井郡櫛原八十町

地頭職神代良基

右可爲祈禱精誠之旨料取之寄附也 守先例可不致沙汰之状如件

康永二年十一月九日

昔神功皇后勅以千満両珠令征討三韓 御帰朝之時満珠於当所納給

盡夜依御影迎号神代也 彼祭無怠勝之間元暦式年丹波良光從高良山

神代江被移住所云々 満珠祭国家安泰之所 盡末来際不可有怠者也

建長元年三月五日

寺社預所

家の紋でもあつたのである。

千布氏の遠祖は甲斐弥次郎の三男千布次郎兵衛尉利明である。彼岐郡から来て上佐嘉郡安富荘の地頭となり、千布に土生島の城を築き、姓を千布氏と名乗つた。利明十二代千布兵庫入道淨貞、その子十三代千布因幡守家利、十四代千布太郎左エ門茂利に至る。茂利は鍋島直茂の御側役、のちに小城藩主鍋島光茂の附人となつた。その後、姓を改めて柴田宗俊と言い、子孫は皆柴田姓を名乗っている。

家紋・立龍木瓜・三
武辺姓・初物部大臣
改物部之字武辺

人皇八代

孝元天皇

第三王子彦太忍命

生屋主忍男武雄命

心命——武内宿称

神代良光

を遷す

良忠

良材

一物部入道道元

一 对馬守勝元

神代兵衛左―當持坊
藏、永瀧次郎右工門、全軍
右工門、各組

對馬守宗元

神代甚五右工門

備後守蕃元

陣内小左工門 各組
全甚右工門

太田長蔵
神代伊右 工門 各組
神代與右 工門

✱

利元	勝利	女	宗光
福島周防守 (生母福島兵部太夫)	神代大和守、初新次郎 永正八年 ^{辛未} 生(生母陣内大和守利世女) 永祿八年 ^{乙丑} 三月十五日於烟瀬城死亡行年五十五歲 葬烟瀬山宗源寺 法名 覺譽賢利	母同前 (伊藤出雲守室)	
福島伊賀守		一、後妻	一、女子
福島甚右工門		千布兵庫入道淨貞、女 天正十六年 ^{戊戌} 四月十五日死去 法名稱白妙誓	嫁江上左エ門太夫長種(或云、高木長門守) 川久保妙福寺に葬る
福島彈正忠			
神代中務			
全 藏人			
中島善右工門			
朝日六兵衛			
洲上六兵衛			
各組			
長良			
刑部太輔 初勝良			
天文六年酉生る、母副島近江守女			
天正九年 ^{辛巳} 五月廿八日於三瀬城死亡行年四十五歲			
葬三瀬山長谷山觀音禪寺			
法名梁山宗異			
妻			
鹿江遠江守兼明女 元和二年 ^{丙寅} 二月十日死去			
法名桂譽宗說			

い、戦功をたてたが、神代物部入道・同村馬守勝元までは所領に異変はなかった。

ところが人皇百五代後柏原院のとき、足利將軍の末、參議中將源義隆の時代になって、天下は大いに乱れ、諸国の武家は交々に利を貪り、互に覇を争つて戦い、弱肉強食の世の中に変つた。

その頃、筑後の国では蒲池・西牟田らの諸氏の勢力が強く、神代

了難區、分神代象必情
 略法軍版、後象合近信
 中、師、聖靈實、
 校索、永代、為利、而作
 此件
 延治元年十月廿九日
 別為相模守事朝臣
 孫

川久保指出文書

光嚴院の康
永二年（一三
四三）十一
月九日、足
利尊氏は、
良基へ筑
後国三井郡
櫛原八十町
の地頭職を
与えた。そ
の証文は前
記『川久保
差出文書』
のとおりで
ある。

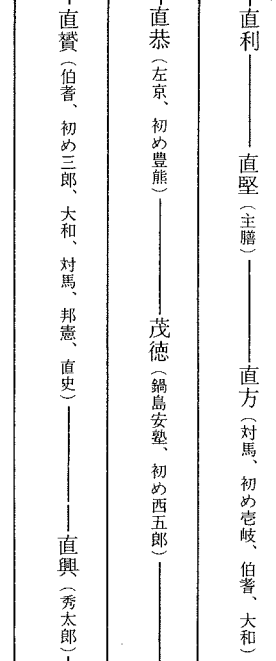
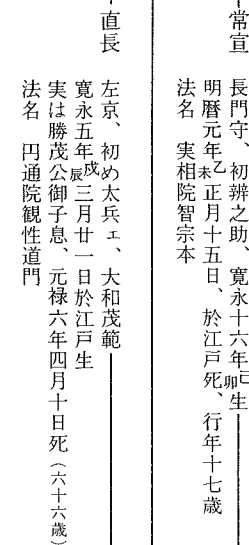
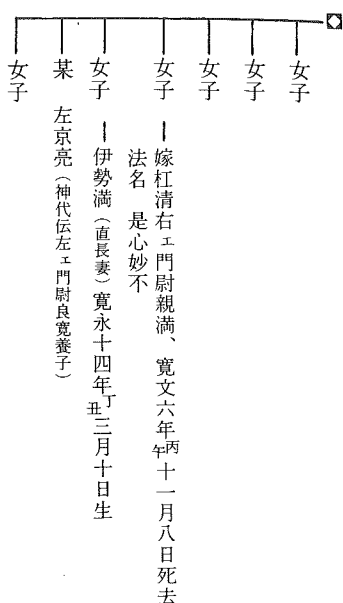
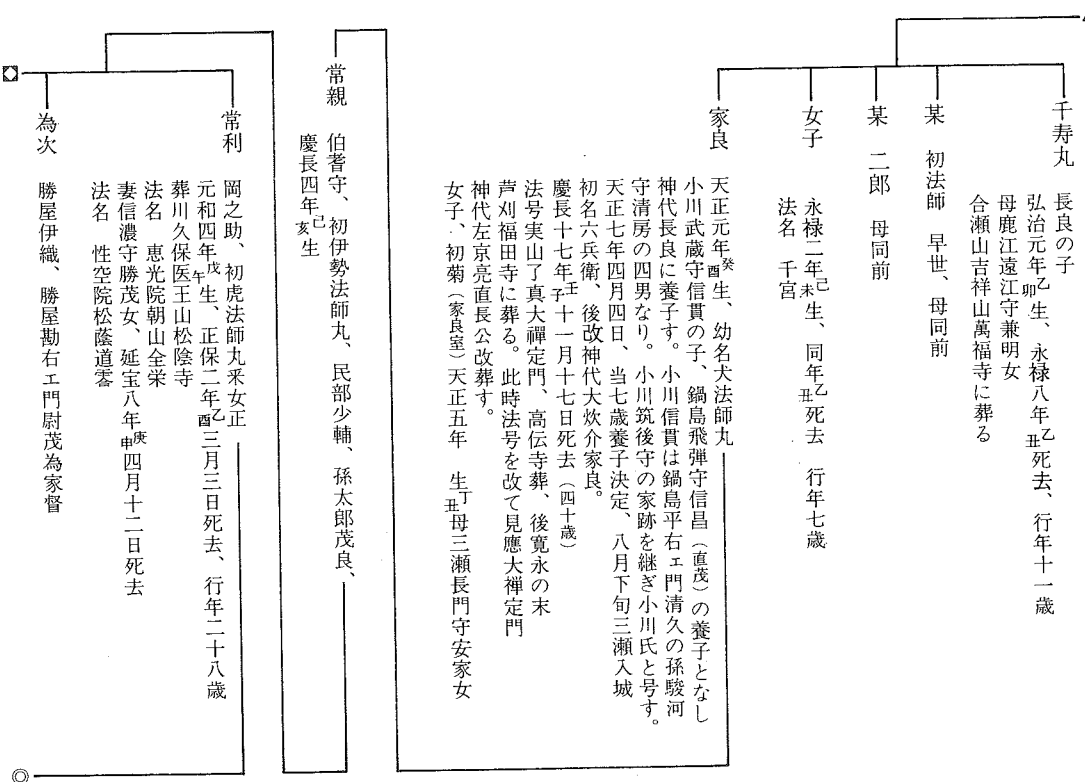
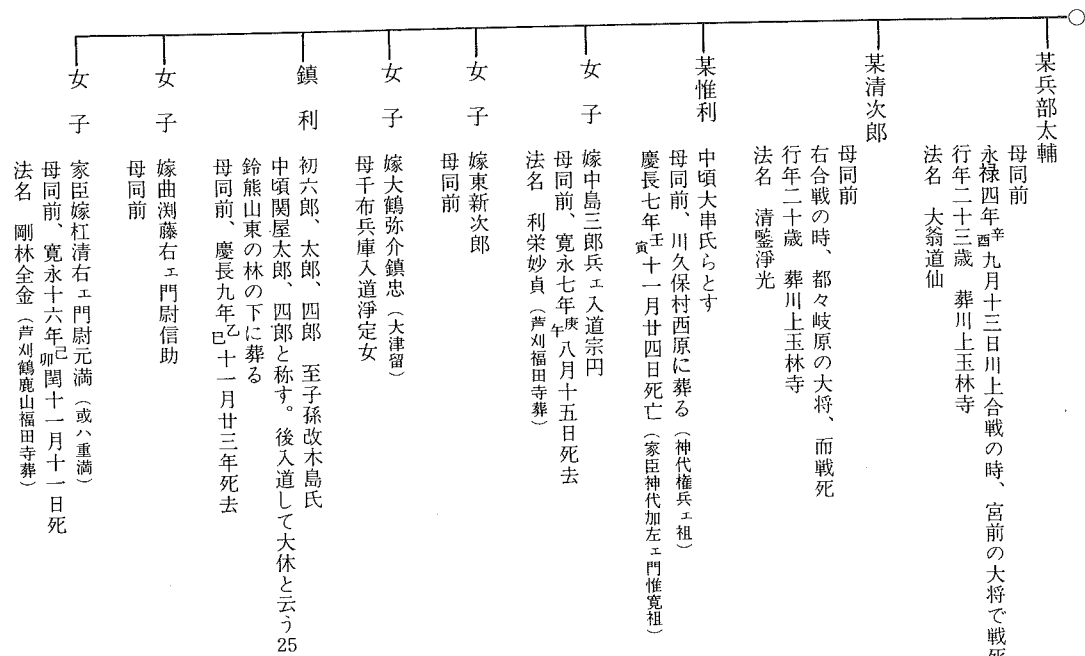
神代宗元よ
り以前は代々
近国所処で戦

となり、永正年中に始めて肥前に入り、松浦の波多氏にいささかの縁があるのを頼って一族ならびに弓空穂を付けた郎徒二十七人（神代二十七人衆）を召連れて、上佐嘉の内千布村を通っていたが、村雨^{さめ}がしきりに降り出したので、道端の地藏堂に立寄って雨の晴れ間を待っていた。丁度その刻、同村の住吉大明神で開かれた的^{まと}の会に出いた村主の陣内大和守が、この一行の様子を窺^{うかが}い見て、使者を遣わし事情を尋ねたところ、神代対馬守宗元の一行で、浪々の身であることがわかった。大和守はこれを気の毒に思い、懇^{むね}に自分の館に伴って帰り、丁寧にもてなして、近国弓矢の強弱など様々な話をしていたが、雨が止みそうもないので、そのまま館に留めて置いた。

日を経て大和守は、最愛の娘を宗元にすすめて婿に取り、領地を与えて宗元を千布村の住人とした。やがてこの夫婦に新次郎（後、大和守勝利）・姫（後・伊藤出雲守の室）・孫九郎（後・対馬守宗光）が生まれた。

神代家で代々、征矢の紋を賞翫することには次のような因縁がある。

往古撰津国から住吉大明神を千布村に勧請するとき、陣内氏は千布氏とともに神を供奉して来て、ここに住した。明神の神文が弓に征矢であるので両氏ともこの紋を用いることにした。対馬守宗元は前述のように、陣内家の娘婿となつてその跡を継いで勝利を生み、成入した勝利は神代家を継ぎ千布氏の娘を嫁に迎えたので、弓に征矢



2 周防守利元弟新次郎 (勝利) に神代家相統をゆずる

新次郎の別腹の兄に周防守利元という人がいた。この兄は元来正直で知恵も深かったが、弟新次郎の生立ちを見ていて、その器ただものでなく、才知胆勇ともに人に勝れているので、我が家を再興するのはこの弟であると思い、父対馬守にこのことを度々話し、家の相統は弟新次郎にしてもらいたいと頼んだが、対馬守は兄をさしおき弟を立てることはできないといって承知しなかった。また、利元は幼少の頃眼を傷ついていた。利元は聞き入れない父に向って、自分は不具の身で世間に対しても、家のためにもよくない、その上器量も弟に及ばない。今戦国の世に当って必ず家を起さすということではできそうもない。なんでこのままで過ごされようか。家は相統を以って本意とする。「大器は小家に益をなし、大功は小瑾を顧みず」という言葉がある。どのような御所存があつて承知していただけないのかと、しきりに訴えたので、対馬守はしばらく思案した末、そのようにいうならば当所の明神に参詣し、家嫡のことを神慮に任せて定めることにしようといって、兄弟を始め一門の人々を伴い住吉大明神に参詣し、神樂を奏して幣帛 (神に捧げるぬぎ、ミテグラ) を捧げた後、聞 (くじ) を拈 (ひ) んで占ったところ、惣領は新次郎ときまつた。周防守は席を退いて新次郎の次の座になお、祝の儀式が厳かに執り行われた。これが実に神代家再興の基となったのである。周防守が未然に家の将来を考え深くみきわめたことは、他に類例の少ない

志であり、その徳が隠絶の世を継ぎ廃潰した家を起させたのであって、実に知恵深い行為であった。

周防守はその後姓も辞して、外祖の福島兵部大夫の遺籍を継ぎ、福島周防守利元と名乗って、家臣の礼をとった。

福島周防守利元（生母福島兵部大夫ノ娘）

神島伊賀守・福島甚右エ門・全嘉兵衛神代彈正忠神代中務各祖神代家を継いだ新次郎は、のちに千布家を出て剣術修業の身となり、肥前国中はもとより隣国遠境まで回って、有名な剣客と手合わこのように他流と出合って数年の間、切磋琢磨したので、剣術・兵法はもちろん鎗術・柔術・捕手などの達人として益々有名になり、数えを乞う門弟も、あちこちに多くなった。

享祿年中、山内藤原山寺谷の梅溪庵に來た頃は、北山神崎小城山内の者はこぞって入門し、門弟は五百人にも達するようになった。新次郎が三瀬城に指南として迎えられたのはこの時である。

三瀬氏一門の剣術兵法師範となった新次郎が、三瀬城主三瀬土佐守宗利の提唱によって、北山内全域の総大将となり、神代大和守武辺朝臣勝利と名乗って三瀬城に拠ったことは前述のとおりである。

四 勝利・龍造寺の家嫡を討つ

天文の頃、肥前の国では、少弐冬尚の威勢が衰え、佐嘉に龍造寺

その中でも山内の神代氏と佐嘉の龍造寺氏とは雌雄を争い、互いに隙をうかがっていたが、天文十四年神代勝利は高木鑑房・江上武種・馬場頼周・小田政光・本告頼景らと相語らって、少弐氏のために軍を起し、佐嘉水ヶ江城主龍造寺山城守家兼入道剛忠を攻めた。

剛忠が防戦に困っているとき、馬場頼周は偽計をめぐらして剛忠を謀り、正月二十三日夜、剛忠の嫡男豊後守家純・二男和泉守家門・家純の三男孫三郎純家の三将を川上に誘い出し、また、家純の嫡男六郎次郎周家・家門の嫡男三郎家泰・家純の四男孫八郎頼純の三将を城原條へいざない出して、龍造寺家の諸將を二分するのに成功した。頼周がこのことを急いで山内の神代勝利へ通報したので、これを聞いた勝利は、神代豊前守に軍勢を差しそえて城原城に急派し、馬場頼周に助勢させた。

一方、川上には家純・家門・純家らが、今夜宿陣するという確実な情報がいだったので、自ら軍勢を率いて出馬し、その夜のうちに川上の宿陣に押し寄せた。

佐嘉勢はこの不意の急襲にあわてて防戦につとめたが、味方は二百に足らない小勢であったので、衆寡敵せず残り少なく討死し、家純・家門・純家の三将も、もはやこれまでと自害して果てた。

このとき、孫三郎純家は達筆の武人であったが、自害するとき、淀姫大明神の壁板に向い、指を喰い切って、流れ出る血潮で古詩一章を書き残した。

山遠雲埋行客跡 松風寒破旅人夢

氏、山内に神代氏、蓮池に小田氏、その外、筑紫・横岳・八戸・高木・江上・姉川・馬場・本告・千葉・大塚・後藤・大村・有馬・深江・松浦党の諸氏が、ある時は彼を謀って和を調え、ある時は国中が他国の諸將に與し、是を侵し彼を攻め、小を助け大を討つ、というような合戦迫合の止む時とてもなかった。

注 山は遠くして雲は行く客の跡を埋め松風は寒くして旅人の夢を破る。相従う歴々の者には、堀江大膳・新郷伊豫守・片田江七郎兵衛・同五郎兵衛以下の面々があつたが、いずれも力戦奮闘よく戦って討死した。

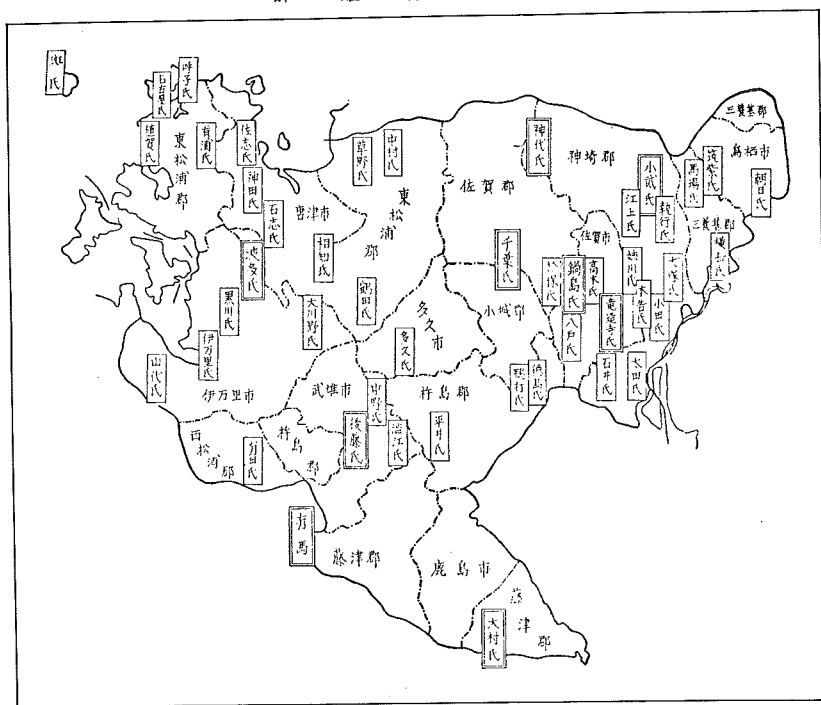
家純は剛忠の嫡男で隆信の祖父、家純は剛忠の二男で惣領職隆信の室の祖である。龍造寺の家嫡、剛忠の世嗣であるので、千万の敵を討つたよりも大敵を亡ぼす基はこれに勝るものはないと、勝利はじめ神代勢は勇み立ってよろこんだ。

神代勢は翌二十四日の明け方城原（勢福寺城）に着いたが、勝利は豊前守や頼周と計って、城原條へ向う龍造寺の三将も残らず討ち取る計略をめぐらし、神代の軍勢は村かげに伏せておいた。

それとは知らぬ佐嘉勢は、和泉村の宿陣玉泉坊を出発し、祇園原（神崎郡尾崎）にさしかかってきた。豊前守はこの時とばかり、うしろから兵を起し、頼周は先方から取って返えし、前後から押し掛って、息をもつかせず攻めた。

不意を突かれた佐嘉勢は、逼れる道もなく奮戦したがしだいに討ち負け、大塚左兵衛・同新右衛門・同善八郎・野田謙書記・福地右衛門・九・百武藤左衛門・江副又三郎・西山小三郎・下村源八郎・多比良大房丸・平大炊助以下、死にものぐるいに切り回ったが、多勢に無勢で大勢は如何ともし難く、ついに討ち負け、周家（家純の嫡男・隆信の父）・家泰・頼純（戦死の場所に墓あり）の三将をはじめ付き従う士卒は一人も残らず討ち死して戦は終った。

図 割 雄 群



神代豊前守は引きあげて、この由を勝利へ言上したところ、勝利は、昨夜川上で三将を討ち取ったうえに、今日また残りの三将を討ち取ったことは、龍造寺の胤を断つたも同然であると、大いに悦び、豊前守には祇園原の軍功をねぎらい、太刀一振と金子を賞として与えた。

勝利はこの戦果に乗じて、味方する諸將に牒状をまわして兵を集め、佐嘉城を取り囲んでしきりに攻めた。龍造寺剛忠は、二度と得難い子や孫を一時に六人も討たれた上、激しく攻められたので、守るに力尽き果てて、潜かに城を抜け出し、筑後をさして落ちて行った。

こうして、龍造寺の家は、もはや断絶の外はなかうと思われたが、筑後に落ちた剛忠は、程なく鍋島清久らに迎えられ、三月下旬軍兵を率いて佐嘉に帰り、城番に当たっていた小田政光を逐い、水ヶ江城に再び入城した。

翌四月、小城の祇園の城にいる仇の馬場頼周を攻め、城を捨てて東に敗走しようとする頼周父子を討ち果したが、子孫一族の怨敵神代勝利を滅ぼさないうちは、遺恨やるかたなく、昼夜報復の謀計をめぐらしていた。しかし本懐を達し得ないまま、天文十五年三月十日、九十三歳で水ヶ江城に没した。

その後、龍造寺では剛忠の遺言によって、門葉家臣会議を開き、龍造寺周家の嫡子（剛忠の孫）で中納言（または四月十八歳）と名乗り、出家して宝珠院（佐賀市鬼丸）にいたのを、石井尾張守兼清の屋敷

で還俗させ、胤信と呼ばせて周家の跡を相続させたが、まもなく本家の大和守胤栄が亡くなったので、胤栄の夫人と胤信を結婚させ、龍造寺の宗家を継がせた。胤信は天文十九年七月、大内義隆の敷奏によって山城守と称し、義隆の名の一字をもらい、名を隆信と改めた。

大内義隆一字書出

大内義隆 花押

隆

天文十九年七月一日

龍造寺山城守殿

（『龍造寺文書』大内義隆書状）

これが、のちに武略拔群九州に勇名を馳せた武將龍造寺山城守隆信である。

五 勝利・少貳冬直に通じて隆信を攻める

隆信が棟梁となつて龍造寺の体勢が漸く固まると、隆信は先ず怨敵神代勝利を討とうと、昼夜その策略を練った。ところが龍造寺一族の中にも嫡系の家臣土橋栄益ら隆信に快からず思うものがいて、このことが洩れて神代勝利にも聞こえたので、勝利は逆に隆信を討つ機会をねらっていた。

天文二十年（一五五二）隆信のうしろだてと頼む大内義隆が、陶晴賢

六 隆信再起して水ヶ江城に入る

筑後に流浪した隆信は、天文二十一年肥前帰国を企てたが、筑後を船出してから有明海上で暴風雨にあい、難航して杵島郡に漂着した。しかし、有馬の兵にさまたげられて上陸することができず、再び筑後に引き返した。

翌二十二年七月下旬、再び筑後をたち、与賀莊飯盛城主石井和泉守忠清の一統及び川副ら旧領の郷土農民らに迎えられて鹿江崎に着

船し、同月二十七日に威

徳寺で旗を挙げた。



隆信水ヶ江城入城図

このことが山内へも聞えたので、勝利は急ぎ兵を率いて先ず千布の砦まで出馬し、小田・江上・高木・八戸らの諸氏と申し合せて、直ちに隆信を討ち果そうと企てたが、神代領に据置いた所々の代官から、今度、隆信が筑後から帰ったのは、小田・江上の内通があつ

この戦の結果、山付きの里は言うに及ばず、東は牟田土井、西は小城郡を境として、巨勢・大財・愛敬島・三溝・多布施・長瀬・その外味方の八戸・高木氏らの私領の外はみな神代氏の領地となった。下佐嘉は今度味方した諸氏で分け取り、水ヶ江城は土橋栄益を見んとして鑑兼を城主にし、小田政光がこれを守り、海辺の警固は高木鑑房にまかせ、村々の悪党制圧には八戸宗暘が当ることになった。

呼応して集ったこれらの大軍を擁して、隆信を水ヶ江城に取り囲んだので、龍造寺一族が龍城していかに防戦しても衆寡敵せず、敗戦は目前に迫った。形勢危うしと覚った隆信は、夜にまぎれて密かに城を脱け出して筑後に逃がれ、柳川の蒲池鑑盛の好意でその領内の一ツ木村に身をおいた。天文二十年（一五五二）十月下旬のことである。

て神代を倒す計略があるという。そこつに下佐嘉へ出馬されては由々しい大事となるであろう。という情報がいきりにはいった。

勝利は、この情報がもし事実であれば一家の大事である。ことに下佐嘉には私領もないので、ことさらに遠征しないでも我が領を堅固にまもれば、下佐嘉は八戸・高木支配の領地であるから彼等が防戦するであろうと考え、まず、古川佐渡守以下五百騎の兵を副えて八戸溝あたりまで出し、また多布施・愛敬島・牟田・土井には神代領の境ごとに多数の番兵を伏せて置いた。

隆信が下佐賀へ押し出して来ると、十五堀・精町その外所々に向かい、火花を散らして防戦した。しかし隆信の軍勢は数年の鬱憤をはらすのはこの時とばかり、勇みたつた鎗先も鋭く、高木・八戸の兵はしだいに後退し、ついに敗れて自領に引入ってしまった。一方、小田政光も佐嘉の城を守っていたが、戦かわずして城を明け、蓮池に帰ってしまった。

こうして隆信は本庄の梅林庵に入り、八月、兵を進めて八戸城の宗暘を攻めた。宗暘は急いで勝利へ使者をおくり、城中既に苦戦している。急いで後押しあれば城中からも討って出て、龍造寺を挟撃したいと告げたが、勝利からは「異説が多く流れる上に、小田政光が戦わずして引き退いたことなど不審の点が多く、こちらの備えを動かすことができない。宗暘もひと先ず和を調べて時節を窺うように。」という返事があつたので、宗暘は応諾して、最近掠め取つた龍造寺の領地を返し、隆信に和を請うた。隆信はこれを許し、佐嘉脱出

後三年目にして水ヶ江城に復帰した。

『神代家伝記』には「この時、神代方へは、隆信と小田・江上との間に内通があつて、神代を倒す計略があると拵え、また、小田・江上へは、神代と隆信と内通があつて、小田・江上を討つ企がある」と、出家や商人によって雑説が交々流布されたので、神代と小田・江上は互いに警戒し合つて、隆信帰城の時この三家は軍勢を出さず、隆信をたやすく城に入れてしまったのである。もし神代・江上・八戸・高木が一致して戦つていたら、今度の帰城はできなかったであろう。隆信はこれを了簡して、問者を放つてこのような雑説を方々へ流布したのである。これは利き目のある謀であると、勝利は後々まで称美した。」と伝えている。

水ヶ江城に入城した隆信は、鑑兼を筑後に追放し、鑑兼の権臣土橋栄益の首を刎ねた。鑑兼は後に、隆信の重臣らに頼んで、毫末も逆心を持たないことを陳辨し、ようやく帰国をゆるされた。

七 牟田繩手の合戦と

神代・龍造寺の和平成立

隆信は天文二十二年（一五五三）八月、八戸の城を攻めて宗暘を降服させたので、この勢いに乗つて近境蓮池の小田政光を降そうと考え、同年十月、隆信自ら軍勢を率いて蓮池城に押し寄せた。政光

は強勇の将であつたので城外へ討出て応戦した。そのうち本告・犬塚らが来援し、両軍互いに死傷者を出して力戦したが、終に政光方が討ち負けて和を請い、蓮池も隆信の配下におちた。

隆信の猛威は益々募り、今度は江上武種の城原の城（勢福寺城）を討つべしと、同年十一月十日、さきに降服した小田政光をだましうかして佐嘉勢の先陣を張らせ、神崎長者林の西、牟田繩手から攻め上らせた。その勢は一千余騎であつた。また、川東の道筋からは犬塚弾正・同右馬太夫らの崎村勢を進撃させ、隆信自身は大兵を率いて姉・直鳥の間に本陣を置いた。

この情報が早くも城原に聞えたので、武種は山内へ急使をおくり、神代勝利の出馬を請うた。勝利は急ぎ山内の諸勢を集め、これを率いて城原へ向かった。武種はこれを城外へ出迎えて勝利の出馬を謝し、城中へ招き入れて軍議を行った。その結果、東方の犬塚勢には武種が討ち、向うことになり、長臣の執行・諸岡をはじめ城原の全勢力を段々に出して備えを固めた。勝利は西方の政光勢にあたることになったので、先ず地の利を見回つてから配陣を定め、一番ヶ瀬・腹巻・鹿路の諸士に先陣を打たせ、三瀬・松瀬・杠・藤原・小副川・名尾・梅野・薙野・大園の外、山々の諸士あわせて三千余騎を前後に立てて、政光勢を目指して押し出した。

小田政光は龍造寺配下となつてから始めての戦いであるので、ひととき軍功を顕わそうと、勇躍して兵を進め、早くも接近して足輕の攻め合いが始まり、互に弓を射合わせた。おくれじと双方の勇士

が鎗で突込んだが、この牟田繩手は、左右に深い沼や水田が多くて敵味方の行動が自由にならず、さきに立つものが激しく打ち合い、汗にまみれて挑み戦つた。

このとき勝利は、足輕の兵に下知して、畔伝いに横矢を射させ、つづく兵にはかねて用意した三間柄の鎗を真向に持たせて、敵を叩きたてながら突進したので、政光勢はこの勢いに、たまらず一町ばかり引き退いた。

これをみた政光は元来強将であつたので、えりぬきの精兵を前後に立てて戦い一步も退かず奮戦した。しかし神代の精鋭にうちくだけかれ、戦いはしだいに負け色にみえてきた。政光は急いで本陣の隆信に使いをたて、「敵勢強く苦戦に陥っているが、我が勢は一步も引かず戦っている、我が陣の崩れないうちに急いで陣を進められよ。」と櫓の齒をひくように度々催促したが、隆信は何故か動こうとしなかった。政光は大いに怒つて「隆信の所存卑陋なり、然らば吾此処に死せん」と、いよいよ血氣の勇を振るい、縦横に駆け回つて命の限り戦つた。神代勢は口々にこれを罵り「政光は昨日までは味方にあつて佐嘉を攻め、今日は引替つて多年朋友のよしみを捨て、隆信の尻舞をする見苦しさよ、息をもつかせず責め殺せ。」と、政光目かけて散々に矢を射かけた。そのうち羽根景兼（羽根出羽守、又は佐渡守）の放つた矢が、政光の急所にあたり、馬から仰向に落ちるところを、神代勢が折り重なつて押えつけ、その首を切った。神崎郡誌には服部常陸介が首を切り、常陸介はすぐにまた政光の家臣に討

たれたと記してある。

小田方は主人の仇敵をのがすなど、火花を散らして挑戦したが、敵味方多年顔を知りあった剛勇たちであったので、武名を恥じて互いに名乗りあって切り合い、切りつ切られつ、多くは刺しちがえて討死し、小田の陣は全滅した。戦死者のうち、かねて名を知られた歴々の士には、小田右馬之助・江口兵庫守・同善左衛門・山口河内守・同善九郎・同福童丸・栗林伊勢守・末次与七郎・同玄可・内田三左衛門・同右近太夫・犬塚弥七郎らを始め精兵六十四人が、枕を並べて討死した。神代方でも栗並伊賀守らが戦死した。隆信は終に陣を進めず、政光を見捨て殺しにしたのである。

神代方は勝に乗じて隆信の本陣へ進撃しようとしたが、東方を守る城原勢が討ち崩されて、北へ向って退却し、これを追撃する犬塚勢が、神代勢の背後を断ち切りそうに見えたので、前後に敵をうけては不利と、一先ず引きあげることにになり、殿軍を定め、これを段々に備えて後尾を固め、横大路を指して引き揚げはじめた。

これをみた佐嘉勢は、神代勢を退かせずに殲滅せよと、一斉に襲いかかった。神代の殿軍は鎗ぶすまを作ってこれを待ち受け、接近すると同時に散々に突きまくって戦い、佐嘉勢が臆して怯むすきに、颯々と繰り下って引揚げると、追ってくる敵を二段目の殿軍が鎗ぶすまで突きまくる。これを段々毎に繰りかえしながら軍勢を引きあげ、地の利と時機をみはからって総反撃にうつる構えになろうとした。隆信は目敏くその戦法を察し、長追いは不利とみて、追撃

伝えた。

勝利は暫く考えて、後々はまたその時の手段もあろう、一先ず良策と思ひこれに同意した。ここに神代・龍造寺・江上の和平成り、佐嘉と山内の間には暫く平和が続いた。

天文二十三年（一五五四）三月、隆信は東高木城を攻めた。三溝口で激戦を展開したが、このとき十六七歳の若武者が龍造寺勢から躍り出て、縦横に奮闘した。これが鍋島左衛門太夫（後の直茂）の初陣であった。高木勢も力戦したが終に敵せず、城主高木鑑房は逃がれて杵島郡佐留志城主前田家定に頼った。これをみた西高木城主高木胤秀は戦わずして隆信に降った。隆信は後に家定に命じて鑑房を殺させた。

同年十月、隆信は養父郡綾部城に入っていた少貳冬尚を討つために、軍勢を催して東表へ発進した。このとき隆信は神代勝利に使を立て、先般の和平を口実に勝利父子が出馬して協力するように、再三の申し入れがあった。しかし勝利は世上に不審のうわさが多かったので、自らは出馬せず、名代として神代家武功の臣神代備後守に馬上の士三十騎、軽卒かれこれ合せて三百余人を差し副えて出陣させた。

備後守は山内をたつて直ちに神崎櫛田宮の隆信の陣屋に入り、隆信に出合った。互にしきたりの儀礼があつて、備後守は勝利の名代であるので左の座に直り、軍の評定を行つた。

この時、備後守の軍士の中に勝利の二男兵部大輔が忍んで加わつ

を差し止めた。勝利は横大路で軍勢をまとめ、江上の陣の様子をみると、ことごとく討負けて田手の日吉城に引揚げていたので、戦いはこれまでと山内へ引揚げることにした。川久保を経て鹿路筋を帰ろうとしたが、時は十一月十日の夜、嵐がひどく霰まじりの小雨が降りしきり、月は雲間にかくれて、山中は殊に暗いと思われたので、勝利は道中困らないように川久保の住人白泉讃岐守という富貴な浪人に明松を調えるように頼んだ。浪人はかねて用意しておいた竹の明松を三百余本取り出して下人に持たせ、自らは鎧を着て先頭に立ち、道案内をしたので、その夜のうちに三瀬城に入ることができた。勝利は讃岐守の志を深く感じ、領地川久保村川原田川西分を与えた。白泉氏はこのときから神代家の臣となった。

一方、江上武種は日吉城に囲まれたが、隆信に和を乞うたので、隆信はこれを許して佐嘉に帰城した。

のちに武種は隆信に請うて、「今度の戦いに神代氏が出陣したのは、全くこの武種の所存からでたもの、このまま武種一人和平をして勝利を敵になすことは武門の恥であるので、勝利も共に合わせての和平を取り計らいたい」と申し入れた。隆信も配下の勢力はまだ弱く、諸方に敵も多いので、近隣の領主と和して威勢を張ろうと思ひ、その上勝利は勇才の将であり、而も地の利が最も勝れているので、これを討ち従えることはなかなか難しく、和平ができれば幸いであると考え、武種の申し入れを承諾し、和平のことを武種に一任した。武種は早速、隆信の使者として山内に赴き、勝利にその旨を

た。これは隆信に油断があつて討つ機会があれば、窺い寄つて一太刀に殺害する所存であつた。しかし隆信の運も強く、用心も調つていたので、ついに本意を達することができなかった。

軍議が終つて、隆信の軍勢一万余騎は東表へ進み、途中処々の敵を攻め従え、綾部城の小貳冬尚を破り、これを守護する綾部・犬塚の諸氏を降した。

戦いが終つて備後守外神代の軍卒へ出陣の謝礼をのべて山内へ帰えし、隆信は佐嘉城へ引き上げた。

その後、隆信の弟龍造寺安房守信周が未だ童形であつたが、元服の儀礼を行うというので勝利へ加冠を依頼してきた。勝利はこれを引き受け、安房守の幼名を勝利の前名と同じ新次郎と改め、引出物として大財・愛敬島のうち八十町の地を安房守に与えた。

また、その頃隆信の家臣横越中守という者が野心を企て、佐嘉で討ち洩らされて、山内にのがれ、谷田山の内高平（上小副川）という所にかくれていた。隆信は勝利へ使者をもつて、「山内に逃げた横越中守は野心重罪のものであるから、討ち果すか搦め捕つてもらいたい」と依頼してきた。勝利は承諾して神代豊前守に委細を申しふくめて彼を生捕るよう命じた。豊前守は直ちに馳向ひ、風呂谷という所で彼をみつめて戦ひ、引組んで生捕にして帰つて来たので、勝利はこれを佐嘉へ送り届けた。このとき豊前守は足に深手を負ひ、その疵がなおらず終に死去した。彼の者は川副庄野々古賀村に住む曲者であつたという。

このように和平後は、警戒し合いながらも両家は互いに儀礼を通じ合い、軍事のみならず、領内治安にも協力した。

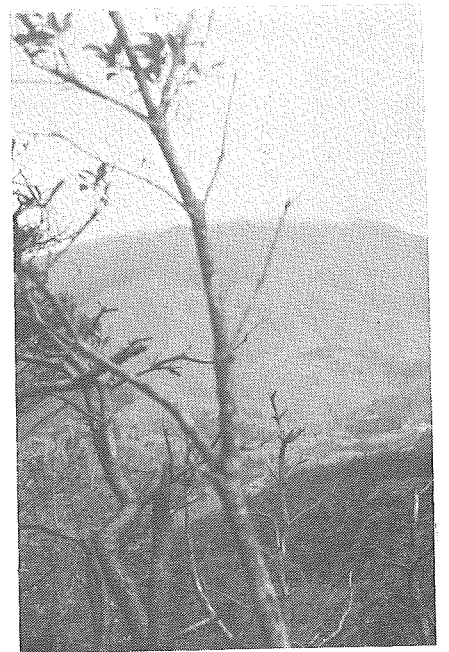
八 神代・龍造寺の和平破れる

当時、小式冬尚と弟政興はともに豊後の大友義鎮に親しみ、三根・養父・神埼の三郡を知行し、冬尚は城原に、政興は綾部に居住し、馬場・横武・宗・筑紫・江上・本告・朝日・出雲・姉川・犬塚・光増らの諸武士がこれを守護し、高来郡の有馬仙岩、小城の千葉胤頼も少武に味方し、少武と龍造寺は和せず相対していた。そうして、弘治元年（一五五五）二月饗膳の毒の一件から神代勝利と龍造寺隆信との和睦も破れた。

このような情勢の中に、弘和元年三月、隆信は城原の勢福寺城を攻略しようと企てた。時に少武冬尚は三根郡西島城にあり、勢福寺城は江上武種が守っていた。

隆信は先ず手はじめとして姉川城主姉川惟安を攻めた。惟安は四百の兵をもって防ぎ戦ったが、隆信麾下の小川信安が五百の兵を五手に分けて猛攻したので、惟安は遂に降服した。隆信は降った惟安を案内者として、勢福寺城へ向った。先手は宿将小川信安・納富信景・福地重信らの軍勢であった。

このとき、神代勝利は江上武種を助けるため、北方の猿ヶ岳（土



三瀬城地より筑前
連峰の遠望

器山）に陣したというが『神代家伝記』には勝利の行動を記していない。

隆信は小川信安・鍋島左近將監・福地重信ら九千八百余の兵で勢福寺城を包囲せしめるとともに、一部は猿ヶ岳にも備えを配した。

城兵は各持口を必死に守り、隆信の弟長信の軍へ出撃したが撃退された。

一方、福地信重が南門大手口に押し寄せて、ここに七百の手勢を置き、自からは鋭兵を率いて東へ回り、水路から攻め入って城中に火を放ったので、武種は遂に防ぎきれず、妻子とともに城を抜け出し、東北の仁比山城へ逃がれた。

猿ヶ岳に陣した勝利も戦わずして引きあげたので、隆信の軍勢は勝鬨をあげて佐嘉に凱旋した。

同年十月隆信は大軍をもって、川上口より三反田に押し寄せ小副

川の谷田城を攻めた。山内の諸城から救援の兵を呼ぶ間もなかった。

しかし勝利は大敵にも屈せず、わずかな兵を二手に分け、一軍は折敷野に向かわせ、自からは難処を前に防戦した。その間に龍造寺軍の一部は東方の松瀬から仏坂を通って環尾に回り、峰伝いに谷田城の後の山に登って、城中を眼下に見おろし、寄せ手の合図を待って一気に城を攻め落そうとしたのである。

谷田の城は峨々たる山岳と川上川の主流に囲まれて、要害堅固の城であったが、城兵は松瀬・梅野・小副川の援軍を含めても小勢であった。

戦いはこれまでと察した勝利は、一時佐嘉勢の鋭鋒を避けて、捲土重来の機を待つことにし、妻子を伴って密かに城を抜け出し、山越をして筑前怡土郡高祖の城主原田入道了栄を頼った。了栄は諸して勝利らを同郡長野に置いた。

隆信は年来の宿敵を打ち洩らしたことを不本意に思ったが、初めて山内を平定した心地になり、諸所に城番を据え置いて佐嘉へ帰城した。

勝利は長野へ蟄居中、もし佐嘉勢が長野へ攻めてくれば、山内旧好の士と心を通じて、背後からこれを討つ計画をたてていた。

この長野蟄居の間に、嫡男長良が鉄砲を持って庭前の山に入り、子供を孕んだ猿を打った。その後この猿の怨念が残り留まったのか、夢に見、あるいは現に目の前に来て啼き悲しんで障害になることが度々重なったので、その靈魂を宥めるため、杠山野波大明神・藤原

山八龍宮の側、中鶴山王権現・名尾山大明神・その外の山々に、祠を建てて祀り、山王権現または猿大明神と崇めた。その後は猿の靈魂もしまつて悪執をやめ、却って守護神に変じたと伝えられている。

後年、芦刈天満宮の西、権現の東に当る処に一字の社を建立し、のちに改めて川久保先立山の麓の腹田野（うはたの）と言う処に社を建て、八木（木の異名・八と木を合せると木の字になる）を寄進し、毎年祭典を行った。

また、勝利はかねて神仏を深く尊崇したが、武運長久、家門繁栄の祈願として、天朝六十余州の大社に対し、六十六部の法華経妙典を奉納するために、伯耆坊・越後坊・設雷坊に命じて真読具経（省略しないで経をあげる）として書写させたが、思いもかけず長野に蟄居する身となり、奉納の運びに至らなかったため、密かに小城山の内上無津呂山の山神という処や、神代領内各山の処々に、その経文を納め、三人の山伏に命じて塚を築き石碑を建てさせた。この経塚は今も山内各処にあるといわれるが、何の経塚がそれに当たるか確証はない。

神代勝利が筑前長野に蟄居してから、山内には佐嘉から代官を配置し、住民を懐柔しようとしていたので、通路も自由にならず、勝利は容易に戻る事ができなかった。

弘治三年正月元旦、敵の不意をつき熊の川代官館へ攻め入り、代官以下一人残らず討ち捕ってここを占領した。

前夜来の大雪と山越えのため、勝利をはじめ人馬ともに凍え、疲れ果てているところに、この一戦を伝え聞いた川上与止日女神社の社頭小野式部は近隣のものたちの協力を得て粥を煮立てて桶・樽その他ありあわせの器に入れて運びこみ、旧領主の帰還を奉賀した。勝利以下悦んでこれを食べ、大いに勇気を得て、山内に配置した佐嘉の代官らをとことく討ち平らげた。山内の将士も次々に馳せ集まり、三千余騎の軍勢となった。

この時、元旦の歳の餅も間に合わなかったので、大釜に小豆ごと煮こんで搗きたて、早掬えの餅を用いて歳の餅とした。こうして作った餅のことを、山内では「なべほぐり餅」または「隣知らず」あるいは「たどし」などと呼んだ。

これ以後、神代家では粥となべほぐり餅を正月の歳とり用いることを恒例とした。神代家の領民は、近世にいたるまで吉例としてこれに倣ったという。

また、小野式部はこの時の功によつて毎年米十二石をいただいた。こうして、勝利父子は旧領をとりもどし、再び三瀬城に入つて山内を統治するようになった。

九 八戸宗暘・神代勝利を頼る

八戸氏は、高木宗貞の庶子宗益から代々国府執行職の家柄で、佐嘉郡於保村を知行していたが、数代後の胤宗は、龍造寺家兼(剛忠)

の婿となり、宗暘はその子であつて、八戸・新庄・於保・益田・木角・蠣久・成道寺など佐嘉郡の中部を領していた。

このように龍造寺氏と八戸氏は縁続きであるが、宗暘に至つて龍造寺隆信の妹を妻室に迎え、天文二十二年以来両氏の和睦が続いていた。ところが、弘治年間に入つてから八戸宗暘は交友と通じ、神代勝利と親しくして、隆信に異心をいだき、交戦の気構えがあるという風評が立ち、鍋島信昌の家臣や、佐嘉郡新庄の伊東兵部から密書が届いたので、弘治三年正月、隆信は弟信周・一族の家就・納富信景・福地信重・石井忠房らに命じて、四千七百余の兵をもつて八戸城を攻めさせた。

八戸城では不意を突かれて大騒ぎとなり、防戦体勢をととのえているとき、城の風上に回つた鍋島信昌が、風上の陣屋を破壊し、火をつけて焼きたたてたので、火勢はあがり城の森へ向かつて猛烈に吹きつけた。これをみた城内勢は狼狽して、交戦どころではなかった。この隙に城壁を破つて侵入した龍造寺勢のために、城内勢は縦横に討ちまくられ、城主宗暘はようやく城を逃がれ、春日山城と丸山砦の中間に籠つた。

宗暘から援軍を頼まれた神代勝利は、駄市川原(尼寺の西)に出陣し、杠主水を差し向けて龍造寺軍の東南へ夜襲をかけさせたが、家就のために撃退された。

隆信は長瀬に本陣をおき、その北の五領北村にわたつて陣し、小川信安・納富左馬之助以下に命じて駄市川原の神代勢を攻撃させた。

神代勢は足輕を出して応戦したが、龍造寺軍は春日山に陣を進め、山麓の高城寺を焼き払った。

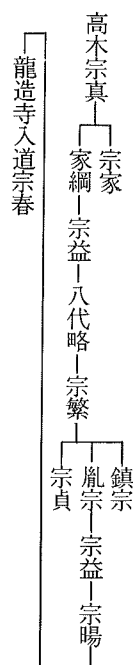
この情勢をみた勝利は勝算なしと見てとり、夜陰に乗じて山内に引き退いた。

八戸城陥落のとき、宗暘の妻室(隆信の妹)は、三人の子どもとともに捕虜となり、佐嘉城へ連行された。隆信は捕虜のうち男子は怨敵宗暘の子であるから、殺すように命じたが、母慶間夫人が孫を不憫に思つて命乞いしたので、隆信もついにこれを許した。男子はのちの入道宗春で、女子二人はのちにそれぞれ鴨打胤泰・犬塚直盛の妻室となった。

宗暘は密かに山内に入り勝利を頼つて来たので、勝利はこれを憐れみ、領内杠山に館を設けて居住させ、これを扶助した。

宗暘はこの後、今山の合戦に従軍して敗れ、主従わずかに五・六騎になつて山内さして落ちのびるところを、鍋島直茂の家中川原忠左衛門に切りつけられ、痛手をうけて辛くも杠山の館にたどりついたが、その時の疵がもとで落命した。杠山伽葉山清流寺の大供和尚の引導によつて、杠山宗の辻(宗峠)に葬した。法名心翁宗安と号す。宗暘は生前大供和尚に帰依して参禅し、懇意にしていたという。

八戸氏略系



一〇 勝利春日山城を攻略す

さきに勝利が谷田城が落ちて筑前長野に蟄居している間に、佐嘉からは山内各所に代官を置き、その上、春日山には城郭を構築し、小川筑後守・同弟左近太輔に鋭兵を差しそえて、山内の押さえにしていた。

勝利が再起して山内に復帰するとき、それらの代官をつぎつぎに攻め落したので、その威勢に恐れて戦わずして逃げるものが多かったが、筑後守兄弟は少しも恐れず、堀を深め、石塁を高くして、ますます用心堅固な城とした。これを聞いた勝利は、我が領内にいる敵をそのままにはおけないと、弘治三年九月、その辺の地形に詳しい梅野一族を先鋒にして山内の諸勢を率い、春日山城に攻め寄せた。

この戦いで梅野帯刀(梅野兵部太輔の嫡男)は、不運にも小砂混じりの崖道を踏み崩して倒れ落ちたところを、二人の敵兵のために討ち取られた。ここを今でも「帯刀転び」と呼んでいる。

この様をみた帯刀一族は、憤然として奮いたち、ここを破らなければ再び生きては帰らぬ覚悟で、岩壁をもとめせず、いどみかかつて戦つたので、城方の兵は浮足立ってきた。そこへ第二陣の松瀬一族が攻めかかり、両軍一体となつて攻撃したので、城方の兵は遂に防ぎきれず城内さして退却した。

神代軍の総勢は勝に乗じて三方から春日山城へ攻め寄せた。小川左近太輔以下大半の城兵が討ち死し、討ち洩らされた将兵はみな佐嘉をさして落ちのびた。

戦い終って神代勝利は、城の西北方にあたる平らな場所に幕を張り、兵糧を配って士卒の労を休めた。それ以来、この場所を「布張平」と呼ぶようになった。また、この戦場の跡に「駒隠れ石」「足型の石」と呼ばれる岩石が今でも残っている。

「駒隠れ石」というのは、この戦いとき、春日山城の若武者が馬とともに大石のかげに隠れていたが、敵軍の馬の嘶きに誘われて、若武者の馬も啼いたために発見されてしまい、とりかこまれて討ち取られたというので、この名がつけられたという。『西肥古蹟詠』に次の歌がみえる。

むら雲の消えし嵐の趾とえば

苔むす石に名をのこしけり。

一一 金鋪峠の合戦

春日山城を攻め落されたうえ、弟左近太輔まで討ち取られた小川筑後守信安（以下信安）は、主君隆信に対して神代退治をするようにしきりに勧めた。

隆信も元来祖父家純・父周家ほか一族の多くを勝利のために討た

のために設置したもので、高野岳権現山という一際高い山の頂上に大鐘をつるして置き、非常のときはこの大鐘を鳴らした。この鐘の音が聞こえない山々には、次々にホラ貝や太鼓など鳴り物の合図を定め、夜は同時に火を焚いて、確実に山内全体に急報することができるように手配していた。また、神代家出陣の陣太鼓は一本撥の太鼓と定められ、この太鼓が鳴ると必ず合戦が始まった。夜半の寢覚めに、部落の六地藏や藪神の鎮座する処などで、この太鼓の音が聞こえた日には必ず戦いが始まったという伝えられている。

勝利は集まった面々に対し、下知して進軍の隊伍を定め、総勢三千余騎を二手に分けて押し出した。

まず、長良の軍は東に回って名尾すじに向うように命じ、長良に對して「今度の戦いは我が率いる一陣で勝つ所存である。長良は備えを動かさずに待機し、勝利の本陣が崩れない間は決して敵と手合わせをしてはならない。佐嘉勢が敗北すればますます備えを固くして、敵が反撃してくるのを待つようにせよ、もしまた吾が陣が崩れたら、そのときこそ軍勢を急に進めて隆信の本陣を横合から攻めるか、後詰めを切り取るか、そのときの変化に応じて対策をたてよ」といい含めた。

長良の軍に属する諸士は、福島周防守・同嫡男伊賀守・神代備後守・同弟兵衛尉・同内蔵助・同兵庫守・同大隅守・松瀬又三郎宗茂・同嫡男能登守利宗・栗並伊賀守・小副川与七郎・合瀬因幡守・名尾式部少輔・久保縫殿助・馬場四郎左衛門・白水讃岐守・執行内蔵



合戦使用のホラ貝

れて、累年の仇敵と思っていた。隆信は神代退治を決意し、そのためには小勢ではむづかしいと、幕下の諸将・一族郎党

残りなく召集し、大軍をひきいて、弘治三年（二五五七）十月十四日、佐嘉城を発して、段々に手分けをし、北の山際まで本陣を進めた。先陣は信安のたつての望みもあり、また彼は山の案内にも詳しくあったので、信安の軍勢を先鋒に北に向った。

信安は北の山際に着くと、先ず山内の梅野弾正を説き従えて味方に引き入れ、これを道案内にたてて山内に兵を進め、夕方になって金鋪峠に到着した。この峠は金鋪山の東にあたり、春日から北の名尾に通ずる山路にあり、今では名尾峠と呼んでいる。

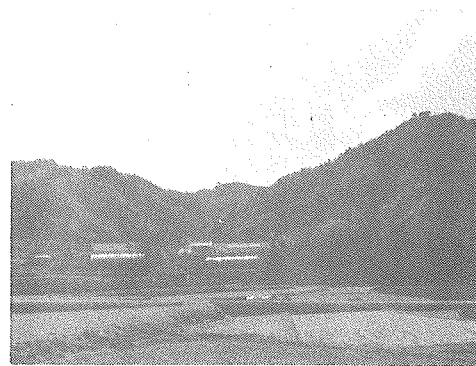
信安はさらに山内に進撃しようとしたが、すでに日没になり、案内も知らずにこれ以上進むのは危険であるから、明日出直すのが賢明であるという従者の諫めで、それ以上侵入するのを断念した。

一方、神代勝利は、佐嘉に出している間者からの通報でいち早くこの事を知り、関屋山高野岳に据えて置いた合図の大鐘をつかせて、山内の軍勢を集めた。

この大鐘は、勝利が長野から帰城して後、味方に急を告げるとき

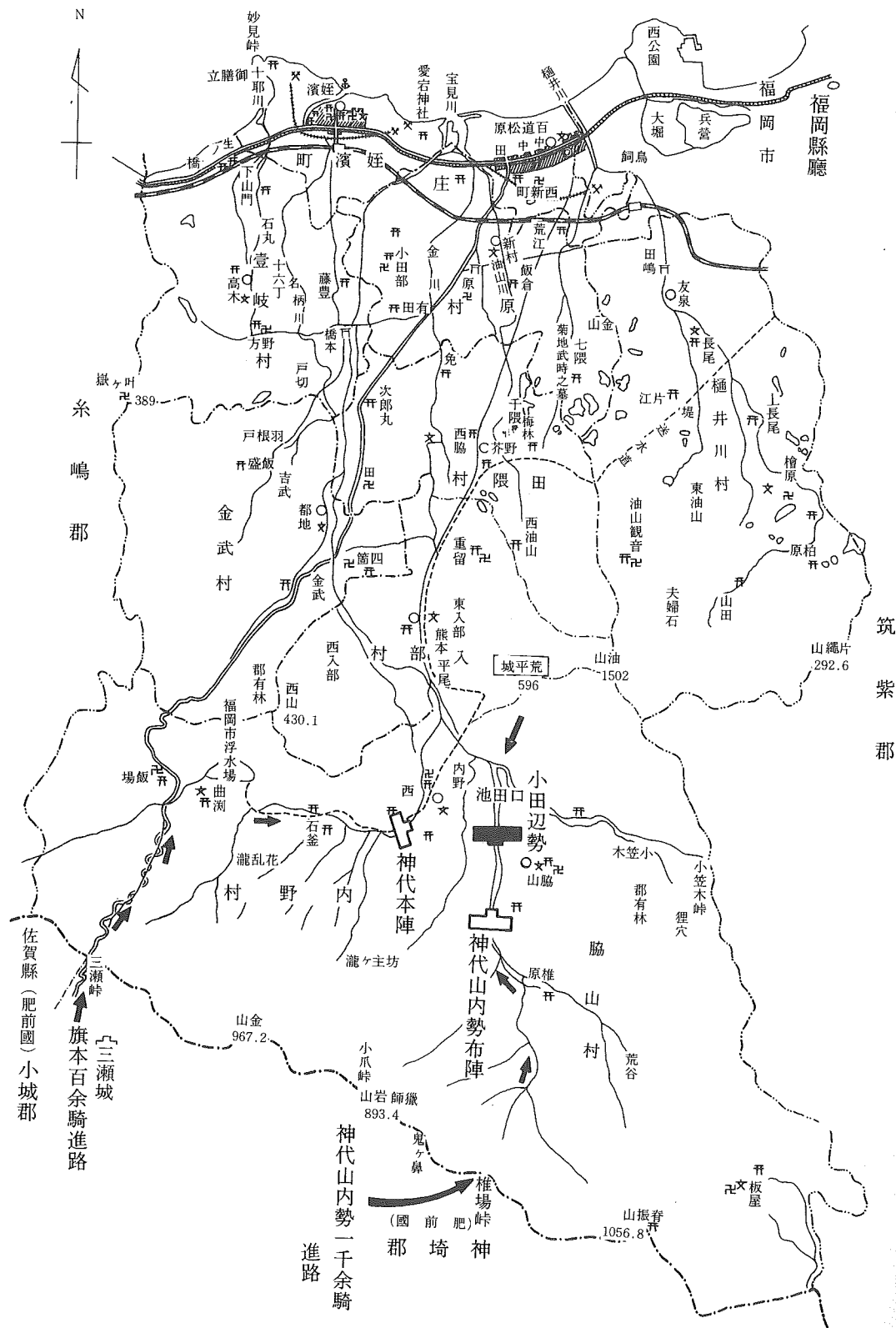
助・小田入道信周・恒松入道道覚・同嫡子式部少輔・鳴田入道郭清・山伏當持坊・その外古場・藤ノ瀬・一番ヶ瀬・大野・杉山・関屋・吉浦・芹田・鹿路・甲斐・田中・小久井・小井手・横尾以下従う兵士千三百余騎であった。

勝利自らは三反田すじに向かい、この陣列に従う諸士は、福島弾正・同弟式部少輔・神代中務・神代左馬介・三瀬内蔵助武家・同弟長右衛門安家・杠紀伊守盛満・菅浦入道飯雲・畑瀬越前守・千布因幡守・神代外記・神代源内・国部和泉守・藤原但馬守・江原石見守・中野備後守・中野隼人佐・梅野源太左衛門・同嫡子兵部少輔・秀島伊賀守・古川佐渡守・同嫡子新四郎・福所備後守・同嫡子大蔵・中村彦岐守・陣内宮内少輔・福所但馬守・溝田蔵人・同嫡子新八・溝田内蔵之允・同与惣右エ門・境与一右衛門・賀村讃岐守・佐保藤



金鋪峠の遠眺

左衛門宗氏・同嫡子左馬介宗清・西原土佐守・井上源十郎・境孫十郎・陣内九郎左衛門・藤瀬藤左衛門・広瀧新三郎・千住出雲守・中原刑部少輔・その外、井手・城島・広瀬・鳥飼・真島・平野・満岡・八坂・栗飯・原・友貞らを始めとして精兵合わせて一千七百余騎であった。勝利の軍は



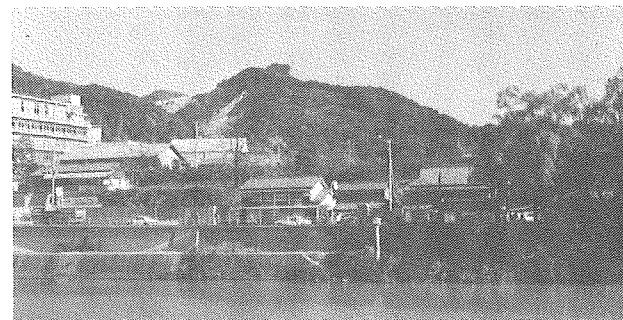
大野原を通って熊野嶽という処に陣を進めた。

この戦いで勝利自ら敵将小川筑後の首級を挙げたので佐嘉勢もこの勢いに吞まれ、総崩れとなつて敗北した。

この戦いで佐嘉勢の龍造寺右馬大輔・小川豊前守・石井尾張守・副島左馬允・大塚七左衛門・永田右馬之助・中願寺新左衛門・江副新八・土橋孫七・久保九郎兵衛・大石四郎兵衛を始め、精兵枕を並べて討死し、残りの士卒はことごとく南の谷底に追い落され、流血は谷川を紅に染めて流れ、屍は累々と谷を埋めた。この谷を今でも「ツプロ谷」といい伝えている。神代軍でも近藤新右衛門以下軽卒少々が討死した。

隆信は梅野山広坂の下方、龍の瀬あたりまで本陣を進めていたが、納富但馬守らが退陣するよう頻りに諫めたので、隆信もこれに同意し、茂みの中に旗を立て残したまま、川上の下、惣座の辺から西に向い、小城道を通って南に退却した。

勝利は金鋪峠で筑後守と鎗合せしたとき、肘を突かれて負傷していたが、その底を深く隠していたので、誰も知らなかった。この事



春日山城跡を望む

が諸人に洩れると味方の弱味となると思つてのことだった。その後、勝利は強兵をすくって、自らこれを引き連れ、新しく掌領した村里を巡視して、神野の下草場の北横道に「従是北東西通神代領地也」と書いた境界の大札を立てさせて山内に帰った。

勝利はまた小城郡熊の川西北の山上に、地の利を見たてて出城を築き、山内咽喉部のおさえとした。この城は北が川上川に臨み、敵襲に対する備えとして峰や谷が利用され、草場佩川の詩に「巖に到りて樵逕絶え、水を背にして戦場多し」とあるように、要害堅固の城地であつた。

一二 勝利筑前国小田辺紹連を破る

勝利が金鋪峠の合戦で大勝利を得て、山付きの村里を残らず掌領してから、その威勢は日を追って盛んになり、近境近里「ことごとくその威に服した。そうして、佐嘉への備えとして要害堅固な熊の川城ができあがり、領内外の情勢も一応安定したので、佐嘉へ向つての出馬を暫くの間と止めることにし、背後の筑前へ向つて諸処を征服して領土を広めようと考えた。その頃、筑前国荒平の城主小田辺紹連（宗連）の所領の者どもが、徒党を組んで神代領内に侵入し、強盗狼藉を働くとの通報が、藤原山の代官からあつたので、まさに筑前攻めの時節到来と悦び、紹連追討の合図を發して、その場に居合わせた鋭兵を引連れ、小田辺に向つて出發した。

急報を聞いて馳せ参じた三瀬・藤原・久保山・薙野・一万ヶ瀬・腹巻の一族をはじめ、山伏の大弓坊・円乗坊という二人の荒僧らを先鋒として、藤原山と久保山の境界椎葉峠から押し出して池田口に備えを立てさせ、勝利自らは福島伊賀守・神代源内ほか江原・中野・秀島・大島・城島以下の剛兵をえりぬき、わざと少ない百余騎を引きつれ、三瀬口から出て石釜を通り、その下の大野という処に密かに本陣をおいた。

小田辺紹連は神代勢が攻めてくることを聞き、そのまえにこちらから逆襲して神代を討つべしと、近くの軍兵三千余騎を駆け集めて池田口へ進み出で、ここに控える三瀬・藤原・薙野ら一千余騎の神代勢を、勝利の本陣と思いこみ、紹連自ら先頭に立って押寄せた。両軍入り乱れて挑み戦い、激戦既に半時に及ぶ頃、勝利は頃合いとみて静かに本陣を進め、小田辺勢の後方横合いから、ときの声をあげて散々に攻めたてた。

小田辺勢は思わぬ方からの激しい攻撃に驚いて、戦意をくじかれ、備を崩して後退した。これを見た勝利は、旗本の守りを固めて前進し、さきがけの一手両山伏ほかの諸兵に命じて追い討ちをかけさせた。これらの諸兵は勝に乗じて突進し、小田辺勢の退路をおさえ、あるいは難所にこれを追い詰めたので、城に逃げ入ることもできず、博多・福岡へ向って逃げ散った。紹連は誓紙をさし出して頻りに和を乞い、本領安堵を願うたので、勝利はこれを宥した。

この勢いに恐れた原田・典淵・大津留の諸氏も和睦を申し出た。近

境でもあり、和睦すれば強い誅伐を急ぐ必要もないと考えた勝利は、筑前退治を延ばし、これらの諸氏とも和を結んで、熊の川城へ引き揚げた。

一三 勝利川上合戦に敗れる

勝利は小田辺を降服させ、原田・曲淵・大津留ら筑前側の諸將と和睦が成ったので、いよいよ龍造寺隆信を滅ぼして肥前の国を掌中に収めようと考え、その作戦を練っていた。

龍造寺方では神代勝利のこの企てを密かに聞いて不安この上なく、むしろ堂々と決戦するに如かずと、永祿四年（一五六二）九月初め、山内へ使者を遣り「神代・龍造寺相争つて年を重ねてきた。我々は今諸將を従えて近国に威を振っているが、勝利・隆信の力は互角で、いまなお勝負がつかない。だから運を天命に任せ、合戦して家の安否を定める所存であるが、貴殿の返答を聞きたい」と隆信の意志を伝えた。

勝利は使者にむかって「我れもかねて望むところである。合戦のときには山と里との境の川上辺に向いて見参しよう」といい、合戦の期日を九月十三日と定めて使者を帰した。

こうして約束の期日もせまると、勝利は山内の諸勢を熊の川城に集めた。

新参古参の士、合せて七千余騎であった。

勝利父子は老臣を集めて軍議を開いたが、家臣の意見は、今度の合戦には龍造寺一家では一族残らず旗本の諸將諸勢を駆け集め、大軍を擁して多年の鬱憤をこの一戦に晴らすと考え、評議を尽して、山内の難所を避け、山下の平場に引寄せて戦う企てがあると聞く。味方が如何に強兵であっても、平場に大軍を引きうけて戦っては、必ず勝つとはいえない。以前の金鋪峠の合戦のように佐嘉勢を山内の難所におびき入れ、地の利に乗じて攻め討てば、隆信をいけどりにして勝つことができよう。というのが多かった。

この一戦さえ討ち勝てば、日ならずして肥前一国を平定して我が掌中に収めることができる。もしまた不運にして仕損じたら、その時こそ、山内の難所に拠って敵を討とう。

嫡子刑部大輔長良を一方の大將と定め、福島周防守父子・神代備後守兄弟・江原石見守・中島・梅野・小副川・国分・吉浦・一番ヶ瀬・千布・因幡守以下三千余騎がこれに従い、大手は河上淀姫大明神の前方宮原口に陣を張らせた。

二男兵部大輔種良は、松瀬能登守・扛紀伊守父子一族・合瀬・腹巻・名尾・薙野・中野・芹田・市ノ瀬・馬場四郎左衛門以下一千三百余騎の兵を従え、宮の前大門の南に備えを立て、三男清次郎周利は、八戸下野守宗陽・西川伊豫守・古場・杉山・大野・鹿路の外、近日幕下に属した諸士の集まりを合せて一千五百余騎を従えて、川上川より東の都人來（都渡城）原に陣を備えた。

大將勝利は、三瀬・栗並・島田・嘉村・白水・福所・小田・垣松・菖蒲・畑瀬・藤原らを始め、残りの勢一千二百余騎を率いて、大明神の西惣門（仁王門）に本陣をおいた。

一方、隆信は九月十三日朝八時頃、大軍を率いて本陣を西山田においた。弟龍造寺和泉守長信もこれに従い、広橋一遊軒を先陣として、二陣に福地長門守を始めとして段々に備えを立てて神代長良の陣に迫って来た。

この様子を見た長良は、佐嘉勢が一町ばかり近づく頃を見計らって兵を起し、弓鉄砲を射かけた。佐嘉勢もこれに応戦し、互いに足並静かに相かかりに懸つて弓鉄砲を放ち合つて戦闘を開始したが、このとき神代軍の中から神代兵衛ノ尉・江原石見守の二人が陣頭に進み出で、一番鎗を振るって佐嘉勢の中に攻め入った。その外の兵どもも遅れじとこれに続き、わめき叫んで切り込んだので、敵の先陣廣橋一遊軒の軍勢は散々に討ち負け、南をさして引き退いた。神代勢はこれに力を得て競い立ち、ホラ貝・太鼓を打ち鳴らし、かけ声かけて攻めかかった。これを見た佐嘉勢の第二陣、福地長門守入道信重が入れ替って応戦した。しかし神代勢はこととせず、なおも競いかつて攻めたので、この陣もまた乱れて浮き足だつてきたが、佐嘉勢は大軍であったので、段々に備えを進めて攻め寄せた。

とくにこの合戦は山内と佐嘉とが互いに存亡をかけた大決戦であったのでどちらも負けられず、千騎が一騎になるまでも何時果てるともない大乱戦となった。このとき神代長良が采配を振りあげて、

佐嘉勢の備えはしどろになったぞと、大音声に下知すると、神代勢は勇み立って攻め進んだので、佐嘉勢は乱れだし、いよいよ神代軍の勝ち軍と見えた。

一方、宮の前の兵部大輔種良の陣へは、龍造寺の先鋒納富但馬守信景が近づくと同時に軍が始まって、両軍互いに入り乱れて死力を尽くして戦っていた。

このような状況のなかに思わぬ事が起った。川の東都人來（都渡城）原に備える神代清二郎周利の陣へ向った佐嘉勢が、まっしぐらに攻めかかって来たので周利の軍勢もこれを迎え討とうとしているとき、陣中に野心を抱く謀叛人がいて、佐嘉勢に呼応するように大將清二郎周利を不意に襲って突き殺した。突然の出来事に陣中が乱れ騒いでいるところへ佐嘉勢が切り込んだので、神代勢は氣をとりなおして必死に防ぎ戦ったが、大將を失った上、この手は諸方から集まった新参兵が多かったので、互いに警戒して心が一致せず、力戦したけれどもついに敗れ、広瀬参河守・古場常陸守・杉山次郎右衛門以下大半の士卒が討死し、西川伊豫守は深傷を負い、八戸下野守宗陽も負傷して山内へ引き退いた。このとき西川伊豫守は深庇のため身体も自由にならず、家人に荷なわれて名尾まで逃げのび、漸く鳥羽院の城に帰りついた。この時の家人に謝礼として西川の名字を許したという。

勝に乗った佐嘉勢の、龍造寺長信・同鑑兼・小川大炊助以下の面々は、大川を駆け渡って、納富信景の攻め口南大門に押し寄せ、兵

部大輔種良の陣に横合から攻めかかった。

神代軍はわき目もふらず突き進んで奮戦したが、ついに討ち負けた。この手の大將兵部大輔は、宮の前御手洗橋の近くで討死し、続く松瀬能登守・馬場四郎左衛門・神代小六らを始めとして多くの兵卒が一所に討死した。それ以後この橋を「乱れ橋」といい伝えている。

本陣の大將勝利はこの様を見て、今は何も期待することはない。我が陣を進めて討死し、長良を助けようと、旗本を崩して佐嘉勢に攻め掛った。長良の勢はこれに力を得て旗色を盛にかえし、隆信の旗本をめぐって無二無三に切っかかりかかった。

しかし戦いに疲れた山内勢は前後に敵を受けて防ぎかね、もはやこの一戦に勝つことは難しいと見えたので、長良に従属する功臣たちが、勝利を諫めて、先ず後の敵を追い散らし、はやくはやく引きあげられたい。と申し出たので、勝利もこれに同意し、山内に向って引きあげた。

隆信は、今度の合戦で大勝利を得て年来の本懐を達し、川上の下於保原に諸軍を集め、首実検をした。

隆信はそのあと生捕りを誅し、首塚を築かせて、堂々と佐嘉城へ帰陣した。

山内へ退いた勝利は、討ち残された群臣を集めて今後のことを計った。

いまずぐ敗軍の山内諸勢を擁して、十死に一生の一戦を試みるか、あるいはまた、以前のように一先ず山内をあけて時機を待って再起

をはかるか、様々の談議をしたが、一同の意見は「今度の合戦で総敗軍の結果、精銳の味方も若干討死あるいは負傷し、気落ちした敗軍を集めても勝ちめはなからう。しばらく山内をあけた後、重ねて計策したがよい」ということに意見が一致した。

何処に落ちるかを吟味したところ、杉山の住人小副川四郎五郎の所縁の者が大村の波佐美と川谷にいるというので、勝利一族はそどちらかに落ちつくことになった。勝利は四郎五郎の案内で、一先ず西肥前松浦郡の草野という処まで行き、追手の心配もなくなり、妻子ならびに三族近臣とともに、ようやく波佐美に落ち着いた。

一四 勝利再び山内に帰る

神代勝利が波佐美に蟄居したことを知った島原半島の日江原の城主有馬仙岩や杵島郡塚崎武雄の城主後藤貴明らは、大村純忠に使者を送って神代勝利のことを依頼したので、純忠は快く承諾し、朝長伯耆守を勝利の守護につけて丁寧に世話をした。また、勝利を慰めなうえ、武運のまもりとして左文字の太刀に祐乗の目貫をそえて勝利に進じた。

勝利が退去してから、山内の土地はことごとく隆信に押領されたので、神代家の士卒は、さしせまった危難にあうことを覚悟していた。

ところが、隆信もまだ諸方に敵をもっていたため、險阻な場所での自由を心得た山内武士が、自分から降服してくるのを待って味方につけ、所々の難所の戦いに役立てる方が得策と考えて、しばらくの間誅伐の沙汰をさしおき、折をみて降服してくるようになさった。しかし、神代勝利の仁徳を慕う山内武士は、小利にまよわず君臣の大義を守って、ついに隆信に降ろうとしなかった。

こうして浪人となった山内武士は、ひたすらに勝利の帰城を願ひ、旧好の浪士たちは、密かに語らってその方策を練っていた。機熟して永禄四年十二月中旬、浪人中村壱岐守父子は、山内麻那古の代官龍造寺の臣田中兵庫助を夜襲して討取り、家に火をかけ、驚き騒ぐ家人を突き伏せ追い散らして、日頃いい合わせた山内浪士たちへこのことを急報した。

山内浪士たちは時を得たりと悦び、谷々峯々から蜂のように起ちあがった。これを手初めとして佐嘉神崎の山々にも牒合するとともに、波佐美へ注進した。

勝利父子はこの報を聞いて喜び、その儀ならば片時も遅れてならないと、その場に居合わせた人々を引き連れて出発し、先ず小城山に来て中村父子を招き、その功を感謝した。中でも壱岐守の子、中村外記は若年でありながら勇剛の働きをしたので、深くこれを称美し、以前にも倍した領地を与えた。

勝利山内に帰るの報に、旧臣幕下の諸士はいうにおよばず、恩を荷い徳を戴く者たちが方々から駆け集まり、佐嘉から配置した諸所

の代官や城代をことごとく切り殺しあるいは攻落して、領内はもとどおり神代勝利の治下に復した。そうして百姓遊民にいたるまで勝利の還住を悦び、親しみ慕ったという。

一五 鳥羽院城主西川伊豫守を討つ

神代勝利が山内の諸郷士に迎えられて帰還し、再び山内を治下におさめ、領民すべてこれを悦ぶとの知らせを聞いた龍造寺隆信は、既に勝利を二度まで追い出したにもかかわらず、百姓にいたるまで勝利に馴染み深く、このように佐嘉にそむくのは何故か理解し難い。この上は神代家に謀叛をいざく人物を誘い求めて味方につけ、勝利父子を討取って重なるうらみを晴らそうと、老臣を集めて密かに謀議を凝らした。

密議の結果、目をつけたのが鳥羽院城主西川伊豫守であった。

西川伊豫守は弁舌人にすぐれ、自己の知勇を自慢してたかぶり、欲深者であるので都合がよい。この者を利用しようということになり、ひそかに使者をやって色々にだまして誘惑し、もし勝利父子を討取ってくれたら、貴殿を山内の棟梁となし、神代の領地一円をあてがうであろう。と勧め励ました。

伊豫守は元来高慢で欲深かったので、すぐさま応諾して誓約を堅めた。

を見かけた。丁度その頃は八月（旧暦）の彼岸で、長門守は立願成就の祭祀のために、三瀬山の宗廟杉大明神に参拝していたのである。又兵衛は早速、父長門守に対面し、伊豫守の企てを耳打ちして語った。長門守は非常に驚き、父子打ち連れて登城し、勝利公へ右の次第を委細に言上した。

勝利はこれを聞いて、われ山内の主となる始めから、三瀬一族の忠節は他に比類のないところ、いままたこの大事を知らせてくれたことは、返す返すも神妙であると感謝し、この上は伊豫守誅伐について詮議しなければならぬまいと、居合わせた近臣老士を召し集め、密かにそれぞれの意見を問うた。

このとき又兵衛が進み出て、伊豫守討手のことは、私に仰せつけられるよう。その訳は先程黒石原で既に討ち果たすべきを、一先ず御両公に告げおかねば、伊豫が討たれたと聞く一味のものは、もはや陰謀が露顕したものと思い、どのような暴挙を仕出かすかも知れないと、その場を一先ず偽って一味し、急いで言上した次第なれば、それがしが出向いて難なく彼を討ち取ることは我が掌のうちにあります。と申し出たが、勝利はその方の申すように、彼を油断させて討つためにはその方が有利ではあるが、何といってもこれは山内の騒動であって、佐嘉から仕かけた謀略の一つである。何事もなかったようにだまし寄せて、わけなく討ち捕るにこしたことはない。幸い近いうちに重陽の宴があるので、伊豫が参向した折を見計らって討つべきである。又兵衛もその座に出席せよ。討手はその時のなりゆき

それ以後伊豫守は、昼夜勝利父子殺害の計略を練りめぐらした。その頃、三瀬・松瀬・杠の三氏は、血縁の親族がことに多く、山内でも勢力があったので、このものたちと密かに語り合って本意をとげようと考え、内々その時機をうかがっていた。

永禄五年（一五六二）八月下旬、伊豫守は三瀬城に登城して帰る途中、腹巻と薙野の境黒石原（頭野峠）という処で、三瀬長門守安家の嫡男三瀬又兵衛に行き合い、しばらく世間話などをしていたが、時分はよしと思ひ陰謀のことを密かに語り、この上は是非とも一味に加わって欲しい。本望成就のときは、隆信公から約束のあった山内を半分宛分け取りしようと、弁舌にまかせて語り誘った。

これを聞いた又兵衛は、内心おそれるべき企てだと思ったが、この場でことわれば、すぐさま刺し違える顔色に見えたので、もしそうなれば伊豫守の残党が、直に勝利公の御座所に向けこみ、どのような不意打ちをしかけるかも知れない。ここでは一先ず偽って味方し、このことを勝利公父子に密かに知らせ、そのあとで、この伊豫守を討ち果たそうと考え、われも勝利に恨みがある。充分に申し合せて人に洩れないようにしよう。と打ちとけ顔に答えた。

伊豫守は大いに悦んで、道のほとりの石に腰をおろし、竹筒を取り出して互いに血をしぼり、誓約の盃をとりかわして東西にわかれた。（現在もその証の石あり）

又兵衛は一刻も早く三瀬城に参向して、このことを勝利公に告げようと、大急ぎで帰る途中、杉大明神に父長門守が参拝しているの

にまかせる。と言って又兵衛をなだめた。

やがて九月九日重陽の節句の宴が開かれる日になった。伊豫守の陰謀を知っている者は言うにおよばず、例年参向する山内の諸士が、参賀のために続々と登上し、伊豫守も同じく登城した。一同参賀の式礼を終えた後、いよいよ酒宴が始められた。

又兵衛は伊豫守を人手にはかけまいと思っていたので、いつ討とうかと時分を見計らってまよっているところに、酒宴の御酌に出ていた中野新十郎（後の備後守）という気の早い若者が、伊豫守の前に銚子を持って行くと同時に、伊豫守の顔をめがけて銚子を投げつけた。又兵衛はおくれてならじと真つ先に伊豫守に切りかかり、他の面々も一斉に切りかかったので、伊豫守は寸々になって死んだ。

この時、逆臣を討ち取った賞として、三瀬又兵衛に伊豫守の館を、中野新十郎に伊豫守の財宝を、それぞれ下賜された。

伊豫守の墓は土師村にあり、世人は伊豫殿墓といひ伝えている。

その後、伊豫守一味を探索したところ、腹巻伯耆守も同類であることがわかり、三瀬内蔵助（又兵衛の伯父）とその一党が討手を命ぜられた。内蔵助は一族郎従を率いて、伯耆守の館に押し寄せ、一人も残さず討ち取ろうとした。

伯耆守はいち早くこのことを聞いて用心していた。集まっていた家来一同が出合つて防ぎ戦ったがことごとく討取られ、伯耆守は内蔵助の嫡子三瀬六郎武成（後の大蔵）のために討ち取られた。

このたび、三瀬長門守安家（内蔵助の弟又兵衛の父）が抜群の功の

あつたことを示す次のような証文が発見されている。

熊々申入候 仍而腹巻方今度一味申談候 向後如何様成ル忠節被申候共 安家於存 替間敷候ハ申茂疎之議ニ候 既ニ西川伊豫悪行之時 我等命ヲ相続キ候儀 自他其無隠候 御旁々思 今世後世迄忘却申間敷候 兼而又両山之事 弓矢一着候ハバ其日ヨリ長門守知行可有候 若又今年中モ長引事候ハ先ヨリ如申一山之方可進置候 萬左馬介 用口上候 かしこ

三月九日

勝利(在判)

三瀬長門守殿

一六 龍造寺・神代再び和睦す

勝利父子が波佐美蟄居から再び山内に帰還してからも、山内武士の忠勇と信義は土地柄厳格のように固く、神代氏の政治もまた道に違わず、仁徳はいよいよ厚かったため、谷々の土民に至るまで、深く恩を感じ、水魚の思いで親しみ慕った。

しかし、去る川上の合戦で総敗軍の痛手をうけ、名のある歴々の士が大半討死し、気疲れしているすきに乘じて、佐嘉勢が不意に來襲し、いつまた大合戦になるかも知れない情勢であつた。

とくに西川伊豫誅伐の後、日数がたつても佐嘉からは何の沙汰もなかつた。備えをいよいよ固くして佐嘉の出方をうかがっていると

ころに、永祿五年(一五六二)隆信の使者が来て和睦を申し入れた。使の内容は次のようなものであつた。

去年川上の合戦に隆信公が大勝され、貴殿御父子は退去されたので、山内は我が有に帰し、我が方では以前の筑前長野からの御還住にこりて、形のように代官を置き、これで安心と思つているところに、再び面目のうちに御還住あつて、旧領をもとのように治められること、まことに感服のいたりである。今後は互いに誓約をかためて人質をとりかわし、縁組を結んで二度と反目することがないように、合体した気持になり申そう。もしまたこの儀に御同意でなかつたら、重ねて決戦することしよう。ただし、そちらからの攻めかけがなければ、御領内に佐嘉から先に手出しはしない。とていねいに申し入れた。

この和睦の計らいは、龍造寺の老臣納富但馬守の進言によるものであつた。

勝利は早速重臣を集めて、このことについて評議したが、意見区々にわかれて、なかなか決まらなかつた。勝利は考えた末、ただいま隆信は猛威に募つて近国にまで手を入れ、山内勢力の十倍になっている。それなのに彼の方から申し入れて和平を請うはずがない。隆信の心底を察するに、神代は強い。しかも山内は難所で、平地に住み馴れたものどもは、山内に攻め入つては自由に働けず、困難な敵対をして年を経ても無益である。所詮神代と和平して当国や他国の弱兵を従えて、大領主になれば、勝利が強剛であつても、隆信の

軍門に降るより外はあるまいと計算しているのであろう。

さればといつて、いま彼の大軍に出向つて佐嘉を滅ぼすこともおぼつかない。幸いいま隆信の請いにかかせ、真実に和睦をして領分を固め、筑前に向つて軍立てし、我が方も領地を広くして時期を待つてみよう。隆信の氣質をみると、勇謀はあつても仁徳を知らず、一旦大利を得て数国を保つことができて、後は奢り高ぶつて万事がわがままになり、一門近身の中でも信あるものは嫌い退け、倭人や輕薄表裏のものだけが榮えて、終にはわざわざいかこいの中から起り、一家を亡ぼすことできめんである。われにいま十年の齡があれば、機にのぞんで功を立てることは掌の中にある。長良、この意を含んで時を待つがよい。この際は一先ず和睦するのが良策である。と勝利自らの意見をのべたので、一族老臣はみなこの議に従つた。

勝利は隆信の使者に対面して、御和睦のこと希うところである。隆信は本身であるので、こちらから礼申すべきところである。仰せにまかせ合体の誓約を取りかわすことにしようとし、きまりの式礼をすまして使者を帰した。

その後、互いに神文の誓紙をとりかわし、当時四歳になる長良の娘と、隆信の三男鶴仁王丸(後の後藤十左衛門家信、善次郎とも言う)を縁組させ、龍造寺胤久の娘を隆信の妹として、勝利の内室にするように申し入れがあつた。勝利は老いた身であるからと受け入れようとしなかつたが、今度の和平は全く他意なく、山内への人質の意

であるから承諾するようにと、強く望まれたので、勝利も承諾し、山内に興入れがあつて、佐嘉と山内との和議が成立した。

この和談に反対する隆信の一族幕下の十九人が、一味同心して隆信にも知らせず密かに神代家を倒そうと企てていた。隆信はこれを知り、勝利をたやすく亡ぼすことはとても難しい、とくに今度の和平は真実のとりきめで、神載の上の誓約であるから、この者共の企てがよそから洩れては一大事と、山内へ急報した。

勝利はこの十九人を討ち果たすために、精兵七百騎を従えて佐嘉へ出張し、隆信に対面した。

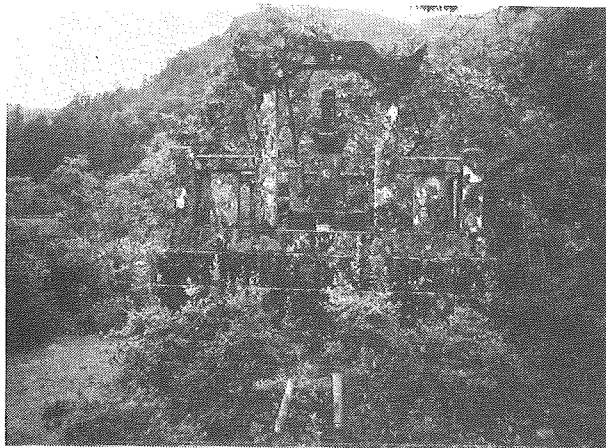
隆信は勝利に対して、急に彼等を討ち果たされることを堪忍していただきたい。彼等の誅伐はわれらに任せてもらえないだろうか。このように大勢が一味し、我意を通してきかないときは、どのように処分したらよいだろうかと意見を聞いた。

勝利はこの問いに対して、その儀ならば、かの十九人の面々に領地を加恩されるがよい。そうすればその多少によって、必ず利をむさばり、他をねたむであろう。こうして彼等の内情をうかがつておられたら、後には十九人の心は自然に別々になり仲違いするであろう。総じて大勢が徒党を組むことは成敗のさまたげとなるものであるから、この方法でさばかれたがよいかと思う。と答えた。

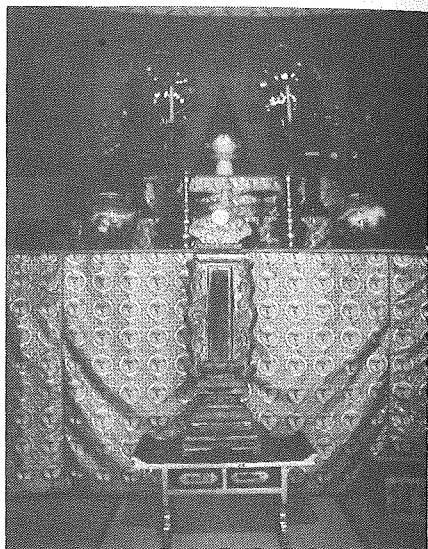
隆信はなるほどと感心して、勝利の意見に従うことを約したので、勝利は十九人誅伐のそぶりをみせないで山内へ帰城した。

その後隆信は勝利の意見のよにしたところ、案に違わず各々の

玉林禪寺の
末山、本尊
は薬師如来
である。開
山は天隅和
尚と言ひ、
永禄五年に
死去した。
その後、関
室という僧
がこの寺に
住し、年数
の新しいの
をきらつて
開山を天隅
和尚よりも
古い妙園和
尚に改めた
という。妙
園和尚は杠
山の伽葉山
清流寺の開



宗源院にある神代勝利の墓



神代勝利の位牌



勝利内室の墓

山で、時代が遙かに古いからである。
勝利は初め副島氏の娘を娶って七人の子を儲けた。第一子は姫で高木長門守に嫁す。第二子が長良、第三子は兵部太輔（川上で戦死）、第四子は清次郎（都渡城原で戦死）、第五子は惟利、第六子は姫で中島三郎に嫁す、第七子も姫で東新次郎に嫁す、母堂卒去の後、千布兵庫守入道浄真の娘を後妻として娶り四人の子を儲けた。第一子は姫で大津留弥助鎮忠に嫁す。第二子は六郎鎮利、第三子は姫で曲淵藤右エ門尉信助に嫁す。第四子も姫で杠清左衛門に嫁す。
勝利の一生は子福者であつたにもかかわらず、たびたびの合戦で、多くの子供を失ひ、波らんうちに山内の英雄は消えていった。

心が離反し、十九人のうちから隆信に逆心をいだくものが出たので小城郡芦刈の近くでこれを誅した。
後に鍋島直茂がこのことを聞いて、勝利のすぐれた計略であると深く称美したという。
勝利はこの和平後、小副川の内、大野原の上須田山の境、高原という山に一城を築き、松瀬・名尾・梅野の三氏交代制でこの城を守らせた。

一七 神代勝利病死す

神代・龍造寺の和平が成り縁組が調つてからは、三瀬と佐嘉は道が遠く、折々の交際に不便であつたので、勝利父子の居城を里近い処に築くことになり、永禄七年に勝利の居城を畑瀬山（東畑瀬）に築き、長良の居城は千布の高橋に構えて、平常はそれぞれその城に居住した。

この時、勝利は五十四歳、長良は二十八歳であつたが、勝利は家督を長良に譲つた。領民は上下みなこれを祝福し、神代家の万歳を唱えてその繁栄を祈つた。
ところが勝利は同年の暮から累年の軍労のためか、気分がすぐれず、日を追つて寝食もすまなくなり、衰弱していくので、長良はじめ奥方・一族郎従田家にいたるまで、声をひそめて心配し、神仏



の夕方、薬石効なく、畑瀬の城で永眠した。行年五十五歳であつた。

神代一門をはじめ山内の老若男女、伝え聞くものはみな嘆き悲しんだ。葬送は厳重に執り行われ、遺体は城の南西の畑瀬山宗源禪院に葬られた。

法諡、前和州太守覚譽賢利大禪定門
石塔は今も宗源院にある。この寺は勝利存命中の開基で、太陽山

の加護を祈り医療にも手を尽くしたが、そのききめもなく年を越し、月日のたつにつれて疲労は目に見え、病状は重くなるばかりであつた。腸（胃がん）という病氣であつた。胃がんではなく胸部にうけた古傷がもとであつたという説もある。何れにしても終に回復せず、永禄八年（一五六五）三月十五日

一八 千布城佐嘉勢に襲われて落城する

勝利が他界して神代家愁歎の折柄、翌四月にまた長良の嫡子千寿丸十一歳と同妹姫七歳（鶴仁王丸と縁組）の二人が疱瘡（天然痘）にかかり、三瀬城の近く古弓（河内谷）という処で死亡した。

長良をはじめ奥方や下々まで、悲歎の上に重なるこの不幸に、どうした因果のめぐりあわせかと歎き悲しんだ。

千寿丸は生存のとき、合瀬山萬福寺の虎山和尚という博学雄才の老僧を師として、手習い学問に励んでいた。

また父長良は山内での遊興として日頃「能」を好んで玩味していた。定役者七十人、外様七十人の二手に分れて交互に興行したが、たまたま千寿丸の登山を祝賀して、外様七十人が三瀬城で「能」を興行した。このときの能の芸題「松風」の「シテ」（主役）を千寿丸がつとめることになった。能が始まって千寿丸が「シテ」のせりふ「三瀬川絶えぬ涙の浮ぶ瀬にも……」と謡った。これを聞いて心ある者は、三瀬にとつては不吉の前兆ではなからうかとささやいていたが、千寿丸兄妹の死をみて、やはり不吉のまゝであつたよ、人々の話題になったという。

遺体は萬福寺に葬り、長良は菩提を弔うために池田八町を寺に寄進した。石塔は今も萬福寺にある。

このような不幸の折、永禄八年四月二十三日、龍造寺隆信は納富

但馬守と龍造寺美作守の両名を千布の城に遣わして弔問させた。

納富但馬守ら両名は長良に対面して「前に勝利公が畑瀬城で隠れ給い、いままた御子一人ならず卒去せられたこと、お悔みの言葉もない次第であります。なかでもこの程善次郎へ縁組していただいた姫のこと、返す返すも歎き入っております。しかしながら長良公御一族の中から幼少の姫をいただいて、もう一度縁を結び申すことにいたし、今後もし別心はないという旨の誓書を、隆信公からまた改めて進ぜられることになっていきます。」といった。

その夜、佐嘉勢が千布城を襲ったので、長良は畑瀬城に逃れた。

この城には勝利の逝去以来、血縁の兄弟女房たちが、別火の火合わせ（別の火を用いて精進し喪に服する）をしていたが、千布落城の急報に長良の生死もおぼつかなく思っていたところ、思いがけない入城に、上下みな一様に悦び合った。

直ちに家臣を集め評議した結果、しばらくの間筑前に難を避けることになった。

畑瀬城を出て三瀬上総助の館にしばらく休んでから筑前に入り、飯場の曲瀬河内守房助ならびに怡土郡飯盛の小田辺紹叱の両氏を頼ったが、佐嘉に近く領内もせまいといって、何れからも婉曲にことわれ、那珂郡岩戸の大津留入道宗周を頼った。宗周は快く承諾し、領内の戸坂という処に入れて様々にいたわった。また、大友家の老臣戸次伯耆守鑑連も、長良の難儀を聞き、大友宗麟に話して、時々長良を見舞ったという。

一九 神代長良三瀬城に入る

神代長良は千布落城の後、筑前の大津留氏を頼り、永禄八年（一五六五）四月から同年八月まで、那珂郡の戸坂に蟄居（ちつき）していたが、その間に龍造寺隆信は山内に再び代官を置き、前よりも守りを固くしていた。

それでも山内の諸士は、隆信に仕えようとせず、浪々の身となっていたが、何とかして長良を再び山内に安堵させようと、さまざまに心をくだいて、城奪還の時期をねらっていた。

同年八月旧民が一揆を起し、筑前戸坂の長良へこのことを知らせた。長良は大いに喜び、山内帰還の用意をしたが、あまりにも手勢が少なかったので、合瀬因幡守を使いになて、原田了榮に加勢を頼んだ。この因幡守は了榮の長臣本木吉岐守の兄であつたので、吉岐守と同道して加勢のことを願うと、了榮は承諾して足輕勢を差向けてくれた。これを聞いた曲瀬藤左衛門尉信助・小田辺紹叱・大津留宗周らも、思い思いに加勢を出した。その上山内の浪士たちも迎えに来たので、これらの軍勢を率いて、永禄八年八月二十日戸坂を出て山内に帰り、佐嘉の代官をことごとく攻め落して、山内の旧領をもとのように回復し、三瀬城を再興していよいよ堅固な城に改築した。

この城はこれより三十余年前の享禄年間に、三瀬宗利が神代勝利にゆずって以来の名城で、西北は谷深く切れ、数十丈の石壁が屏風

を立てたようになっていて、けだものも越え得ず、まして人馬が通ることは思いもよらなかった。頂上を本丸として、西北にあたつて一段低い頂を二の丸とし、切り通しを構え、石垣を高く築かせ、それより西南にあたつて少しなだらかな処に通路をつけ大手通とし、その中間に館を建てて左別当と名付け、長良はいつもここに座した。ここから南にあたつて三瀬・松瀬・杠・菖蒲・畑瀬・藤原・薙野の諸氏をはじめ歴々の屋敷を構え、また東の谷に御座所があり、本丸からそこまで九十九折の細道をつけた。この谷を河内谷または古弓谷といい、御座所を御屋形と呼んだ。（長良はこの屋形で死す）、その南北には譜代の諸士の屋敷を並べた。ことに北の二十余町の外側は高山重々として足場が悪く、西は峯を越えて大川があり、本丸の頂に登ると、山内の近境を足下に見おろし、要害無比の城郭であつた。長良がこの城を居城と定めてから十五、六年間は平穩であつた。

しかし、その頃、山内各所には、五十騎・三十騎と徒党を組んで一揆を企てたり、押し入り強盗をはたらく事件が頻発した。当時、広瀧山の松林寺に唐本の大般若と宝物が保管されていたが、豊後の盗賊七十余人がこの寺に押し入って、古経をはじめ財宝を盗んで、佐嘉の方へ逃げ下った。広瀧・松永の一族が賊を追いかけた。豊後の賊徒はこれに恐れて、大般若その他の宝物をうち捨てて逃げ散るところを、散々に追い討ちし、捨て置かれた宝物全部を松林寺に守りかえした。その後、強盗がまた現れるかも知れないというので、宝物を仁比山の宝林寺に預けたが、この経はのちに朝日山安国寺に

置かれたと伝えられている。

また、長良に害心を抱くものがあつて、熊野岳に来て一揆を起こそうとした。佐保藤太左衛門宗氏がこれを聞いて、その悪党を討ちとり、その首を持たせて、長良に言上したので、長良は感悦してその功をほめたたえた。

悪心ノ者参り候処見合セ候而生害候哉肝要ニ候 平常其方存分シ顯

然ニ候 長良一生ノ間忘却スベカラズ候 余ハ絶面可申候福所正仙

ヘ為申伝之儀 細々承得貴意候 已上

長良 御判

佐保宗氏旨返し

二〇 八ツ溝の迫合

長良はさきに千布城で納富但馬守に謀られたことを無念に思い、その仇を報いようと、永禄九年（一五六六）の春、家臣古川新四郎に委細を含め、但馬守の領地の田にかかる川水をせきとめて一滴も流さず、他の方へ流れるようにした。

納富領の百姓は、他所ではもう水田の仕事をはじめているのに、ここでは水がないので耕すことができず、困り果てた末、十人・二十人と組んで一揆を起し、此所彼所であつたばかりの紛争をくりかえした。但馬守はこの事を聞いて、長びいては百姓たちが難儀するであらう

と、五月九日嫡子納富治部大輔家繁に屈強な兵を大勢つけて、水道見まわりとし、川久保の下、徳永という所に陣取らせた。

これを聞いた川久保の神代方は、古川新四郎・白水讃岐守・篠木薩摩守・山口周防守・竹下主水以下三百余騎、白鬚大明神に陣して軍議を定め、先ず一手は同村屋形島南の沼に兵を伏せ、一手は西原の屋敷築地の陰のくぼみに置き、他の一手は戈の木井手の近くの細工町という所の土手の陰に伏兵し、足軽の兵十四、五人に鎌を持たせて夫役に仕立て、武士が数人つきそつて、八溝から徳永へ流れる川をせきとめて見守っていた。

そこに納富治部大輔が兵を従えて見まわりに来たが、この様子を見て大いに怒つて攻めかかり、追いまくつてきた。神代方は打合わせどうりに、北へ向つて引きしりぞいた。納富勢は勝に乗つてときの声をあげ、南原築地の内まで追い込んできた。

このとき三方にいた伏兵が、風が起るように一斉に立ちあがり、ときの声をあげて押しつづみ、はげしく攻めたてた。

この戦いは神代勢の勝利となり、それ以後、中佐嘉・巨勢まで以前のように神代領に復した。

この戦で打ち取つて埋めた首塚が、今でも南原にあり、また納富治部大輔の死骸は別に埋めて塚を築き、證の松を植えた。これは現在川久保の町中であつて四本松と呼ばれている。

きた。

二一 南無堂具留里の合戦

永禄十二年（一五六九）豊後の大友屋形茂鎮入道三非齊宗麟は龍造寺隆信を攻め討つため、九州六か国に陣触れして大軍を起し、自身は筑後の高良山に本陣をおき、戸次鑑連・臼杵鑑速・吉弘鑑理を先陣として、佐嘉城へ向つて軍を進めた。

神代氏が龍造寺氏と累年の不仲であることを知っている大友宗麟は、事前に神代家に内通し、今度の龍造寺攻めの案内を依頼してきた。

神代長良はこれを応諾し、自身は川久保下方の竹下という処まで出馬し、神代兵庫守を目代（代理）として神代軍の大將と定め、老巧の勇士古川佐渡守入道真清を軍奉行として松瀬・一番ヶ瀬・栗並・杉山・関屋・藤瀬その他の諸兵合せて一千余騎、戸次・臼杵・吉弘氏らと戦いの手筈や合言葉などをしめしあわせたうえ、案内役として出陣させた。

神代勢は長瀬村南無堂具留里という処の北まで押し出して陣を取り、大友の軍将吉弘は神代領域と長瀬の間に透間なく陣を布いた。こうして豊後の大軍は雲霞のように押し寄せ、佐嘉城を十重二十重に取り囲んだ。

隆信は大軍に囲まれて困窮のはて、今度こそは九死に一生のいくさ心と心に決め屈強の兵をすぐつて多布施・三溝方面から押し出して

ときは永禄十二年（一五六九）六月十三日、この佐賀勢を迎え討つために神代勢が先陣となり、大友勢は後陣に控えて待機した。

佐嘉勢と神代勢は南無堂具留里野で戦端を開始し、両軍相支えてゆずらず、兵火のために黒煙天をかすめ、互いにいどみ戦つた。

中でも松瀬・一番ヶ瀬が一際すぐれて奮戦し、一番に敵の首を取つた。神代勢は千布城の鬱憤をはらすのはいまだとばかり、命を捨てていどみかかり、佐嘉勢もまたここを先途と防戦した。しかし佐嘉勢は神代勢の勇氣におされてしりごみし、ついに打ち負けて南をさして退却しだした。これを見た後陣の大友勢もふるいたち、一人も残すなど追い討ちにかかった。神代勢はいよいよ競いかかつて城近くまで追い討ちし、敵を佐嘉城に追いこんだ。

隆信がこの一戦で神代に打ち負け、佐嘉城に籠つたことが聞こえると、国中の諸士は神代家へ降参し、あるいは自領に引きこもつたので、隆信は籠城することも困難になり、戸次鑑連のもとへ騎馬を送つて和を乞うた。

大友はこれに応じ、和平が成立したので、豊後勢は本国に引きあげ、神代長良も三瀬城へ帰陣した。

この一戦で神代軍の働きがめざましかったことの委細を、臼杵越中守から高良山の大友宗麟へ注進されたので、宗麟は非常に喜び、書簡をもって感謝する旨を伝えた。その書面は次のようなものであつた。

前 以行敵数輩被討捕被得勝利之由感悦無極候今度御心懸之次第取
鎮何様頭候旨二

無申迄候弥致励 忠事可為祝着候委細猶白杵越中可申候 恐々

六月廿日

宗 麟 判

神代刑部大輔殿

このときまた白杵越中守へも宗麟から書状がきた。

鑑連ヨリ相副へテ遣之神代刑部大輔長瀬御領ニ相働キ勝利之内注
進到来候

今度長瀬不指置忠貞之覚悟感無極候 無申迄候弥被励馳走候様可

被申候 事專一二候長良へモ以書申遣候能々御入魂肝要候猶捕上

ノ左京入道白杵掃部介可申候 恐々

七月六日

宗 麟 判

白杵越中守殿

二二 今山の合戦

永祿十二年南無堂具留里の合戦後、龍造寺と和した大友宗麟は、
翌元龜元年（一五七〇）三月中旬に、またも大軍を促して高良山に
陣を張り、戸次道雪・高橋紹運に軍兵をそえて肥前に侵入させ、佐
嘉城を包囲して攻めさせた。

神代長良もこれに応じて再び川久保まで出張し、大友への加勢と



（大和町）跡の跡
今山の陣 武家・杠左馬大輔
種満・国部和泉守
・小副川藏人・藤
原善四郎・中村壱

岐守・田中安芸守・秀島惣兵衛・陣内九郎左衛門・以下山内の精兵
八百余騎を出陣させた。

神代勢は大友軍に合流して、肥前の国の案内役として先陣を引受
け、各所に転戦していたが、三月十七日、隆信は屈強の兵大勢を率
いて小城表に出撃してきた。先陣の神代勢は備えを固め、抜群の軍
功を顕わそうと、必死の勇を奮って防戦した。この勢いにはばまれ
た佐嘉勢は若干討ちとられ、ついに敗北して城中に逃げ入った。

戸次道雪・高橋紹運から、討ち取った首帳をそえて、戦果がくわし
く大友宗麟に報告されたので、宗麟は非常に喜び、吉弘左京大輔を
使として川久保に遣わし、長良に対してその軍功を感謝し、分捕り
功名のうち、首を取って功をたてた諸士の名を一紙に記した感状を
贈った。

永祿十三年（元龜元年）三月十七日於小城表龍造寺山城守手之者懸

合防戦之砌り神代刑部大夫長良人数分捕高名之着到銘々加披見畢

頭一 田中 安芸守討之	同一 甲輩 弥三郎討之
同一 藤原 善四郎討之	同一 古川 新四郎討之
同一 陣内九郎左エ門討之	同一 横尾 源三郎討之
同一 秀島 惣兵衛討之	同一 境 孫十郎討之
同一 八坂 主水允討之	同一 真島 藤右エ門討之
同一 国部 和泉守討之	同一 井上 源十郎討之
同一 川原 主馬之允討之	同一 満岡 右京助討之
同一 栗原 治エ允討之	同一 中村 壱岐守討之
同一 三瀬 六助討之	同一 中村 新五郎討之
同一 真島 左馬允討之	同一 小久井 源五郎討之
同一 小副川 藏人討之	同一 杠左 馬大輔討之
同一 小井手左馬之助討之	同一 溝田 新助討之
同一 友貞 新十郎討之	同一 篠木 源五郎討之
同一 瓦 新七郎討之	同一 古場十郎左エ門討之
以上	

可顯其志之趣吉弘左近太輔可申候 恐々

三月十九日

宗 麟 判

神代刑部大輔殿

その後、隆信は城に在つてよく守り、佐嘉城がなかなか落ちない
ので、宗麟はこれを憤り、弟の大友八郎親貞を大将として、玖珠越

前守・森藏人大夫以下三千余騎をさしそえて、佐嘉城攻めに向わせ
た。

八郎親貞の出陣となると将士も勇みたち、国内の諸将は大友に味
方して兵数三万とも言い、この包囲陣を評して「三歳牛の毛の数の
如し」と形容された。また寄せ手の軍勢の乱暴狼籍はひどく、國中
の神社仏閣をこわし、民家を焼き払い、婦女子を侵し、財宝を略奪
するなど、言語の限りを尽くしたと伝えられる。親貞の来陣に長良は
白水讃岐守・篠木薩摩守を彼の案内に立たせ、佐嘉城を一望の中に
見下す小城今山まで導いた。

八郎親貞は今山の赤坂山に本陣を据え、豊軍の総大将となって、
同年八月上旬まで遠攻めにして総攻撃の時期をねらった。

佐嘉の城兵はほとんど退屈して戦うすべを失い、既に自害を論じ
ているところに、同月二十日の暁天に鍋島飛弾守信昌（後の直茂）
が謀をめぐらし、今山の本陣を夜襲した。

不意の夜襲に本陣は崩れ、総大将、大友八郎親貞が鍋島方の成松
刑部少輔に討ち取られたため、大友勢は悉く敗北した。

その時、神代勢は大願寺に陣していたので、反撃しようとしたが、
佐嘉勢の必死の攻撃はものすごく、その上豊軍の大将が不意に討た
れて大騒ぎになり総崩れしたため、神代勢だけでは守り返えず術も
なく、この戦で三瀬内蔵助武家・古川佐渡守真清をはじめ、執行内
蔵助・名尾平右エ門・川浪三郎左衛門・杠式部大夫・杠次郎右エ門
以下の諸兵が討死してしまった。

杠左馬大夫重満も郎従が多く討たれ、自身も傷を負い、ただ一人馬に乗って、山越しに落ちて行くところに、名のある武士と見た佐嘉勢がつきまとい追いかけて来た。左馬大夫はこれを追い払い打ち払いながら、川上の上、井手、原まで落ちのび、川上川を東へ渡ったところで佐嘉勢にとりまかれ、奮戦もむなしく、遂に力尽きて討死した。

八戸の城主であった八戸宗暘も神代勢と同じく出陣していたが、龍造寺方の勇将川原忠左エ門と渡り合って傷を負い、山内さしてようやく落ちのびたが、杠山にたどりついてから傷のために死亡した。なお、『大和町史』には、龍造寺側からみた神代側を次のように記している。

元亀元年、神代長良は友友と話し合って手引きし、龍造寺攻略のため大友親貞を総大将とする大軍が山麓一対に布陣した。大友は元来キリシタンであるため、神仏をきらい敬神崇祖の念など全くない。彼ら軍兵は社内に乱入したうえ、御宝殿金を盗み、九層の塔、経蔵、鐘樓、門、廻廊、末社の宝倉、拜殿、仏堂、瑞籬に至るまで、宏壮麗美の社殿を宋本の一切経と共に焼払った。五智如来、運慶作になる水光地藏尊も同様災禍にあった。講衆、神官、弥宜、神士等神社に勤めていた人々は、賊軍を恐れて山野に逃れ、御神体を出し奉る人もいない。かかる時、官司増寿という者、猛火に飛び込み御神体を出し奉り、合わせて百余通の証文、神宝等を無事取り出した。勅許の綸旨、院宣、裁定の通牒、奉書など文庫に一ぱいあったがことごとく焼失した。

二三 大友・龍造寺・神代の和平成る

大友氏は今山の合戦に大敗したとはいえ、数か国の大守であったので、それほどの打撃とはならず、なお隆信を討とうと軍議を凝らしていた。

神代長良は熟慮した末、この際一先づ三家の和平を調え、時節を計るべきだと考え、元亀元年（一五七〇）九月、宗麟のもとへ和平調整のための使者を送った。

中島三郎兵衛の臣に盛木入道という、弁舌さわやかな上に、豊後の案内をよく知った者がいたので、この者に意趣を含めて和睦のこゝとを交渉させた。

宗麟はこれに応じて田尻鑑種を使者として龍造寺隆信へ和平の申し入れをした。隆信ももともと大友・神代を急いで攻め討つ考えもなかったもので、願ってもない幸いだ、と悦んで和睦の申し入れに応じた。

こうして大友・龍造寺・神代の三家は、互いに和平の誓約をとりかわして、平和を収めたので、しばらくの間は隣国まで平和が続いた。

この時、隆信は神代領の内、占領していた中佐嘉の五百町の地を長良に返し、神代家の長臣三瀬大蔵に二百町、小副川左衛門に九十町の地を与えた。

三家和平の誓詞のうち、隆信から長良に渡された文面は次のよう

ごとく焼失した。

その後幾程もなく、豊後の大将大友親貞は今山にて討たれ、一門ごとくあるいは戦死あるいは自殺し敗北した。合戦は時の運とはいえ、無道を強行し、大社に放火した神罰はてき面で神霊を恐れぬ者はなかった。昔、神代勝利は当社に祈願し霊夢を受け、小城山、佐嘉山、神崎山とも領地となったが、その神威を忘れ、豊後衆を引き連れて当社を焼かせた神罰によってか、戦うごとに破れ山内を去り、筑後国草野に住居し、これによって肥前国も平穩に治まり、龍造寺家も隆盛になっていった。

この戦いで大友軍の用いた陣鐘を神代勢が持ち帰り、七山の宗廟野波大明神に奉納したといわれ、それ以後、野波神社にはもとからあった鐘とあわせて二つの梵鐘がおかれたが、大東亜戦中金属回収のため供出され、いまは、わずかに銘文だけが伝えられている。

肥前野波大明神鐘銘

肥前州神埼郡杠山当社七山宗廟

野波神御宝前鐘一口

時文明四 二月吉日

願主檀那藤原重満謹誌之

他の一つには明徳庚午（元中七年—一三九〇）の銘が刻まれているが、後者が大友の陣鐘で、大友勢がはるばる今山まで運んで来たものといひ、元来は豊後の實際禪寺の鐘であったと伝えられている。

なものであった。

再拜々敬白天罰起請文之事

一 奉対豊州為龍造寺隆信不可有別心之事

一 到神代長良為龍造寺隆信以前之宿意を差捨不可有悪行悪心之事
附り長良隆信間自然於有議者謀書者無表裏衷否可尋明候ハ勿論
長良家風衆隆信被官百姓之間喧嘩口論雖有之憲法之取沙汰可申
談之事

一 申談御領地聊不可有遷変之事附り長良家中之仁等隆信被官可罷
成之由雖申候致許容問敷候之事

右のような起請文を取りかわしても、隆信は様々の誓約違反を、以前に度々犯してきたので、長良は進んでうちとけようとはせず、なお用心怠りなく構えていた。



『神代家戦功其外覚書』